
friend and world!!

日本娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

friend and world!!

【Nコード】

N0341T

【作者名】

日本娘

【あらすじ】

世界を救う人間としてヘタリアの世界に呼ばれたバカでアホな仲良し四人組は同じく世界を救うことができる枢軸・連合の八人と命を狙われながらも平和？な日々を楽しく過ごして行くのだった……

更新が遅い＆駄文＆小説書く才能がまったくと言っていいほどない作者が書いています。

どうか生暖かい目で見てください……

ちなみに主人公四人組はバカですw

只今、毎日更新を目標にがんばっております。

主人公達の設定（前書き）

二次元大好き少女、黒須ほのかが大好きな友達を道連れにヘタリアの世界に行っちゃおうお話の設定です

作者は夢小説と二次創作の区別がわかりません。
誰か教えてもください；

これって夢小説ですか？

主人公達の設定

はじめましてりやきバーガー！

この小説の主人公その1の黒須ほのかです！
イエイ

まあこの小説の語り？は基本私です！

じゃあこの小説の主人公達を紹介するねー♪

主人公達

・黒須ほのか

まあ、さっきも言った通り主人公その1っす。12月15日生まれ
のB型です

大好きなのは二次元と後で出てくる私の友達三人とお餅です。

性格はバカですね、ハイ。夢見がちの

作者によると誰にでも優しい癒されるキャラらしいです。照れるじやまいかw

あと人見知りします シヤイなんだよ私は
姿はメガネをかけていて肩につくくらいの髪を下の方で一つ結びに
してやす！

身長は155cmくらい？

あ、ちなみに年齢は秘密でさあ まあ設定としては中学二年生かな
これで私の説明は終わりです！

次は私の親友！主人公その2でさいほのこと齋藤ほのかに説明して
もらうよ！

はじめまして、

齋藤ほのかです。

さっきまで説明してたバカと名前が同じなのは偶然です。

・ 齋藤ほのか

主人公その2です。 3月18日生まれのO型です。 ニックネームは
さいほのです。 好きなのはミス。ルです。

性格は真面目です。 たまに壊れます。 作者によると真面目なんだけ
どみんなを笑わせる事が好きで少々ツンデレらしいです。 作者殴り
てー

姿はきれいに整ったショートヘアで前髪をピンでとめてます。

身長は155cmくらい。 黒須と同じくらい

設定としては中二です

これで説明は終わりです

つぎは主人公その3のなつじだ。

はじめましてー！

なつじこと中島菜摘です！主人公その3です！

・中島菜摘

主人公その3です！

7月1日生まれのB型です！！

大好きなものは二次元とみかんゼリー！

ニツクネームはなつじ！

性格は作者いわく普段は優しいがたまにドSになる……………そんなこ

とないよ？あとで作者殴るか

姿はメガネかけてて下の方で二つ結び！

身長は……………うん……………聞かないで……………

設定では中二だよ！

説明は終わりです！

次はキング・オブ・バカの主人公その4、苑子だよ！！

はじめまして！

藪崎苑子です！

主人公4だっぺ！

・薮崎苑子

主人公その4だっぺ！

12月13日生まれのO型！

大好きなのは二次元となつじと桃ゼリー！

性格はなつじが言ってたようにキング・オブ・バカだよ！あと天然

？作者いわくこんななのに実は腹黒いだって！そうなんだぁー…？

姿はメガネに短い髪を下の方で一つ結び！前髪はない！

身長は157cmくらい？なんかよく黒須と双子みたいっていわれ

ます。そんなに似てるかな？

中二って設定！

これで全員の説明は終わり！

本編はまた今度！

それではっ！

さよーならーっ！（四人）

主人公達の設定（後書き）

..... こんな感じでやっていきます

グダグダだけでもよろしくお願いします！

感想出来たらお願いします人（´、*）

その1 四人の日常（前書き）

私は願っている

四人で一緒に行くことを……

byほのか

この話では主人公たちとヘタリアキャラはまだ出会いません

ちなみにいつどうやって出会わせるかまだ考えてません……；

その1 四人の日常

はじめまして！

あれ？こんにちはかな…

いやでも設定を読まないで見てる人もたぶんいるだろうし……

まあいいや

改めましてこんにちは！

黒須ほのかです！

この春、中学二年生になりました

あ、みなさんに言っとくことがあります

私、二次元大好きです。

まあわかりやすく言うとアニメ大好きってことです

二次元行きたいって毎日思ってます

毎日お願いしてるんですよ？

「二次元に行かせてください」って……

あ、今みんなひいたでしょ？ひいたよね？

完全に私をイタイ人って認識しちゃったよね？

私はO・T A・K U っていう奴らの仲間じゃないよ？

え？なんでオタクをローマ字にしたかって

決まってるじゃないか

カッコイイからだ

え？あんまりかつこよくねーよだって？

細かいこと気にしてたら将来死ぬよ？

あ、いずれ死ぬか

まあそれより私は日々二次元に行きたいと願ってるわけですよ

ん？いつからそんなことやってるのかだって？

ひーふーみー……三年前くらいかな？

そんなに願ってても二次元に行けてないんだからもうあきらめたら
って思ってる人、挙手！

はい、今手を挙げた奴

呪うよ？

信じていれば絶対願いは叶う！！はず！！

まあこんな私ですが、受け入れられる心の優しい方は本編を読んで
ください！

え？今まで本編じゃなかったのかって？

何言ってるんだよ

本編じゃないに決まってるじゃないか

てことで本編へレッツゴー！！

ほのか「おっはよー！！」

さいほの「おはよう。朝からウザいテンションだな」

今は7時40分。私達は毎日、私の家でこの時間に待ち合わせをして学校に行く。

いきなり毒を吐いたのは私の親友、さいほのこと齋藤ほのか。いつもは真面目だけどたまに壊れます。気をつけた方がいいよ

ほのか「あとは苑子となつじだね」

さいほの「うむ」

.....

.....

来ねええええ！！！！

ほのか「..... 来ないね」

さいほの「薮崎が事故ったんじゃない？」

ほのか「いやなつじが川に落下したのかも」

さいほの「いやいや二人ともトラックにひかれて即死したんじゃない？」

私とさいほのがとんでもないことを予想していると、向こうの橋から二人がのろのろと歩いてることに気付いた

二人が来たのを確認して私とさいほのは先に話をしながら歩き始めた

昨日のテレビの話、今日の授業の話、ミス。ルの話。

こんな中学生の普通の女の子が話している平和な空間はあるキング・オブ・バカによって破壊される……

苑子「くつろすーー!!」

ほのか「ぐほっ!!」

朝からうるさすぎる声と共に背中に痛みと重みを感じる

なつじ「チャオー」

さいほの「おー」

ほのか「苑子!! 毎朝のようにハンパない力で私を押すのはやめろって昨日言っただよ!?! 痛いんだよ!?! 吐きそうになるんだよ!?!」

苑子「えー、昨日言われたから今日はのしかかったんだよ?」

ほのか「そういう問題じゃねーんだよ」

この二人は私の友達。

私に飛び掛かってきたのは薮崎苑子。

一言で言うところキング・オブ・バカ。

もう一人ののほほんとした奴はなつじこと中島菜摘。毒舌で背が小

さい

……… なんかなつじからめちゃくちゃ睨まれてる気がするけど背が小さいのは本当だから私は気にしません

さいほの「早く行こう。黒須、今日私達の班が日直だよ」

ほのか「あ、忘れてた」

苑子「日直ちよくちよくー」

なつじ「うるさいよ?」

～学校～

ちなみに私とさいほのは二組。なつじと苑子は四組。

一年生のころは全員三組で同じクラスだったのに、離れました

学校の先生が憎いです

ほのか「さいほの学級日誌取りに行こう」

さいほの「一人で行けバカ」

ほのか「おめーも日直だろーが」

苑子「私達も行くつぺー!!」

なつじ「眠い」

苑子となつじは三分前にわかれたばっかなのにいつの間に制服からジャージに着替え、二組のドアの前にいた。

ほのか「着替えんの早っ!!」

なつじ「ついでに音楽の教科書貸してくんない? 忘れちゃった」

苑子「わっちは英語の教科書〜!!」

ほのか「忘れんなよ。成績下がるよ? あと今日英語の授業ないから持ってないよ。はい、音楽の教科書」

私はなつじに音楽の教科書を渡した

なつじはサンキューって言って笑った

さいほの「あ、私英語の教科書持ってるよ。はい」

苑子「おー!! さいほの神!!」

ほのか「早く行こー」

苑子「あとでトマト見に行つていい?」

さいほの「おー」

私達二年生は技術の授業でトマトを育てている

私とさいほのトマトは順調に育っている。ちゃんと水とあげてるし、愛情もそそいでるからね

しかし苑子となつじのはなぜか瀕死状態
瀕死状態にも関わらず苑子はトマトの世話を一生懸命やっている
そんなにトマトが食べたいか

なんだかんだで学級日誌を取りに行き、トマトの様子を見に行った

なつじ「親分、元気？」

ほのか「ううん、なつじがうざくてうざくて仕方がないから元気じゃないんだ（裏声）」

さいほの「消え失せてしまえ」（裏声）」

なつじ「いつペン死ぬか？」

苑子「黒須とさいほのトマト元気だね」

ほのか「私のトマトの名前、アントーニョだよ」

さいほの「また意味不な名前を」

さつき言った通り私は二次元が大好き、

その中でもヘタリアが大好きなのです。

苑子となつじもヘタリア好き。

さいほのは二次元に興味はないみたいだけど私達がヘタリアの話を
してばっかだから登場人物の名前は少し覚えていいるらしい

まあ、私達四人はこんな感じでいつも過ごしている

こんな個性的な私の友達だけど

私はこの三人が大好き

ずっと一緒にいたい

四人で楽しく生きていきたい

だから私は毎日願っている

もし私が二次元の世界に行けるのなら

『私とさいほの、苑子、なつじの四人で行きたい』

と……

そのころ世界会議場……

アメリカ「日本、本当にやるのかい？」

日本「はい、私達はこの計画を実行しないと大変なことになります」

イタリア「ヴェー……何の話？」

ドイツ「前から会議で話していただろう！」

イギリス「今、世界は危機をむかえている。」

フランス「どんなことになるのかわからないけどやるしかないんだよなあ」

ロシア「それでその計画はいつ実行するの？」

日本「今日ですよ？」

全員「今日っ！！！！？」

中国「いきなりすぎるある！心の準備ができてないある！」

日本「じゃ始めます」

中国「無視すんなある！」

日本「それでは実行します」

——異世界から世界を救う人間を呼び出す計画を……——

その1 四人の日常（後書き）

なんなんだこのグダグダ感

感想お願いします！

その2 日常から非日常に（前書き）

ひざまづけw

b y ほか

第2話です！

楽しく読んでいただけるとうれしいです！

その2 日常から非日常に

こんにちは、ほのかです。

やっと6時間目の授業が終わりました

今は掃除の時間

私の担当は教室前の流し

あいかわらずきたねえ

なつじ「黒須、はかどってる？」

ちつ、うるさい奴らが来ちまった

苑子「流しとか地味な掃除だよねw」

ほのか「トイレ掃除の君達に言われたかないね」

私は苑子となつじと話しながら流しをスポンジでこする

………汚れが落ちん……

なつじ「黒須、雑巾ゆすいでー」

ほか「自分でやりたまえ」

なつじ「ケチー」

苑子「なつじ行こう」

なつじ「うむ。じゃーね黒須っ！！私達はおつても目立つ掃除を
してくるよっ」

どこがだ

なんか疲れたな……

ここの掃除あきたし……

だってひたすらスポンジで絶対に綺麗にならない汚い流しを磨いて
るだけだよ？

早く掃除終われー

キンコーンカーンコーン

よし終わった

さあ帰……れないじゃん

部活あるし

帰宅部になりてー

そして今帰りの会

前から思ってたんだけど帰りの会ってやる意味あんのかな？

くだらないから図書室で借りた本読んでよ

あ、なんかよくわからないけど帰りの会終わった

私は帰りの挨拶をしてから後ろの席のさいほのを見る

ほのか「さいほの部活行こー」

さいほの「うん」

私とさいほのは荷物を持って教室を出た

ほ・さ「こーんにーちはー」

私とさいほのは音楽室へ入った

音楽室に入ってる時点でわかると思うけど、私達は吹奏楽部。

入った理由は私の三つ上のウザい姉が吹奏楽だったため、何回か演奏会を見に行っていて素敵だと思ったからだ

いかにも普通の人が吹奏楽に入る理由の一つだ

なつじ「こんにちはー」

あ、なつじだ

え？なんでなつじだけだって？苑子はどうしたって？

説明しよう

私達四人は去年の4月に吹奏楽に入った

しかし入部してから約二ヶ月後……

苑子は退部したのさっ

バカだろ

普通中学生って休みの日も部活に行ってて忙しい

しかしあいつは帰宅部

一日中家に閉じこもりパソコン三昧

自分で言っていたが休日は一步も外に出ないそうだ

だから夏休みは大変。

世間から見たら引きこもりだ

だってあれだよ？

去年の8月の上旬に苑子を含む友達と遊園地に言ったら、苑子は驚きの言葉を発した

「家出るの久しぶりだわーw」

私がこの言葉を理解するのにどれだけかかったことか

私達は忙しいのに暇&めちゃくちや暑い外に出てないだあ？

観覧車から突き落とそうかと思ったわ

宣言しよう

数崎苑子は将来二トになる

私の予想はきつと外れないだろう

まあそんなこんなで部活について

この前、新しく一年生を迎え人数が増えて音楽室が狭くなってるんじゃないかと日頃感じる私だが、吹奏楽の一員だから担当の楽器くらいあるさ

当ててごらん？

チューバ？はずれ！

クラリネット？違う

トランペット？朝ドラの主人公じゃあるまいし

一人寂しく手拍子？殺すぞ貴様

聞いて驚くなよ

フルートだ！！

あれ？もしかしてみんな驚いちゃってる感じ？驚くなゆーたやん

確かにバカでメガネでブスでアホでオタ（ry

だけど私はフルートだ

そしてたまにピッコロだ

さいほのはファゴットっていう長くて大きい低音の木管楽器

なつじはパーカッション

さーて練習しよーっと

あ、あそこでなつじとさいほのが話してる

私も入れてー！！

→練習する気まったく無し

なつじ「よう黒須。どーした？」

ほのか「暇だったからさ 何話してんの？」

さいほの「今度四人で出掛けようって話をしてたんだ」

ほのか「いーねーっ！！私アニメイトに行きたい」

なつじ「賛成」

さいほの「反対」

ほのか「なんでなんでー？ケチウイ」

さいほの「つまないもん。お前らはヘタリアのグッズを見て気持ち悪い笑みを浮かべてるし、なんか来てる人みんなオタクだし」

ほ・な「だってアニメイトだもん」

さいほの「……………」

その時、私達三人の足元に光る魔法陣が浮かび上がった

なつじ「？何これ」

さいほの「きもっ」

ほのか「うわあっ！なんか光が増えていくようっ！」

うそマジ何これ

やだやだやだまだ死にたくない
→パニック状態

さいほの「落ち着け黒ちゃん！」

ほのか「黒ちゃんゆーなああああつー！ぶっ殺すぞ！」

なつじ「はっはーん、殺してみやがれ」

ほのか「……………（無言でなつじの手をめちゃくちゃ強く握る）」

なつじ「痛い痛い痛い痛い痛い！！！」

ウケるーw

さいほの「ふざけてる場合じゃないだろうー！！ってあれ？」

気付いたら光はおさまり魔法陣は消えていた

風景はさっきと同じ音楽室

ほのか「……………なんだあ、二次元行けると思ったのにい」

なつじ「めちゃくちゃパニックってたけどな」

なつじは涙目だ

そんなに痛かったかなあ？

もう一回やってみよう

なつじ「いだだだだだだだだだだ！！！」

さいほの「やめれ」

ほのか「チッ」

私はフルートを持って練習をしに行った

あ、もう6時だ

楽器片付けよう

お腹空いた……………

今日の給食くそまずかったし

部活の反省会が終わり、私達三人は音楽室を出た

なつじ「あ」

ほのか「どーしたのスパードS少女」

なつじ「んだとゴラ。教室にノート忘れちゃった。一緒に取りに行こう」

さいほの「一人で行けハイパードS少女」

なつじ「なんでランクアップしてんの？一人はやだよー！！真っ暗だもん！」

今は5月だが6時だから学校は真っ暗だ

仕方ないついていってやろう

そのかわり……

ほのか「ひざまづけ」

なつじ「誰がするかバカタレ」

私達は今、四組の教室のドアの前に立っている

さいほの「……………早くドア開けるよ」

なつじ「やだ」

ほのか「じゃあひざまづけ」

なつじ「お前はだまってろ」

さいほの「ちっ…………仕方ねーな……………」

さいほのはドアを開けた

そこにいたのは…………

ほのか「ぎゃあああああつ！！幽霊iiiiiiiっ！！」

なつじ「ひiiiiiiiっ！！こっち来んなあああ！！」

さいほの「悪霊退散」

さいほの、なんでそんなに冷静なの

足はめっちゃ震えてるけど

うわっ！！幽霊こっち来た！！

さいほの「うわあああああつ！！来るなあああああつ！！」

あ、さいほのぶっ壊れた

ガタンッ、ズテッ

ほのか「あ……………」

幽霊こけたあ…………

ダセエ…………

なつじ「正体を現せっ!!」

なつじが教室の電気をつけた

私の足元で倒れていたのは……………

さいほの「……………薮崎？」

苑子でしたw

ほのか「なんで苑子いんの」

苑子「教科書忘れたw」

さいほの「どうせお前勉強しないからよくね？」

なつじ「じゃあ久しぶりに四人で帰ろっか」

ほのか「ていうかなんで苑子制服？」

ジャージで来ればいいのに

苑子「お腹が空いたから」

なつじ「答えになってねーよ」

さいほの「あ、信号青だ。渡ろう」

なつじ「あ、待って」

苑子「じゃあね！黒須！」

ほのか「うん」

三人はこの信号で渡る。だから帰りはここで別れてる

まあ道路をはさんで向こう側にいるけど

私は真っ直ぐのびた道を走って家の門を開けた

「ただいま!!」

（世界会議場）

日本は丸くて赤いボタンを押した

モニターに映る三人の少女の足元に魔法陣が浮かぶ

アメリカ「あれ？確か四人じゃなかったかい？」

日本「別にバラバラに連れて来てもたぶん問題はないかと」

中国「あ！！日本！魔法陣消えちゃったある！！」

日本「えっ！！？」

確かに少女達の足元には魔法陣がなくなっていた

イギリス「やっぱり四人まとめてじゃなきゃダメなんじゃないか？」

日本「そのようですね……………」

ロシア「確かこの機械は五回までしか使えないんだよね」

日本「その通りです。だから失敗は四回までしかできません」

ドイツ「慎重にいこう」

イタリア「でもあの四人は世界を救うんでしょう？そしたら敵は四人を襲って来るんじゃないかなー？」

日本「まだ敵には知られていないので大丈夫です。しかし知ってしまつたら可能性は大です」

ロシア「ねーねー日本くん。上、上」

日本「はい？」

全員が上を見ると、天井に何かがはりついていた

フランス「……………敵だな」

中国「敵あるね」

イタリア「敵だねー」

……………

全員「うわああああああー！！！！？」

アメリカ「敵なんだぞ！今の話、聞かれたんじゃないかい！！？」

日本「あわわわどうしましょう！！！」

ドイツ「あ、逃げた！！」

イギリス「逃がすかあっ！！」

イギリスは敵を追ったが……

コケた

フランス「お前ダサすぎるだろ！！」

イギリス「うるせええっ！！」

全員笑いを必死にこらえている

中国「お前らのせいで逃げちゃったある！！」

日本「ああどうしょうっ！！四人に危険が……早くこちらの世界に……しかし現在四人一緒ではないし……」

フランス「日本！！今、四人そろってるぞ！」

日本「はいっ！！？」

日本はモニターを見た。
確かに四人そろっていた。

しかし信号で別れてしまった

中国「一人………突っ走って家に帰っちゃったある………」

日本「あああああああ………!!」

ドイツ「落ち着け日本!」

イタリア「どうか四人無事でありますように………」

イタリアは心の底からそう願った

その2 日常から非日常に（後書き）

これからこの話の後書きに主人公達の細かい設定をのせようと思いますw

暇な人は見てください♪

——主人公達の細かい設定？——

┌定期テスト（勉強）の成績┐

ほのか……中くらい。でもちゃんと真面目に勉強すればいい点がとれる。一年生の一学期の中間テストで英語で100点を取ったことがあるため英語は得意科目

さいほの……上の方。でも数学がめちゃくちゃ苦手。真面目だからちゃんと勉強する。

得意科目は数学以外なら大体は……

なつじ……中くらいでほのかと同じくらい。さいほのと同様数学がめちゃくちゃ苦手。一応勉強する。

得意科目は社会

苑子……キング・オブ・バカなため中くらいの下らへん。でもがんばれば出来る子。自分ではちゃんと勉強していると言っているが、じゃあ夏休みの宿題を8月がもうすぐで終わるくらいまで手をつけないのはやめる。こっちがヒヤヒヤする。
得意科目は特に無し。

次の話でも書こうと思っています。

感想・意見がある方はじゃんじゃん書いてください

読んでくださりありがとうございました!!

その3 出来のいい姉と微妙な妹（前書き）

この人達も……苦勞してんな……

b y 枢軸 & a m p ; 連合

先程更新したものは少し手違いがあり、おかしくなっていたので治しました

これももしかしたら間違っているとありますがおもいますがよろしくです；

その3 出来のいい姉と微妙な妹

ほのか「ただいまー」

祖母「おかえりー。いつもみたいにもち食べるのかい？」

ほのか「当たり前です。じゃ出来たら呼んでください」

祖母「はいはい」

気付いた方はたぶんいないと思うが、何故か私はおばあちゃんには敬語

理由は自分でもわからない……

私は階段を駆け上がった

途中でコケて足がジンジンするががんばってのぼりきった

リビングに入ると私が関わりたくない人物ベスト3に入る嫌な奴がソファーに座っていた

「おう、ほーちゃん！！おかえりー！」

ほのか「…………お姉ちゃん…………」

ほのか「なんでお前帰ってきてんの？」

姉「テスト前だからねー」一緒にいれてうれしい？」

ほのか「近づいてくんな気持ち悪い」

この気持ち悪いのはこの前も言っただけ三歳年上の高校二年生の姉。こんなんだけど頭はよくて偏差値が私にとっては高すぎる高校に通っている

あと高校でも吹奏楽を続けている。中学ではサックスをやっていたが、今ではクラリネットをやっている。
悔しいけどうまい

しかしコイツ、中身が大変。

妄想大好きで下ネタを連発しまくる。

正直ウザい。

勉強面とかでは負けてるけど実は私の方が背がちょっと高い。ふふ

……勝った……」

妄想大好きなくせに私がアニメ好きなのが気に入らないらしく、私

がヘタリアの話とかするといつも可哀相なものを見る目で見てきやがる

殴りたくなる

チクショー……………いつか追い抜いてやる……………！！

さいほの「ただいま。」

私は玄関を開けて自分の部屋に行く

スクバを置き、ミスのDVDでも見ようかとリビングへ行ったら

弟がお菓子食べながらイ。スマイ。ブン見てやがった

弟「お姉ちゃんおかえりー！もぐもぐ。あのさもぐもぐ今日さもぐもぐ」

さいほの「食べるか喋るかどっちかにしろ」

弟「うん。もぐもぐもぐもぐ……」

食うんかい

そこはふつつ喋ろうよ

私の弟は小学四年生。

休日は野球をやっています。

たまにバ力過ぎてウザい

なつじ「お母さん、今日のご飯なに？」

母「カレー」

なつじ「ラッキー」

まあさつきも言ったように今日はカレーだ

ちょうどカレー食べたかったんだよねー

「菜摘ー」

「何？」

「カレーのお肉、ちょうだい？」

「あげるわけねーだろ」

「お姉ちゃん、お願い？」

「お姉ちゃんって言ってもダメ」

コイツは妹。

小学四年生

いつも菜摘とかバカとか言ってくるくせにたまにお姉ちゃんに変化する

あ、私の方が背は高いよ！？

勘違いしないでね！？

妹の方が小さいからね！？

「うるさいよ菜摘」

なつじ「大事なことだからな」

苑子「お兄ちゃんお兄ちゃん」

下兄「何？」

苑子「お金ブリーズ」

下兄「あげるかバカタレ」

このウザーい男はわっちの二人いる兄貴の下の方

中学三年生で卓球部部长

受験生のくせに勉強をまったくやろうとしない

→人のこと言えない

もう一人の兄は……

上兄「ぐふふふ……」

苑子「……」

下兄「……」

どうしよう、近づきたくない

苑子「お兄ちゃん……あいつ何してんの？」

下兄「たぶん……AK。48だろうな……」

上の兄は19歳。就職してるよ？

さっきも言っただけどAK。48が大好き

……キモいよ兄ちゃん

「世界会議場」

全員「……………」

八人はモニターで四人の少女の様子を見ていた

一人は姉にからまれ、一人は弟にテレビをとられ、一人は妹と睨みあっていて、最後の一人は下の方の兄と陰に隠れて怪しく微笑んでいるもう一人の兄を可哀相な目で見ていた

全員「この人達も……………苦労してんな……………」

なぜかこの四人も自分達と同じなんじゃないかと嬉しく思ってしまった
う国達だったとさ

その3 出来のいい姉と微妙な妹（後書き）

——主人公達の家族と家——

ほのか……父、母、祖母、父の妹、姉の六人で一軒家に住んでいる
さいほの……母、弟の三人ではのかの家の近くに出来ためちやくち
やでかいマンションに住んでいる。父とは別々に暮らしている

なつじ……父、母、妹の四人で一軒家に住んでいる

苑子……母、兄二人の四人で一軒家に住んでいる。父は単身赴任で
いない。でもたまに帰ってくる

なんかあつたら言ってくださいませ!!

その4 動き出す歯車（前書き）

「ごちゃごちゃ言ってねーで、早く行くぞ？」あゝあ？

b
y
苑子

今回は最初の方ちょっとシリアス

ついに運命の歯車が動き出す……………

その4 動き出す齒車

私はある夢を見た

ほのか「ぬ？ここどこ？」

私は何もない荒野に立っていた

空は曇っており雨が今にも降りそうだ。

地面には雑草しか生えておらず綺麗な花なんか一輪も咲いてない

ほのか「うつへー、何ここ？気色悪い……つか誰もいないの？おい苑子んぶー！！あれ？なんで苑子呼んだんだ？ま、いるわけないからいつか」

苑子「呼んだ？」

ほのか「苑子いたあああつ！？」

なぜに苑子いるん！？

苑子は自分から二十メートルくらい離れたところから走ってくる

苑子……走ってる時の顔がまじウケるんだけどw

やべえ、笑いこらえるの辛い……………w

私が笑いを必死にこらえて苑子の方を見た瞬間、

地面が大きく揺れた

ほのか「うわあっ！？地震！？」

苑子「黒須うー！！」

苑子は地震が起きたのにも関わらず笑顔で走っている

あの笑顔が少しムカつくのは私だけだろうか

ほのか「……………あれ？」

私はあることに気付いた

苑子の後ろに黒い何かがいる？

最初はただの苑子の腹黒いオーラだと思ったが、黒いのはだんだん大きくなり人の形となった。

人となった黒いのは手に剣を持っていて、苑子に向かって振り下ろ

そうとしていた

ほのか「苑……………っ!!」

私は苑子の名前を呼んだ

しかし、

遅かった

剣は苑子に向かって振り下ろされ、背中をきりつけた

苑子の背中からは大量の血がふきだし苑子は崩れ落ちるようになり倒れた

ほのか「ひっ……………!!」

私は少し怖いが苑子に駆け寄る。

苑子の倒れているところは血の海となっていた

私は怖くなり、誰かいないか回りを見渡した

人がいないかと思ったがいた。

死体が

ほのか「っ……………！！」

しかも死体の顔は自分の親友の

さいほのだった

さいほの死体の近くにはまた血だらけの死体があった。

ほのか「ま……………さか……………」

私の嫌な予感は悲しくも的中した

死体の顔はやはり

なつじだった

ほのか「……………はは、なんてリアルな夢なんだろうか……………こんな
シリアスな小説じゃなかったはず……………」

そうだこれは夢だ。

私は死体から離れるために荒野を走った

走って、走って、恐ろしくてたまらない気持ちをなくすために走った

ほのか「あっ……………！」

私は何かにつまづいて、地面に倒れた

体を起こし何かの違和感を感じ手を見てみた

自分の手は汚れていた。

真っ赤な血で

私は恐る恐る後ろを見た

そこにたおれていたのは、

屍と化したもう一人の自分の姿だった

ほのか「うわああああっ!!!!!!!!!!」

ほのか「うわああああっ!!?」

さいほの「ぬおっ!!?」

私は飛び起きた

近くには先程、死体として見たさいほの。

場所も荒野じゃなくて、自分は白いベッドの上にいた

ほのか「……………」

さいほの「……………」

きっ……………

気まずいよおおお!!

だってあれだよ!?

私、叫び声を上げて飛び起きたんだよ!?

漫画のワンシーンかああああ!!!?

恥ずかしいだろーがあっ!!

ほのか「……………あの…」

さいほの「なんだい、中二病」

ほのか「違エよ!!誤解すんな!!つか俺は今中二だああああっ!!」

さいほの「で、なんなの」

ほのか「ココハドコデスカ?」

さいほの「なんでカタコト?迷子の外国人か君は」

ほのか「で、どこ?」

さいほの「地球かな」

ほのか「真面目に答えるアホンダラ」

さいほの「保健室だよ。お前、4時間目の体育の時間に倒れたんだよ？」

ほのか「マジか」

あ、思い出した

体育で持久走をやっていて持久力がまったくない私は三周目あたりでぶっ倒れたんだった

ほのか「で、今何時？」

さいほの「昼休みだ」

ほのか「うそっ！給食は！？」

さいほの「さっき食べた」

ほのか「オーマイガッ！！」

嘘だああああ！！

今日は私が大好きな肉じゃがだったのに……！！

さいほの「……………なんで泣いてるん」

ほのか「泣いてないっ!!」

どうしてだろう、

涙がとまらない

なつじ「黒須、倒れたんだって？」

苑子「ダセエw」

なつじ「空気読もうよお前。思いやりって知ってる？」

保健室に入ってきたのはなつじと……………

ほのか「そ……………苑子……………」

さいほの「ほお、そんな夢見たんだ。だからあんな……………」

ほのか「忘れてください」

苑子「なんで私がそう簡単に殺されなあかんねん」

なつじ「一番簡単に殺されそうなお前が何言っとんねん」

私はさっきの夢を三人に話した（苑子が途中から思いっきり嫌な顔をしていたが見なかったことにしよう）

ほのか「マジで怖かったんよー……」

さ・な・そ「ふうん。」

……

ほのか「って、終わりがよっー!!」

さいほの「うん。黒須、今日4時間授業だからこれから帰りの会だよ。早く教室行こう」

ほのか「……………」

私は無言で頷き、ベッドから降りた

ほのか「うおっしやああああ!!今日は部活なしじゃああああ!!」

さいほの「そうだな」

なつじ「黒須ー、さいほのー、一緒に帰ろー」

苑子「あと、トマト見に行こう。」

さいほの「おう」

ほのか「あ、トマトで思い出した」

なつじ「何?」

ほのか「苑子のトマトの名前は子分。さいほのはロヴィーノって名前にしたから」

さいほの「勝手に名前つけんな」

ほのか「この小説の数少ない読者からの提案だ。使わなくてどうする」

さいほの「黙れやメガネ」

ほのか「んだとこのミスチル好き」

苑子「ごちゃごちゃ言ってねーで、早く行くぞ?あゝあ?」

さ・ほ「すいません」

腹黒苑子、降臨

苑子「やあ、子分!!」

さいほの「黒須、アントニオ元気?」

ほのか「アントニオ?」

さいほの「君のトマトの名前だよ。確かアントニオじゃなかった?」

ほのか「アントーニョじゃボケ」

なつじ「うふふ……親分は元気だなあ……」

なつじはもう可哀相なことになっているトマト——親分に話しかけている

ほ・さ・そ『なつじ、ご愁傷様……』

なつじ「あ、苑子。じょうろに水いれにいくつ」

苑子「おう!!」

苑子はなつじの隣へ言った

『トキハキタ……………』

四人「!!!!!!」

うわっ、何今の声!!

気持ち悪っ!!

その直接、なつじと苑子の足元に大きな穴が空いた

な・そ「ぎゃああああああ……………」

さいほの「なつじいいいい!!藪崎いいいい!!」

ほのか「これは……………」

そして、私とさいほのの足元にも穴が空いた

ほ・さ「ぬおわああああ……………」

私達は真っ逆さまに下へと落ちていった。

私の意識はそこで途絶えた……

く世界会議場く

八人はモニターで四人の少女が穴に落ちていくのを見ていた

日本「しまった！！敵に……………！！」

アメリカ「このままじゃ四人共殺されちゃうんだぞ！！」

フランス「世界が……………地球が終わっちゃう！！」

日本「……………大丈夫です、まだ可能性はあります……………！！」

そっという日本は真っ直ぐな眼をしていた

その4 動き出す歯車（後書き）

——主人公達の体力——

ほのか……本文の通り持久力がまったくないため駅伝とかめっちゃ苦手。でも短距離は速い。あと握力が結構ある。体力テストでは立ち幅飛びが一番得意。そして体がかたい

さいほの……持久力はほのかよりない。でもさすがに倒れはしない。体は微妙にやわらかい。体力テストでは長座体前屈が一番得意

なつじ……見た目でわかるが握力が全然ない。微妙にやわらかい。持久力はちよつとある。長距離は割と得意なため持久走が得意

苑子……握力がハンパない……；でも運動は苦手で体育は嫌い。体力テストではやっぱり握力が得意

相変わらずの駄文で申し訳ありません……

感想、お願いします！

その5 夢は現実！？（前書き）

ここはお前の墓場でああっ！！

b y な つ じ & a m p ・ 苑 子

今回は最後らへんがめちゃくちゃシリアスw

あとカタカナが多いので読みにくいと思われますがよろしくお願
い
します

その5 夢は現実には？

ほのか「うー……いたた……」

私は目を覚ました

周りを見ると曇った空、雑草しかない地面、夢で見た荒れ地とまったく同じ風景だった

ほのか「えーつとお……確か変な声が聞こえた瞬間、苑子となつじが穴に落ちて私とさいほのも違う穴に落ちたんだっけ？」

私はそうだ、さいほの探そう！てな感じで荒れ地を歩きはじめた

ブニユッ

私は踏んでしまった

さいほのを

ほのか「ぎゃあああああ！！？」

やべえっ！！さいほの顔踏んじやったよ！！

さいほの近くにいたんだ！！まったく気づかなかった！！
影うすっ！！

→顔踏んだくせにひどい奴

んー…なんか殴られそうだから……

逃げよう

ガシッ

ほのか「……………へ？」

後ろを見ると……………さいほのがどす黒く微笑みながら私の足をすん
ごい力で掴んでいた

さいほの「うふふ……………ほのかちゃん、お・は・よ」

ぎゃああああああ……………

何もない荒れ地に少女の悲痛な叫びが響いた……

苑子「ぬ？何今の叫び声」

なつじ「苑子の心の叫び声」

苑子「わっち！？」

私は今、なつじと行動してる

なんか気付いたらここにいたんだっぺ

なつじ「お前は語りもろくにできないのか」

苑子「うまれつきだっぺ！！」

なつじ「うまれつき！？小さい頃からそんなにぺっぺっぺ使ってたの！？」

苑子「使ってないよ」

なつじ「うまれつきって言葉調べてこい」

それにしてもここどこ？

なんか黒須が言ってた夢の舞台にそっくりなよーなそっくりじゃない

いよーな

なつじ「……………苑子」

苑子「何ー？」

なつじ「なんか黒いのがいる」

苑子「黒いの？黒須のこと？」

私はなつじの指さす方向を見える

ホントに黒いのがいた

ほのか「……………ひどいよさいほの」

さいほの「当たり前のことやっただけじゃ」

私はあの後、さいほのに……………ぎゃあああ！ー！思い出したただけでも恐ろしいー！

さいほの「そんなことより黒須くん」

ほのか「私にとってはそんなことで済むことじゃないんだよさいほのくん」

さいほの「あそこに黒いのがいるの、どう思うっ？」

ほのか「なっじ？」

私はきよろきよると周りを見渡してみる

確かにいた。黒いのが

ほのか「さいほの、あんなの見ちゃいけません！」

さいほの「どこのお母さんだ君は。でもあいつ、こっちに向かってくるよ」

ほのか「へ？」

私は黒いを見る。

うわぁっ！――さっきより十メートルくらい進んでる！歩くのはやっ！！

あと黒いのが人の形をしているのがだんだん見えてくる

あー……………うん

ほのか「怖あああああつ！！！！？」

私はさいほの手を掴んで逃げた

さいほの「痛い痛い痛い！！黒須！腕！とっても痛いです！！あいだだだだ！！！」

ほのか「今は逃げる方が大事じゃああああ！！腕くらい取れたって生活できんだろーが！！！」

さいほの「できねーよ！！思いつきり不便だろーが！！！」

ほのか「とりあえず早く逃げるぞ！！なんかあいつ、私達を殺しに来たみたいでめちゃくちゃ怖い！！！！！」

さいほの「んなわけ……」

『ヨク気付イタナ』

ほのか「ぬおっ！！？」

私達の後ろにいた黒いのはいつのまにか前に立っている

瞬間移動でもしたのかコイツは！！

ほのか「もしかや瞬間移動されましたか？」

さいほの「なんで敬語？」

『ピンポン！セイカーイ。』

ほのか「当たっちゃったよ！！」

さいほの「しかもコイツ、めちゃくちゃフレンドリーじゃねーか！！」

『ハジメマシテ。私ノ名前ハ、キリハデス。アナタヲ殺シニ来マシタ』

ほのか「そーかあ、キリハっていうんだー……って、え？」

さいほの「今、聞いちゃいけないキーワードを言っていたような」

『ソレデハ、計画ヲ実行シマス。』

キリハと名乗る黒いのが言った瞬間、夢のように地面が大きく揺れだした

さいほの「のわああ！！」

ほのか「おわわわ！！」

やがて揺れはおさまった

『ジューンビカンリョウ』

さいほの「何………を………」

私達は言葉を詰ませた。

キリハの後ろには

怪物がいた

苑子「……………は？今、殺し来たって言った？」

『ソウ。アナタたちハ邪魔。ダカラ殺ス』

なつじ「上等だゴラア」

苑子「なつじ！挑発しないで！」

『残りノ二人ハキリハガモウ殺シテイルダロウ』

なつじ「！！！！……………残りの二人って……………」

苑子「Wほのかのこと？」

なつじ「もうちょっと緊張感をもとうよ」

『……………オマエラトイルト調子ガクルウ。早メニヤッテシマオウ』

苑子「ちょい待ち！！君さ、なんて名前？」

『キリカ』

なつじ「なんで名前聞いたの苑子？」

苑子「なんとなく」

なつじ「とにかくキリカさん。私達、死ぬ気などまったくありません」

『ホウ。ワタシカラ逃ゲラレルトデモ？ソレハ無理ダ。ココハ才前
ラノ墓場ダカラナ！！』

な・そ「いや、」

なつじと私は戦う姿勢をとり、敵をするどく睨んだ

な・そ「ここはお前の墓場だああああっ！！」

そして、なつじと同時に地面を蹴りキリカへと突進していった

さいほの「ぎゃあああああー！！」

ほのか「さいほのおおおっ!!」

うわあああ!!どうしよう!!なんか怪物にさいほのが捕まっちゃったよおっ!!

さいほの「ぐえっ……腹がしめつけられ……」

『サア、ドウスル?』

ほのか「こっする」

私はバックに入っていた理科の教科書をキリ八に向かって思いっきり投げた

そして見事命 中

『イツダアアアアア!!?』

さいほの「……………(。o。)」

ほのか「正義は勝つ!!」

『キッ……………キサマ……………痛いじゃないか!!ウチドコロが悪いト死ヌンダゾ!?』

ほのか「殺すつもりでやったんだけど」

『オイイイツ!!才前本当二中学生イイイ!!?』

ほのか「さて……………ほかに武器は……」

さいほの「……………お前、死ぬよ？」

『ハアア！？』

ほのか「あ、あったあった♪小刀」

『ナンデ小刀持ッテンノオオオオ！！？』

ほのか「いやー、この前お姉ちゃんの引きだしあさってたらあつてさー♪」

さいほの「お前の姉ちゃんヤバくないか！？」

ほのか「ま、殺す前に聞いとくか。なんで私達みたいな普通の中学生を殺そうとしたの？」

「『お前のどこが普通の中学生だ！！』」

ほのか「あ、さいほのー！」

私はさいほのに向かって投げた

はさみを

さいほの「ぎゃああああっ！！！？」

はさみはさいほのに巻き付いてる怪物の太いツルに刺さった

さいほの「てめっ……………危ねえだろおおお!!」

ほのか「それでツル切って自分で脱出してね。私はコイツを殺るか
ら」

『（目ガマジナンデスケド……………）』

さいほのは、はさみで頑張ってツルを切ろうとしていた

私は小刀を構えキリハに突進した

私が小刀を振ったのと同時にキリハは空高く飛んだ。
キリハは怪物の頭の上に着地した

ほのか「チッ、クソが」

『ナンナノ才前!!?』

ほのか「あとさつきから気になってたんだけどお前さ、会話がカタ
カナじゃん?はつきり言って読みづらい」

『ソレハ作者ガ……………』

ほのか「じゃあ作者ー、会話文普通にしてー」

作者「ラジャー!!」

『作者出てきた!!??って普通になってるうううつ!!』

ほのか「よしこれで読者様も読みやすいだろう。さて、じゃあ私達を殺す理由を教える」

『言っわけん』

グサツ!!

『……………』

キリハは足元を見た。

つま先から1mmくらいの所にするどいハサミが刺さっていた

怪物はとても痛そうにしている（頭に刺さってるし）

さいほの「いいから話せ。あとハサミをこっちに投げてくれると嬉しいです」

『じゃあ投げんな!!』

キリハは怒りながらハサミを投げた

キリハは一息ついて話しはじめた

『ふう……………俺は下っ端だから詳しいことはわからないが、今俺の組織はある計画を実行しようとしている』

ほのか「世界征服的な？」

『まあそんな感じだ』

ほのか「当たっちゃったよ!!」

嘘のつもりで言ったのに…

『で、その計画を実行しようとしたのはいいが、問題が起きたんだ』

さいほの「問題？」

『組織はある日、この計画の邪魔となる存在がいることに気付いた。それがお前らだ』

ほのか「なんかわくわくすっぞ!!」

さいほの「だまっとけや」

『その存在がいると計画の成功はない。だから組織は邪魔者を殺そうとした。』

ほのか「よく私達だって気付いたね」

『まあな。ちなみに邪魔な存在はお前達だけじゃない。あと8人ほどいる』

さいほの「大変じゃん」

『俺はこの前、その8人を殺そうと奴らの秘密基地に行った。そこでお前らの存在を知った』

ほのか「なあるほどお………ってふざけんなあぁっ!!」

さいほの「それ思いつきりその8人のせいで私達命狙われてんじゃん!!ぶっ殺してやる!!」

ほのか「おうよ!!ヘタリアキャラなら許すけど」

私は怪物の体を昇っていつて、頭にいるキリハの所にたどり着いた

ほのか「とりあえずお前先に死ねええええ!!」

私は小刀をキリハに振り下ろした

その時、耳が痛いほど鋭い音が目の前から聞こえた

その音はテレビドラマとかで聞いたことがある銃の音に似ていた。
ていうかそれだった

キリハは銃を構えていた

私は、いきなり肩に激しい痛みを感じた

肩を見ると真っ赤な液体が大量に出ていた

ほのか「……………!!!?」

さいほの「黒須!!!」

私は何も考えられなくなった。

そしてよろけて、何mも下にある地面へと落下した

体全体に激しい痛みが襲う

声も出ないほど苦しかった

さいほの「黒須!!!」

私は仰向けになってさいほを見た

さいほの顔は青ざめていた

いきなり目の前に黒いのが現れた

『死ぬのはお前だな』

キリハはニヤリと笑い私に銃口を向けて引き金を引こうとした

さいほの「黒須うううううつうつ！……！」

私は瞼をおろした

「「ちよつと待ったあああああ！……！」」

聞き覚えのあるまぬけな声が頭に響いた

私は瞼を開けた

ほのか「……………なっ！」

『お前らなんで……………』

「「バカでアホでうざいけど大切な友達を助けにきたんだよ……！」」

なつじと苑子は声を合わせていった

「世界会議場」

ドイツ「……………日本」

日本「……………はい？」

アメリカ「俺達……………敵に殺される前にあの子達に殺されるんじゃないかい？」

日本「……………善処します」

その5 夢は現実！？（後書き）

——主人公達の出身地——ちなみに主人公達が住んでるところは埼玉県 作者が埼玉に住んでるんで

ほのか……千葉生まれ埼玉育ち。小さい頃からずっと今の家に住んでる。

さいほの……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校四年生の時にほのかの小学校に転校して来る

なつじ……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校五年生の時に転校して来る

苑子……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校二年生の時に転校して来る

ほのかだけ千葉生まれなのはお母さんがそこに住んでいたからです
！！

ほのか以外みんな転校して来ましたw

意見・感想がある方はよろしく願います!!

作者は感想とかあるとめっちゃテンションがあがりますのでw

その6 長年の夢は現実に（前書き）

逃げるが勝ちiiiiiiii!!

b y ほか・さいほの・なつじ・苑子

久しぶりの投稿w

これからは一日一回を目指そうと思います

ちなみにユーザー名を変えましたw

その6 長年の夢は現実に

ほのか「なつじ！？苑子！？」

なつじ「やつ 黒須、なんかすごいことになってない？」

苑子「黒須は血で真つ赤……………ふふふ……………」

さいほの「こえーよ！！ブラック苑子出すな！！」

苑子「あはは……………」

『あの……………存在忘れてませんか？』

ほのか「忘れてますが何か？」

『何か？じゃねーよ！！っ！かそのチビとでかいの！！キリカはどうした！！』

なつじ「おい、今チビつつた？苑子のことはでかいって言ったのに私のことはチビつつたよね？言ったよね？よーし、黒須。刀貸せ」

ほのか「あいさ……………」

私は肩の傷を押さえて小刀を渡した

『いやいやちよつと待てええええ！！そんな細かい所までいちいち……ていうかキリカ……』

なつじ「細くないんじゃないじゃボケエエエエ！！」

『人の話を聞けえええええ！！』

さいほの「んで、なんて言おうとしたの？」

そついうさいほのはいつの間にか怪物から脱出していた

『あれ、なんでいつの間にか脱出してんの？』

苑子「いやあ、鞆あさつてたらちようど彫刻刀とカッターがあつてさあ！！いやあ、切れ味いいねー！彫刻刀とカッター」

『お前らもはや中学生じゃねーよ！じゃなくてキリカは！？』

苑子「キリカつてあそこで息切れてる黒いの？」

苑子は少し離れたところにいるキリハに似た黒いのを指差した

『ぜえつ……ぜえつ……お前ら……』

『キリカ！！大丈夫か！？何があつた！』

なつじ「というわけで時は約10分前にさかのぼります」

〈約10分前〉

な・そ「ここはお前の墓場だああああっ!!」

『くっ……!!?』

キリカは身構えた

しかしいつまでたってもなつじと苑子は来ない

キリカが周りを見ると全速力で逃亡している二人を見つけた

『おいしいいいいっ!! あんだけカッコつけといて逃げんのかよ!!』

キリカは二人を追ったのであった……

苑子「そして今にいたる」

ほのか「何やってんだおまいらは」

さいほの「頭大丈夫？」

なつじ「黙れや」

苑子「それより二人は恋人ですか？」

ほ・さ・な「話そらすな」

『恋人なわけないだろう馬鹿が』

苑子「ん？今バカつつた？さりげなくバカって言ったよね？」

『私達は双子の姉弟だ。私が姉、キリハが弟』

ほのか「あ、そーいえば双子って先に出てきた方が弟か妹って知ってる？」

さいほの「なんでいきなり豆知識。つか誰でも知ってるだろ」

なつじ「つかキリハって男だったのぉぉぉお！？」

苑子「いまさら？」

『…………キリハ、なんか全然話も進まないし早く帰らないと上司に怒られるからもうやってしまおう』

『そうだね。さっさと殺ろつか』

ほのか「……………ねえさいほの、」

さいほの「……………なんだい黒須」

ほのか「私ね、さつき後ろから殺ろう　っていう不吉な言葉が聞こえた気がするんだ」

なつじ「偶然だな、私もだよ。」

苑子「うん。なんか嫌な予感がするよね。」

さいほの「だな。ま、こういうときは……………」

四人「逃げるが勝ちいいいいいい！！！」

私達は四人一斉に何もない荒野を駆け出した

『はははっ、もう遅いよ』

ほのか「ぬおっ！！？」

さいほの「またかよっ！？」

なつじ「ぎゃああああっ！！キモいいいいっ！！！」

苑子「おー」

私達は地面から出てきた怪物のツルに捕まってしまった

って、うわっ！！高っ！！

ほのか「ぎゃああああっ！！高いiiiiiiii！怖いiiiiiiii！」

さいほの「あれ、まさかの高所恐怖症？」

『あーあ、こんな雑魚共のせいで余計な時間使っちゃったよ』

なつじ「余計な時間を大幅に使ったのは君達だと思うんだが」

『黙れ。じゃあ早速やるか』

私達は一カ所に集められた

足がぶらんぶらんしててなんか嫌なんだけど

苑子「うばあああ！！死にたくないよおおお！！」

なつじ「黙つとけや、イタリア第2号」

怪物は何本もあるツルをめちゃくちゃでかいナイフに変えた

なつじ「ぎゃああああっ！！まだ死にたくないiiiiiiii！せめて
160cmをこえるまではああああ！！」

さいほの「お前さっきと態度全然違うよ？」

ほか「でもあれで斬られたくはないなあ」

さいほの「黒須、お前片腕は自由だろ。小刀でツルを早く切つてよ」

ほか「さっき逃げるときに小刀放り投げちゃった。てへっ」

さいほの「この役立たずが」

うわっ！さいほのの目がめちゃくちゃ軽蔑してんだけど

『もういいかしら？』

なつじ「よくないよくないよくないよくない」

苑子「なつじ、落ち着いて！」

『んじゃ、バイバイ』

怪物はナイフを振り下ろした

さいほの「ぎゃああああああっ！……！」

苑子「さいほの……さっきまでの冷静さはどこへ……？」

なつじ「来世は大きくなってるかなあ………」

ほか「諦めないでええっ！……！」

ナイフはすぐ近くせまってきた

私以外の三人は完全にパニックってるし……

うわぁぁんっ!!どうすればいいのおおっ!!?!

その時、私の近くが突然光りだした

光はとても温かく私達を包んだ

私は光の中で呆然としていると光から白くて綺麗な手が出てきた

——もう大丈夫です。あなたたちは絶対に私達が守ります——

私の耳に響いた声は、聞き覚えのある落ち着いてとても安心で
きる声だった

私は光から出てきた手を握った

その手は、周りの光のようにとっても温かい手だった

その6 長年の夢は現実に（後書き）

今回は黒い人達の紹介をします。黒い人達っていつでも黒いマントを着て、フードをかぶっているだけです。外見は普通の人間ですw

ーオリジナルキャラ紹介ー

・キリハ

謎の集団の下っぱの黒い 男。キリハの双子の弟。 肩につくくらいの青い髪 に蒼い瞳をもった17歳 くらいの青年

・キリカ

謎の集団の下っぱの黒い 女。キリハの双子の姉。 長く綺麗な青い髪に蒼 い瞳をもつ17歳くらいの 美女

感想、意見がありましたらどんどん書きちゃってください！！

その7 主人公は大変興奮されたようです（前書き）

ほのかチップー！

b y ほのか

今回はちょっと短めです

その7 主人公は大変興奮されたようです

ほのか「……………ぬ？」

私は目を覚ました

自分がいるのは見ず知らずの部屋。

私が寝ていたベッドではさいほのとなつじと苑子がまぬけな顔で寝ている

さーてと、

ほのか「起きろ」

私は三人の頭にほのかチョップをお見舞いした

さいほの「あいだっ！ー！」

なつじ「ぐぎっ！ー！」

苑子「ふっつ」

ほのか「おはよう諸君 いい朝だね」

さいほの「黙れ。バカ」

ほのか「ほのかチョップ!!」

さいほの「いだだっ!!」

なつじ「黒須、痛い。」

ほのか「何年も改良したからね」

さいほの「改良する暇あんなら勉強しろ」

ほのか「ほのかチョップ!!」

さいほの「いだだっ!!」

なつじ「うーん、ここどこ?」

さいほの「つか藪崎だけ起きてないね」

苑子「んゝ……むにやむにや……」

ほのか「ムカついてきたわ。もっかいやろ、ほのかチョップ!!」
私はもう一回ほのかチョップをした

さいほのに

さいほの「なんで私なんだよっ!!!!」

ほのか「なんでって……………うざかったから」

さいほの「理由になってねーよ」

その時、いきなり部屋の扉が開いた

私達三人はびっくりして硬直した

その後に私となつじは入ってきた人物を見てさらに驚いた

ほ・な「……………日本？」

さいほの「……………は？」

日本「おや、私の名前をご存知のようですね」

入ってきた人物は私が大大大大好きな日本だったのだ

ほのか「に……………日本さんでございますか？」

日本「はい。貴方は黒須ほのかさんですよね？」

ほのか「ぐはっ！！」

私はベッドに倒れ伏した

なつじ「黒須うううっ!!」

さいほの「なんなのコイツ」

日本「うわっ!? 大丈夫ですか!？」

さいほの「いつもこんななので大丈夫です」

なつじ「黒須うう!! 大丈夫かあああっ!!」

ほのか「だって…… 大好きな日本がいるし…… しかもその日本に名前を呼んでもらえるなんて……」

今なら興奮しすぎて鼻血が出そうな気がする

日本「それより、まだ寝ている方がいらっしやるんですが……」

日本はちらつと爆睡してる苑子を見た

苑子は口を開けてよだれが出ていて本当にコイツは女なのかってく
らいの顔だった

なつじ「苑子、起きろ。日本がいるよ」

苑子「んー…… んなわけねーだろチビガキ……」

なつじ「あれ? 今の本当に寝言? 起きてるよね? 完全に起きてるよね?」

なつじはブラックオーラをめちゃくちゃ出している

日本「は……………はは……………」

イギリス「おい日本、四人は目え覚ましたか？」

はい、イギリスキター……………!!!!!!

やべえよ、マジ、アニメや漫画で見るよりかけーよ。あと眉毛が立派だよ

日本「イギリスさん、一人だけなかなか起きなくて……………」

日本はまたちらつと苑子を見た

そういえば苑子ってイギリスが大好きだったよーな……………

ほのか「おい、苑子、イギリスがいる」

苑子「……………んー、黙つとけやクソ須」

ほのか「誰がクソ須だ??あゝあ?」

さいほの「落ち着けエロ須」

ほのか「なんでエロ!? 私なんも問題発言してないよね!?!?」

中国「にぎやかあるねー、どうしたあるか?」

中国もキターーーーーー!!!

ヤバイ、めちゃくちゃ女に見える

確か苑子、中国も大好きだったよーな

さいほの「薮崎、チャイナが来たよ」

苑子「……………んー、うつせーよミス。ルオタク」

さいほの「ありがとう」

どんだけ冷静なんだコイツは、しかもちょっと嬉しそうなんだけど。
なんで？

イタリア「うわぁ!!かわいい女の子達だぁ!!」

ドイツ「うるさいぞ!!お前ら!!」

イタリアとドイツまでキターーーーーー!!!

イタリアのくるん引つ張りてえええ!!

あとドイツちょームキムキなんだけど

アメリカ「騒がしいんだぞ!!」

フランス「女の子の取り合いか?」

ロシア「うふっ」楽しそうだね」

AKYとナルシとマフラーさんキターーーーー！！

AKYはなんかめちゃくちゃ声でけええ！！

ナルシはなんかうぜえ

マフラーさん、めちゃくちゃでかいっす

苑子「んー？何ー？騒がし……………」

苑子は長い眠りから目覚めて部屋の状況を見た

取っ組み合っているイギリスとフランス、お菓子を配る中国、大声で笑うアメリカ、パスタを食べはじめようとするイタリア、そのパスタを取り上げるドイツ、その様子を困ったように苦笑いする日本、ずっとニコニコ笑っているロシア……………あと自分を完全にガン見している三人

苑子「ああ、これは夢か。よし！もっかい寝よ」

全員「寝るなボケええええ！！」苑子はみんなに飛びげりをされ気絶した

その7 主人公は大変興奮されたようです（後書き）

——主人公達の趣味——

ほのか…こうみえて本を読むのが大好き。暇さえあれば本を読む。
あと絵も描くのが好き。絵の才能はそこそこ？

さいほの…ミス。ルオタクなのでそのCD聞いたりDVD見たりするのが好き

なつじ…なつじも読書好き。この人も絵を描く。絵の才能はめっちゃくちゃある。あと苑子をいじめること。

苑子…部活に所属していないため家にいる時間はほとんどパソコンいじり。妄想大好き。

感想・意見等がありましたらじゃんじゃん書いちゃってください！
！！

その8 初対面では自己紹介（前書き）

最初はグーッ！！ジャンケンポン！！

by 全員

短いです！

あと駄文です

その8 初対面では自己紹介

苑子「うう……………ひどいよみんなして……………」

苑子は涙目だ

なつじ「はははっ、ざまあw」

アメリカ「よし！！ということで小説お馴染みの自己紹介をするんだぞー！！」

シーン……………

イギリス「いきなりなんだお前；」

アメリカ「この四人と俺達8人はこれから親交を深めなきゃいけないから！！だから最初は自己紹介なんだぞー！！」

イタリア「あ、俺もそー思うー！！」

ほのか「あれ？今これから親交を深めると言っていましたたよね？」

アメリカ「うん。君達はこれからここで生活するんだぞー！！」

四人「はあああああっ！！？」

さいほの「ちよっ…………生活するって…………ミス。ルのCDとDVD
なしでどうやって生活しろというんだ!!」

苑子「そこかよ!!」

日本「心配ありませんよ。ほのかさん達の荷物はイギリスさんの魔法でこちらの世界に来てます」

イギリス「魔法じゃない、魔術だ!!」

フランス「変わんねーだろ」

なつじ「さすがイギリスだね。私達の服まである」

なつじが部屋のすみに置いてある大量の荷物の中を見て言った

ほのか「それより自己紹介すんじゃないの?やろっよ!!」

ドイツ「そうだな」

苑子「最初誰から?」

……………

全員「最初はグーッ!!ジャンケンポン!!」

全員はそろって手を出した

ほのか「……………私かよっ!!」

負けたのはただ一人、私だった

イタリア「じゃあ最初は君達四人からねー」

さいほの「わかった。早くしろ黒須」

ほのか「ちえっ……………えと、黒須ほのかです。好きな物は二次元と本と餅です。ちなみにメガネを外すと美少女って設定はありません。メガネとってもブスです。よろしくお願いします」

私はぺコツとお辞儀をした

イタリア「かわいいー!!」

ほのか「は？」

イタリア「だって……………かわいいー!!」

ほのか「理由になってませんが……………」

さいほの「次は私ね。齊藤ほのかです。あだ名はさいほの。ここに
いるメガネと同じ名前です。好きな物はミス。ルです。よろしくお
願いします」

フランス「ミス。ル？」

さいほの「はっ、ミス。ルを知らないとはクソか」

日本「フランスさん、ミス。ルというのは我が国で有名なアーティストです」

さいほの「おっ、よく知ってるな！」

日本「はい」

なつじ「次は私！！中島菜摘です！あだ名はなつじです！私のことをチビというやつはあの世行きなので気をつけてくださいね♪よろしくお願いします」

全員「こええええええええええええ！！！」

苑子「私の番だね！！藪崎苑子！永遠の14歳です！！好きなのは二次元とパソコンと妄想と……………」

なつじ「うざあああいつ！！！」

なつじは苑子にアイアンクローをかました

わー痛そー

さいほの「永遠の14歳って……お前まだ誕生日きてないから13歳だろ」

苑子「細かいことは気にしないのさっ」

ほのか「細かくねーよ」

さいほの「あっ、じゃあ貴方達の自己紹介を……」

イタリア「あっ、えと……」

ほのか「必要ないよ？」

全員「………は？」

みんなびつくりして私を見ている

ほのか「私、全員の名前知ってるもん。左からイタリア、ドイツ、日本、イギリス、アメリカ、フランス、中国、ロシアでしょ？」

日本「あ………当たってます……」

中国「なんで………我達の名前を………？」

ほのか「いろいろわけがあってね？」

ロシア「へー、面白そうだね」

さいほの「そうだ、質問がある」

イタリア「何何？」

なつじ「私達はなんでこの世界に来たの？」

苑子「あ、確かに気になる！！なんで私達はここに来たの？なんで私達は殺されそうになったの？」

ドイツ「…………それは……………」

枢・連「次回に続きます」

四人「……………」

その8 初対面では自己紹介（後書き）

——主人公達が苦手な物——

ほのか……虫、見た目がグロい食べ物、姉、B L

さいほの……アイドル、魚介類

なつじ……自分よりはるかに大きい物、変態、子供

苑子……勉強、めんどくさい事、他は不明

感想・意見がありましたらじゃんじゃん書いちゃってください！！

その9 説明は手短かに(前書き)

まっさかー!!!本気に決まってるじゃん

byなつじ

結構放置しました……

その9 説明は手短に

なつじ「さて、説明してもらおうか」

苑子「何気に時間かかったね」

さいほの「まさか作者が一週間くらい小説を放置するとは」

ほのか「疲れてたんだってさ」

なつじ「どーでもいいから早く説明」

日本「はい。えーと……どこまで知ってますか？」

苑子「説明しないのかよ」

ロシア「知ってること説明しても時間＆文章の無駄だからね」

さいほの「小説ならではのこと言うな。確か、私達が邪魔な存在とかその存在はあと8人いるとか……こんくらいまでは知ってるな」

苑子「そんなん言っとったっけ？」

ほのか「人の話ちゃんと聞いところか」

イギリス「そこまで知ってるんだな」

苑子「ふっ、すごいだろう!」

なつじ「お前知らなかっただろ」

日本「では説明します。――世界は今、とても危険な状態に陥っています」

ほのか「なぬ!？」

さいほの「ぬ?」

日本「ある組織が世界征服を企んでいるのです。組織は簡単に世界を征服できると思っていました。しかし計画は思いど通りに進まなかったのです」

なつじ「予算こえたから?」

ドイツ「それはない」

苑子「お腹空いたから?」

中国「それは絶対にある」

イギリス「組織は原因を必死になって探した。時間はかったが組織は原因をつきとめた。」

フランス「それが君達四人と」

イタリア「俺達八人だよ」

さいほの「残りの八人はお前らだったのか!？」

アメリカ「そうなんだぞ！！だから俺達は大事な話し合いをするときは秘密基地に集まってるんだぞ！」

ドイツ「お前らの様子も秘密基地で見っていた」

なつじ「見てたの！？」

さいほの「じゃあお前らなんだな」

枢・連「え？」

さいほの「私達が邪魔な存在だと気付かれたのはお前らのせい、ってことだよなあ？」

さいほのの周りにはどす黒いオーラが出ている

日本「え、いや、その……………」

→忘れたかった現実

ぎゃああああああ……………

辺りには男達の悲痛な叫びが響いた……………

ほのか「みんな大丈夫？」

なつじ「黒須はなんでやらなかったの？」

→フランスだけボコった

苑子「確かに、なんで？」→フランスの顔をボコった

ほのか「ヘタリアキャラだからね」

日本「で……………では、説明の続きをさせていただきます……………」

ほのか「ホントに大丈夫？；」

日本「大丈夫です……………で、敵は8人の国の存在はみつけたのです
が残りの4人の存在を見つけることはできなかった」

中国「だから我達は敵よりも早くその4人を探したある。で、この
前やっと見つけたある」

苑子「わっち達を？」

ロシア「うん、だから異世界にいる君達をこっちに呼び出そうとし
たんだ」

なつじ「なんでこっちの世界に？」

なつじはいつの間にかみかんを食べている
つまり話に飽きてきている

苑子はなつじからみかんを奪おうとしたがなつじに顔面を殴られて

半泣きになった

ドイツ「12人全員そろわないと世界は救えないしな。それに敵に存在を知られてしまったら危険だ」

イタリア「だから俺達は日本が作ったよくわかんないけどすごい機械で君達をこっちの世界に連れて来ようとしたんだよ！」

フランス「一回目は三人いたところで機械を発動させたんだが、どうも四人一緒じゃなきゃ無理らしくてな。失敗しちゃったw」

さいほの「じゃああの魔法陣はよくわかんないけどすごい機械を発動したんだな」

ほのか「なんか機械の名前が『よくわかんないけどすごい機械』で確定しちゃってるんだけど」

アメリカ「だからモニターで君達のこと監視してたんだぞ！」

さいほの「ほー、そのせいで私達の存在がばれて殺されかけたわけねー」

8人は一斉にそっぽを向いた

さいほの「おーい無視すんな」

イギリス「い……以上で説明は終わりだ。次はお前らだ」

ほのか「私達？」

イギリス「なんでお前達は俺達の名前を知ってるんだ？」

なつじ「ああ、そこか」

苑子「そりや疑問に思うよねー」

ドイツ「どうなんだ？」

ほか「うーんと……私達の世界にヘタリアっていう漫画があるのね。」

なつじ「その漫画の登場人物が君達だよ」

8人「……………え？」

日本「ということは……………あなたたちにとってはこの世界は二次元ということですか？」

苑子「あ、確かにそうなるね」

イタリア「ヴェ……………なんかびっくりだあ……………」

さいほの「信じるのか？」

ドイツ「嘘だったら名前を知らないだろう」

日本「ここが二次元……………」

イギリス「日本がなんか感動してるぞ」

アメリカ「そりや嬉しいだろうね!!」

ロシア「うん。まあこれで説明は終わりだね」

中国「そうある!!もう夜遅いから休むある!」

なつじ「そういえば私達、寝る場所ない……………」

日本「ここに泊まるんですよ?」

苑子「……………What?」

フランス「だからここに泊まる……………」

ほのか「二回言わなくていいわボケ」

フランス「なんかお兄さん、扱いひどくない!?!」

さいほの「そうですね」

イギリス「ははっ、ざまあw」

ドイツ「じゃあ荷物は部屋に運んどくな」

なつじ「さすがムキムキ」

苑子「失礼だなオイ」

さいほの「じゃあ行くか。ふぁーあ、眠い……………」

ほのか「んじゃ、お先に失礼するわ。おやすみー」

日本「はい、ゆっくりお休みください」

ボタン

四人は部屋を出ていった

イギリス「フランス、お前変なこと考えてないよな？」

フランス「えっ！！？ななな何言ってるんだよ！！！」

イギリス「考えてるな……………」

中国「完全に考えてるある」

日本「フランスさん」

フランス「ん？」

日本「彼女達に手を出したらどうなるかわかってますよね？」

日本は刀を出し笑顔で微笑んでいる

全員『お……………恐ろしい……………』

全員は日本を見て顔を青くしたという

苑子「なつじ、一緒に寝よ!」

なつじ「は?お前は床で寝てろっ」

苑子「うう、ひどい……」

ほのか「あ」

さいほの「どした」

ほのかは何かを思い出したようにドイツが運んできた荷物をあさりはじめた

なつじ「何やってんのクソメガネ?」

ほのか「黙れチビMEGANE」

なつじ「なんでイングリッシュ?」

苑子「なんかロボットみたいでかつこいいからじゃね?」

なつじ「チビとついてる時点で全然強そうじゃないよ」

ほのか「あつた!」

さいほの「何が……あ、それ捨てた小刀じゃん」

なつじ「そんなに探して……大事な物なの?」

ほのか「うん。家の家宝」

苑子「家宝!!?」

さいほの「普通家宝を無断で学校に持ってきたり、放り投げたりしねーだろ」

ほのか「おじいちゃんが死ぬ前に必要な時に使いなさいって……………」

なつじ「捨てるとは言ってないだろ」

ほのか「あれはノリというやつだよ」

さいほの「ノリで家宝捨てる奴がいるか!!」

ほのか「それより眠い。てことでグンナイッ!!」

ほのかはベッドになっところがつて約10秒後に爆睡していた

苑子「はやっ!!じゃ、私もおやすみー」

苑子はベッドになっところがつた瞬間、爆睡だった

さいほの「お前は早すぎるんだよ!!のび太くんか君は!!」

なつじ「床で寝ろつつただらうが」

さいほの「え、あれ冗談じゃないの?」

なつじ「まっさかー！……本気に決まってるじゃん」

さいほの「お前ホントにひどいな」

さいほのとなつじはベッドに横たわり、そのまま眠った

その9 説明は手短に（後書き）

なんも書くことがないです……

感想等がありましたらお願いします!!

その10 私の家において（前書き）

ゴルバチヨフ！！

ご、ゴルバチヨフ！！？

by 苑子・なつじ

久しぶりですなー♪

一日一回の目標はどっについてたんでしょーか……

その10 私の家において

さいほの「ふぁーあ……………もう朝か……………」

私は窓の外を見る。

とてもいい天気で太陽が眩しい

とりあえず私はアホ面で寝ている数崎とベッドから落ちてるなつじを起こす

苑子「んー……………眠い……………」

なつじ「なんか体全体が痛い……………」

さいほの「おはよう。ということじゃんけんぼん……………」

苑・な「えっ！！？……………」

数崎となつじはなんとか手を出した

苑子「あ、なんだかよくわかんないけど負けた……………」

さいほの「残念だったな。ということで黒須起こして……………」

なつじ「なんかよくわかんないけど頑張っ……………」

苑子「黒須くらい普通に起こせんじゃん……………おいクソ須、起き……………」

ドゴォッ！！

な・さ「……………」

薮崎が黒須にぶたれただけで飛んだ……………

薮崎をぶつた黒須はムクリと起き上がる

ほのか「……………朝からうつせーんだよ。黙ってるや」

なつじ「……………（。 。）」

さいほの「相変わらず寝起き悪いな……………」

黒須は寝起きがとても悪いのだった

ほのか「あゝ あん？」

さいほの「読者にガンとばすな。」

苑子「おっはよー！！」

中国「おー、おはよ……………ってどうしたあるか！傷だらけある！！」

苑子「黒須にぶたれたただだよ」

イギリス「ぶたれただけでそんなに何力所も怪我するか？」

なつじ「飛んだからね」

フランス「とんだ!？」

ほのか「……………」

アメリカ「……………なんかほのかがめちゃくちや機嫌悪そうなんだぞ……………」

ほのか「黙れメタボ」

アメリカ「……………」

アメリカは部屋のすみに体育座りしてしくしくと泣いている

ドンマイ

日本「大丈夫ですか？低血圧なんですね……………」

ほのか「……………ん」

なつじ「お、さすが日本だな。」

苑子「黒須の機嫌が少し直った」

日本「ほのかさん、朝食の用意手伝ってくださいますか？」

ほのか「ん……」

イギリス「あ、じゃあ俺も……」

全員「お前は絶対に行くな」

イギリス「……………」

しばらくして日本と黒須が作った朝食ができた

テーブルに乗せて手を合わせる

全員「いただきますーす！」

全員は朝食を食べはじめた

イタリア「あ、この目玉焼きおいしーね！ー」

日本「それはほのかさんが作ったんですよ」

ドイツ「ふむ、確かにうまいな」

ほのか「いやぁ……………」

さいほの「（完全に機嫌が直つて……）」

ロシア「……………日本くんの塩鮭、なんかすごく塩の量多くない？」

うわっ、確かに

日本「そうですか？普通だと思つのですが……………」

ドイツ「没収だ」

日本「あぁっ！！返してくださいドイツさん！お年寄りの幸せを奪わないでください！！」

中国「日本、さすがにあればダメある……………」

さいほの「うん。やめた方がいいぞ」

日本「ああ……………私は……………塩がなきゃ……………」

ほのか「ドンマイッ」

苑子「ゴルバチョフ！」

なつじ「こゝ、ゴルバチョフ！！？」

苑子「間違えた。ごちそうさま!」

ほのか「ゴルバチョフとごちそうさまをどつやったら間違えんだよ」

さいほの「はあ、おなかいっぱいだ」

日本「あ、少しいいですか?」

なつじ「う?」

日本「ほのかさん達、私の家に住みませんか?」

苑子「……………え?」

日本「あ、いやならいいんですけど……………ずっとここに住むっていうのも上司に怒られてしまうんですよ」

ほのか「え、なんで?」

イタリア「ここは世界会議場だからねー」

さいほの「そ、そうだったのか!」

ドイツ「ああ、上司に頼んで貸してもらった」

苑子「初耳なんだが」

アメリカ「言ってなかったからな!」

なつじ「ウザいんだけどコイツのテンション。一回殴っていいかこ

のメタボ」

アメリカ「やめてくれええ!!」

イギリス「とにかく、長くここに住んでと……」

さいほの「す……住んでと……?」

中国「金を取られるある!!」

ほ・さ・な「……へー」

苑子「なっ……なんだってえええええ!!?」

なつじ「苑子さんあのね、その反応ウザい」

フランス「そういうことで長くはここに住んでちゃいけない、ってことだ。ということで俺の家に……」

日本「フランスさん」

日本は刀をフランスの首筋に当てた

日本、顔が恐すぎます

つーかそれ見て黒須がめちゃくちや興奮してんだけど

フランス「に、日本!!冗談冗談!!刀おろして!」

日本「フランスさん、次は冗談でも斬りますよ」

ほか「日本マジかつこええ!!」

イタリア「あ、じゃあ俺の家に……………」

ロシア「僕の家でもいいよ?」

イギリス「仕方ないから俺の家でも……………」

日本「いえ、ぜひ私の家に!!」

中国「私の家に来るよろし!!」

ドイツ「俺の家でも……………」

アメリカ「ヒーローの家はすっごく楽しいんだぞ!!」

さいほの「え……………あ……………」

全員「どこの家にするんだ!!?」

ほか「断固日本の家でっ」

さいほの「決断早すぎるだろ」

なつじ「どんだけ好きなんだよ」

苑子「日本に一票だね。なつじとさいほのはどする?」

さいほの「私はどこでも」

なつじ「私もー。フランス以外ならっ」

イギリス「フランス拒絶されたから脱落だな」

フランス「お兄さん悲しいっ!」

苑子「うーん、どうしよう……」

さいほの「じゃあ私、黒須と一緒にいい」

なつじ「じゃあ私も」

苑子「なつじが言うならわっちも!」

ドイツ「決まりだな」

イタリア「ヴェー……残念……」

ほのか「あ、じゃあたまにみんなの家に泊まりに行ってい」

アメリカ「もちろん、いいんだぞ!」

日本「じゃ、行きましょうか」

さいほの「おう」

なつじ「苑子、お前荷物係な」

苑子「えっ!?!」

ほか「日本と一緒に住めるなんて………夢みたい!!」

私達は重い荷物を持って日本の家へと向かった

その10 私の家において（後書き）

おまけ なつじと苑子

なつじ「あ、苑子ー」

苑子「何？」

なつじ「手、出して」

苑子「うい」

なつじ「プレゼント」

苑子「マジ！？何か……………な……………」

苑子の手には黒光りする……………

苑子「す……………スコーン……………」

なつじ「ま、がんばれ」

苑子「いやいやいやー！死んじゃうー！これ食べたら死んじゃうー！」

なつじ「大好きなイギリスが作ったんだよ？食べないの？」

苑子「うぐっ……………」

苑子は手の上にあるスコーンを見る

はつきり言っ

食べたくない……

苑子「でも……大好きなイギリスのためならああああっ!!」

苑子はイギリスのスコーンを頬張った

直後、苑子は地面に倒れた

苑子は一週間近く、下痢に悩まされたという

感想・意見、よろしくお願いします（人、）

その11 やっぱ和風な家は落ち着くわぁ（前書き）

ビビビってねーっしゅー！！！

byさいほの

なんかめっちゃ久しぶりの投稿

話の展開が早すぎる&イタリアとかが出てこない

その11 やっぱ和風な家は落ち着くわぁ

前回までのあらすじっ！

苑子「なんだかんだで日本の家に住むことになりました!!」

さいほの「なんだかんだって……………」

苑子「日本ー、まだ？」

日本「もう少しで着きますよ。よろしければ荷物をお持ちしますが……………」

ほのか「大丈夫大丈夫!! 苑子、丈夫だから!!」

なつじ「ほら、さっさと歩け」

苑子「ふえー……」

さいほの「アイスうまい」

苑子「あ、アイスだ。いーなあー」

さいほの「あげねえからな」

苑子「ケチー」

日本「着きましたよ」

ほのか「おー、おつきいー!!」

日本の家は和風でなんていうか……とても大きかった

なつじ「お邪魔しまーす」

さいほの「中也綺麗だな」

苑子「日本、って感じがするっぺ」

日本「じゃ案内しますね」

日本は私達を広い部屋に案内した

ほのか「おーっ」

日本「お茶持ってくるんでくつろいでてください」

さいほの「お構いなく」

日本は部屋を出ていった

苑子はごろんと床に寝転がり思いっきりくつろいだ

苑子「んー、ひろーい!!」

さいほの「はしたないぞ」

ほのか「……………あ!」

なつじ「どうしたクソ須」

ほのか「だまれもやし」

なつじ「もっ……………!？」

ほのか「それよりさ、この家探検してみない？」

さいほの「探検？」

苑子「苑子は賛成でありますっ!!」

苑子は手を挙げた

なつじ「探検してどうすんのさ」

ほのか「ちょっと確かめたいことがあってねー!まあ暇だから行くよっ!」

なつじ「んー、私は別にいいよ?」

さいほの「えっ!勝手にするのはちょっと……………」

ほのか「大丈夫っ！！日本には皆でトイレ行ってくて言っとくから！」

さいほの「んー……まあ暇だし………」

ほのか「よしっ！ではレッツゴー！！」

日本「丸聞こえですよ」

四人「ぬおわあああぁっ！！？」

部屋を出ていこうと襖を開けたらそこには呆れ顔の日本が立っていた

ほのか「え、いや、その………み、みんなでトイレに………」

日本「だから丸聞こえでしたよ………」

苑子「だ、ダメかなあ……？」

日本「申し訳ありませんが許可は出来ませんね。しかもこの家には悪霊がたくさんいるらしいので危険だそうです。イギリスさんいわく」

さいほの「あのツンデレ眉毛のことは気にしないでいいんじゃないか？じゃあ日本と一緒にまわる、っていう条件でどうだ？」

日本「そうですね……まあそれなら大丈夫ですね。」

なつじ「やったっ！！！」

日本「私から離れないようにしてくださいね？」

ほのか「ほーい」

日本「ここがお風呂場です」

さいほの「お風呂場って……露天風呂じゃないか……」

日本「露天風呂が好きなのです……」

ほのか「うひょーっ！！でけえ！！」

なつじ「黒須、叫び声がうざい」

苑子「あ、河童だ」

ほ・さ・な・日『何が見えてるんだ………』

さいほの「外見がでかいからわかってたけど広いな、この家」

日本「イギリスさんとかの家はもっと大きいですよ」

苑子「今度忍びこんでみよう」

なつじ「せんでいい、せんでいい」

ほのか「日本、私お願いがあるんだけどー」

日本「はい？何でしょう？」

ほのか「私日本の部屋が見たいナー」

日本「ダメです」

ほのか「即答かいな」

日本「私の部屋はダメです。散らかっているので……………」

ほのか「私そついうの別に気にしないからレッツゴー……」

さいほの「えっ、ちよっ、わああああ……………」

私はさいほの手を握り廊下を走っていった

日本「あっ……………」

苑子「今のうちにレッツゴー……」

なつじ「いかねえよお前となんか」

苑子「……………（Ｔ・Ｔ）」

苑子は私達の後をついていこうとなつじの手を握ったがなつじに振り払われてしまったそうなの

ほのか「さーて、出てこい悪霊！」

さいほの「目的は悪霊だったのか？」

ほのか「んなわけないよ！私の目的はただ一つ！大好きな日本の部屋を見ることさっ」

大体部屋の中は想像できるけどね……………

さいほのと歩いていくとなんかこの先行ったら死にますよ的なオラが出ている廊下があった

さいほの「なあ、これ以上進むのはやめないか？一応人の家だし……………」

ほのか「えー、でもこれから住む家だし大丈夫じゃね？」

さいほの「でも……………」

さいほはこの先の廊下を見て青ざめている

ほのか「……………はっはーん」

さいほの「な、なんだよ……………」

ほのか「さいほの、もしかして……………」

怖いんでしょう?」

私が言つとさいほのは顔を赤くして

さいほの「は、はあっ!?!何言つてんの!?!アホじゃない!?!」

なんかめちゃくちゃあせってるさいほの。

ぶっちゃけウケるw

ほのか「いや、めちゃくちゃビビってるっしょw」

さいほの「ビ、ビビってねーっしゅ!?!」

ほのか「かんでるし」

さいほの「か、かんでねーし!今のわざとだし!」

ほのか「ツンデレめ」

とにかく行くぞ、と私がさいほのの手を掴んで引つ張るとさいほの

は絶対やーだー！！と私の手を振りほどこうとしている

こいつ、もう素が出てんな

苑子「くーろすー！！」

そんなとき、突如出てきた苑子は

さいほの「ぎゃっ！？」

ほのか「ぬおっ！！？」

さいほの体を力いっぱい押し、私とさいほの体はそのまま前に進んだ

日本「あ……………」

ほ・さ「うわあああああ……………」

私とさいほのは進んだ先にあつた深く暗い穴に落ちてしまった

苑子「……………」

なつじ「何やってんだテメエ。やっちゃった　って顔してんじゃねーよ」

日本「この先には穴があつたんですねー…………メモメモ」

なつじ「しなくていいから。」

な・苑「つか知らなかったんかい」

その11 やっぱ和風な家は落ち着くわぁ（後書き）

なんも書くことはありませんw

感想よろしくお願いします！

番外編 日本とほのかi n うどん屋（前書き）

この人の胃はブラックホールですかっ！？

b y 日本

ほのかと日本メインでほのぼの？

恋愛とかは全然意識してません

だってこの小説はギャグ中心だからっ

番外編 日本とほのかiｾﾝうどん屋

こんにちは、日本です

今日はほのかさんと二人で最近できたおいしいと評判のうどん屋に
来ています

ほかの三人も誘ったのですが用事があるみたいだったので二人で来
ました

聞いたところほのかさんはうどんが大好きらしくとても楽しみなよ
うです

ということでしたうどん屋につきました

こここのうどん屋はお店の人に注文すればすぐその場で注文したもの
が受け取れるというなんとも便利な店なのです

ほのか「うわぁー!!!日本、おいしそうだねっ!!!」

日本「そうですね。好きな物を好きなだけ食べていいですよ。」

ほのか「えっ、悪いよー……だって日本がお金出すんでしょ?」

日本「いえ、大丈夫です。ここのお店安いし……」

ほのか「そっかぁ……じゃあねー……」

ほのかさんはおぼんを持ってどれにするか迷っています

まあほのかさん女の子ですし、きっとそんなに食べないはず……

ほのか「えーと、じゃあかけうどんの大でっ!!」

えっ？

日本「け、結構食べられるんですね」

ほのか「んー？普通だよー!」

え、かけうどんの大って結構量が……

「はい、かけうどんの大だよっ」

ほのか「あ、ありがとうございます!」

「そっちの彼氏さんは何にするんだい？」

日本「えっ!？ち、違いますっ!!」

ほのか「私は光栄だけどなあ」

日本「はっ!？」

「で、何にするんだい？」

日本「あ、じゃあかけうどんの並で……………」

「あいよっ」

日本「ありがとうございます」

ほのかさんを見ると天ぷらが売っているコーナーでさつまいも天を
三つ……………」

み、三つ！！？

日本「三つも食べるんですか！？」

ほのか「え、うん。ダメ？」

日本「いや大丈夫ですが……………そんなに食べて大丈夫なんですか？」

ほのか「全っ然」

日本「す……………すごいですね……………」

私はえび天を皿に乗せて先へ進む

レジでお金を払ってほのかさんの後を追う

ホントにこの店安すぎます

ほのか「あ、日本。はい箸」

日本「ありがとうございます」

ほのか「じゃいただきますーすっ!」

日本「いただきます」

ほのかさんはちゅるちゅると一本ずつうどんを食べてく

日本「一気に食べないんですか?」

ほのか「だって熱いしい……………」

ま、まさかの猫舌……

ほのかさんは次にさつまいも天をサクサクと食べはじめる

実にいい音です

私がずっと見ているとほのかさんは私に気づいた

ほのか「日本もいも天食べる?」

日本「えっ、でも……………」

ほのか「いいのっ!! 細い体してんだからちゃんと食べなさいっ!
」

日本「むじっ!!」

ほのかさんはいきなり私の口にさつまいも天を突っ込みました

ほのか「ね? おいしいっしょ?」

日本「……………はい」

確かにサクサクしていておいしかったです

うーん、結構並でも量が多いですね…………

ほのか「ごちそうさまっ!!」

早っ!!

なんであんなに多い量をゆっくり食べてて10分近くで食べ終わるんですか……

ほのか「うーん、かけうどんの大より大きいやつってないのかなあ?
」

まだ食えとっ!?

この人の胃はブラックホールですか!?

ほのか「うーん!おいしかったあっ!」

や、やっと食べ終わりました……

ほのか「日本、」

日本「は、はい」

ほのか「今日はありがとうねっ!!楽しかったぜ!!」

ほのかさんは飛びっきりの笑顔を私に向けた

その笑顔を見て、また二人で来たいなあと思いました

………作文?

終わ
り
っ

番外編 日本とほのかいろうどん屋（後書き）

——おまけ——

ほのか「たっだいまあー!!」

さいほの「おかえり」

なつじ「どうだったあ？」

ほのか「うん、すごくおいしかったっ!!」

苑子「ヨカッタネー」

ほのか「なんでカタコト？あ、日本ー」

日本「はい？」

ほのか「おもち、食べていい？」

日本「……………」

今日学んだこと、

ほのかさんの胃はハンパない

おしまい；

感想・意見がありましたらよろしく願いします！

その12 レッスRPG!?(前書き)

ねっくらー

byなつじ

関係ありませんがアナログ放送終わっちゃいましたね……

少し寂しいです；

その12 レッツRPG!?

なつじ「なんだかんだで黒須とさいほのが死にました」

ほのか「死んでないよ!？」

さいほの「お前も説明テキトーだな」

なつじ「日本ー、どうしよう。苑子が黒須とさいほの殺しちゃった
あ」

苑子「殺しとらんよ!？」

なつじ「えー、だって黒須とさいほの声が全っ然聞こえないしー」

苑子「……………どどどどうしよう日本……………」

日本「私に聞かないでください……………泣きそうな顔でこっち見ないでください」

なつじ「つかここ日本の家だろ？なんでここにでつかい穴があるってこと知らなかったんだ？」

日本「この先にはなんもないのであまり行かないし、イギリスさんにここには近付くと言われていたので……………」

苑子「ラッキーやな」

なつじ「お前のせいで黒須とさいほのは全然ラッキーじゃないけどな」

日本「菜摘さん、苑子さん結構気にしてるので傷を広げるようなことはやめてください……」

なつじ「大丈夫っす。コイツあんま傷付かないタイプなんで」

苑子「う、うん！グスン、全然、グスン、気にしてないよ！！」

日本「いやめちゃくちゃ気にしてるじゃないですか」

苑子「グスン……………それよりさ、黒須とさいほのどうする？」

なつじ「ほっというてよくね？」

苑子「ダメだろ！！」

なつじ「えー、でもこの穴が深くなけりゃはい上がれるんじゃない？」

苑子「えっ結構深そうだよ？黒須ううっ！！さいほのおおっ！！」

苑子は穴に向かって叫んでみる

日本「返事……きませんね」

なつじ「死んだんじゃない？」

苑子「こいつひでえっ！！」

なつじ「誰かさんのせいで」

苑子はそっぽをむいた

日本「それより助けに行った方がよろしいようですね」

なつじ「うーん、めんどくさいけど行くか。骨だけは拾ってやる」

苑子「あれ！？なんかいつのまにか死んだことになってるよ！？」

なつじ「まあ、問題はどやっていくかだな」

苑子「え？この穴に飛び込めばいいじゃん」

なつじ「よし、お前最初に行け。そして死ね」

日本「この穴、見たところ結構深そうですしむやみに飛び込むのは危険かと……」

苑子「頭から落ちなきゃ大丈夫じゃね？」

なつじ「ホントお前いつぺん死ね」

苑子「さつきから死ね死ねうるさいよ！しばらくよ！？」

なつじ「やれるもんならやってみやがね。しばらくぞ」

苑子「あんだとゴラ。なめてんじゃねーぞ？」

なつじ「なめてねーよ。バカにしてんだ」

苑子「あゝあん！？」

日本「ふ、二人ともやめてください！苑子さんはキャラ崩壊してますよ！？」

苑子「いつもと変わんないと思うんだけどなー」

日本「変わりすぎですよ！今はそれどころじゃないですよ！？」

なつじ「確かに。早くしないと骨が……」

苑子「だから勝手に殺すな！」

日本「仕方ないですね。危険ですが穴に飛び込みましょう」

なつじ「了解。ってことで行け、苑子」

苑子「わっち！？ここは一番背が小さいなつじから……」

なつじ「れつつらー」

苑子「ぎゃあああああ……」

苑子はなつじに背中を蹴られ暗い穴の中に落ちていった

なつじ「さーて次は日本行く？」

日本「お、お先に失礼します……」

なつじに突き落とされることを恐れた日本は自ら穴に落ちていった

一人になったなつじは小さな木箱（こつ……骨壺！？）を持って穴に入ってしまった

苑子「ふっ！」

苑子は水の中に落ちた

どうやらあの穴の下は水らしい

苑子「っーか今回の語り、誰がやってんだろ……」

作者です

いつもの語りが不在なので

苑子「へーそうなん…。で、ここは……」

日本「うわああああ！！」

苑子「ぶごっ！！」

バsshャーーン！！

突然降ってきた日本は苑子の頭の上に落ちた

日本「げほっ……………み、水でしたか……………でもなんかいたよう……………な……」

そついう日本の近くには苑子が浮いていた

日本「うわあああ！？そ、苑子さん！？大丈夫ですか！？」

浮かんでいる苑子は手を出し親指をつきあげてグッジョップしてる

日本「いや意味わかりませんよ！！何がしたいんですかあなたは！」

苑子「ボケです」

日本「自分で言っちゃいましたよこの人！！」

苑子「いやー、それにしても死ぬかと思った」

日本「真顔で言わないでください」

なつじ「なつじアターーック!!」

苑子「ひでぶっ!!」

日本とコントをしている苑子の上に満面の笑顔のなつじが落ちてきた

日本「苑子さあぁんっ!!」

なつじ「あ、苑子いたの？邪魔だよ？」

日本「な、なんてひどいんですかあなたは!」

なつじ「さっきから思ってただけど日本、ツッコミの才能あるよ」
「」

日本「嬉しくないです。いつもツッコんでくれるほのかさんとさいほのさんがいないから……」

苑子「Wほのかいないと大変だね。結構」

なつじ「チッ、生きてたか」

苑子「ひでえ!!」

日本「さて、とりあえず水から上がりますか。今気づいたんですが

この水、地下に流れてる汚い水です」

日本の言葉を聞いて、苑子となつじは硬直した

なつじ「うつわくさっ」

苑子「くしゃい」

日本「仕方ありませんよ。早く二人を見つけてお風呂に入りたいです……………」

苑子「……………ん？日本、何あれ」

苑子が指差した方を見ると…………

なつじ「…………何あれ」

日本「まさかの悪霊じゃないですか？」

悪霊はじつと三人を見ている

日本「菜摘さん、苑子さん」

なつじ「ん？」

日本「これからやること、わかってますか？」

苑子「うん。じゃ今から3秒後にいくよ？」

なつじ「1、2、3……」

な・そ・日「逃げるが勝ちiiiiiii!!」

三人は一斉に駆け出した

ほのか「さいほのー、お腹空いたよー」

さいほの「仕方ないだろ。だいたいこんなことになったのは誰のせいだと思ってるんだ」

ほのか「苑子」

さいほの「……………そういえばそうだった」

私達は暗い道？に座り込んでいた

さつき汚い水に落ちたせいで服は臭いし……………

お腹は空いたし……………

ほのか「どうしよさいほの。このままここから出られなくて餓死してそのまま骨だけに……………」

さいほの「ネガティブだなおい！！諦めんな！どっかに出口があるかもしれないだろ！ほら、立て」

ほのか「やだ疲れた。おんぶ」

さいほの「ちっ……………」

さいほのは私をおぶった

さいほの「…………黒須」

ほのか「ん？」

さいほの「太った？」

ほのか「黙れ。首切られなくなかったらな」

私はさいほのの首に持ってた小刀の刃をあてる

さいほの「はいはい」

さいほのは歩きはじめる

さいほの「無理。重い、自分で歩いて」

ほのか「お前後で覚えてるよ」

私は仕方なくさいほのから降りて歩く

さいほの「……………ん？」

ほのか「どしたの？」

さいほの「あれ、何だろ」

さいほのが見ている方を見るとなんか黒くてモヤモヤしてる大きい物体がいた

ほのか「うわっキモ。まさか悪霊？」

さいほの「そうっぽくないか？」

黒くてモヤモヤした物体は赤く光る瞳を私達に向けた

さいほの「……………なんかやばくないか？」

ほのか「え、そう？」

黒くてモヤモヤした物体はいきなり私達に向かって突進してきた

その12 レッツRPG!?(後書き)

―主人公達のくせ―

ほのか……爪を噛む、気がつけば笑ってる

さいほの……気がつけばミスチルの話

なつじ……パニックになるとその場でくるくる回る、よくコケる

苑子……いつもの表情が笑顔、暇だと寝る

感想・意見お願いします

その13 やっぱり逃げるが勝ち（前書き）

くせだよー！

直せ今すぐー！

b y ほか・さいほの

夏休みだからなるべく早く投稿したかったんですが……

部活とかの影響で遅れてしまいました；

でもそのかわり長いです！

その13 やっぱり逃げるが勝ち

なつじ「なんだかんだで黒須とさいほの骨を拾いに行くべく私と日本とカスは穴に飛び込むのだった……」

ほ・さ「勝手に殺すな!!」

苑子「カツ……カス!!?」

ほ・さ「ぎゃああああああ!!」

こんにちは、黒須です。

え?なぜ叫び声を上げてるかって?

人間、叫びたい時だってありますよ

すみません、嘘です

まあなんで叫んでるかっという生きてるからです

ん？もうちょっと細かく？めんどくさいなー……

声が出るからです

え、なにに？あんまふざけてっとしばくぞだって？ふざけてなんかいやせんぜ。本当のことを言っただけです

さいほの「黒須、何ぶつぶつ言ってるの？」

ほのか「え、さいほの私の心の中読んだ！？テレパシー！？」

さいほの「思いつき言葉にしてたぞ。今は逃げることに集中しろ。死にたくなかったらな」

はい、私達は今逃げています

え、なんでかって？

前の話を見るアホ。

さいほの「おい、読者減らす気か」

ほのか「どうせ誰も見てねーだろ。あれ？」

さいほの「どした？」

ほのか「追い掛けて来てないよ？」

後ろを見るとさっきまですごい勢いで追い掛けて来ていた悪霊はいなかった

さいほの「お、危機一髪だ。さ、早くここから出よう」

ほのか「おう。さーて出口はどこかなー？」

私が足を踏み出したその時だった

ドオオオオン！！

ほのか「（。。。）！ー！」

さいほの「（ノ。〇。）ノー！ー！」

私とさいほの前にいきなりさっきの悪霊が現れた

赤い光を放つ瞳が私達を見る

さいほの「なっ……………」

ほのか「ぎゃああああああー！ー！」

さいほの「えっ、ちよっ、うわあああ……………」

私は無意識にさいほの腕を掴み全速力で駆け出していた

ほのか「ちょっ……なんているんだよおお!!まるでホラーじゃねーか!!」

さいほの「知らねーよ!!つかなんでお前は逃げるとき必ず私の腕を握るんだよ!!しかもめっちゃ強い力で!!」

ほのか「くせだよ!!」

さいほの「直せ今すぐ!!」

ほのか「とりあえず走れええええ!!」

私達は迷路みたいな地下を全速力で走る

私達が角を曲がった瞬間、目の前に悪霊が現れた

さいほの「うわぁっ!!来た!!」

ほのか「も、戻ろう!!」

私とさいほのはUターンしてまた走り出した

が、地面が濡れていたから私はすべった

さいほの「お前ダセエな」

ほのか「ひでえっ！助けるよ！ほら、今にも襲い掛かってきそうだよ！！」

さいほの「さらば、君のことは忘れないよ。って、くばっ!」

私は走ろうとしたさいほの足を掴み転ばした

「ほのか お前も道連れじゃ」

さいほの「なっ、離せええええええ！！」

ほのか「誰が離すか！！私が死んでお前が生きてるなんて納得できるか！！」

さいほの「なんだよその理由！いいから離せ！！は・な・せつ
！！」

「ほのか、道連れ言うところやろ！」

私達がごちやごちや言つてゐる間に悪霊は黒くモヤモヤした手と思われけるものを私達にのばしてくる

さいほの「わ、わ！死ぬ！たぶん死ぬ！絶対死ぬ！」

「ほのかは、ざまあ！」

さいほの「お前も死ぬだろ」

悪霊の手が私の体に触れようとした瞬間

悪霊の前に突然人が現れて銀色に光る武器で悪霊を真つ二つに斬った

悪霊は斬った所から消えていった

ほのか「……………へ？」

さいほの「……………ほ？」

日本「お二人共、大丈夫ですか？」

そこに立っていたのは片手に刀を持った日本だった

さいほの「に、日本！？なんでここに……………！？」

なつじ「どっかの誰かさんがほのかとさいほのを落としちゃったから追ってきたんだよ？」

ほのか「なつじ！！……………と苑子」

苑子「え、何その付け加えられた感じ」

日本「さて、全員揃いましたしここから出ましょうか」

ほのか「え、でもどうやって？」

日本「歩き回ってれば着きますよ、きっと」

さいほの「曖昧だな……」

苑子「隊長！また悪霊が来ました！」

なつじ「隊長誰だよ」

日本「やはりそう簡単には出られませんか……」

日本はまた刀を構える

うん、カッコイイ

なつじ「顔がキモいよ」

ほのか「黙ってようか」

日本は目の前に来た悪霊を簡単に切り払った

さいほの「強っ！でも進むたびに襲われてちゃ大変だよな」

日本「仕方ありませんね。みなさん、走りますよ」

苑子「え、日本は大丈夫なの？」

日本「爺だつてやるときはやりますよ」

日本はにっこりと笑う

ほか「うわっ、また来た!!」

日本「行きますよ!!」

なつじ「おーいえー」

私達は床がぬけているのですべらないように気をつけながら走った

全速力で走ったが悪霊はどんどん私達との距離を縮めている

さいほの「くっそ……………追いつかれるぞ!!」

苑子「ど、どうすんのさ日本!!」

なつじ「なんか除霊とか出来ないの!？」

日本「あ、その手がありましたか!!」

ほか「できるんかい」

日本「はい、イギリスさんから一応除霊するための方法などは教わっています。」

なつじ「イギリス、出番ねーくせに陰で活躍してるね」

さいほの「よし、じゃあ今すぐやれ」

日本「唐突ですね。やりたいのはやまやまなのですが除霊をするにはかなりの時間と広い場所が必要です」

ほのか「それは難しいね……………」

苑子「え、普通にできんじゃない」

なつじ「バカ。お前はホントにバカ。キングオブバカ!!」

苑子「そんなにバカバカ言わないでよ!!!; 傷つくんだけど!!!;」

さいほの「いや普通にバカだろ。この状況で出来ると思うか?」

苑子「うん、思う」

ほのか「こいつバカじゃない、大バカだ」

日本「でも除霊をすることによってこの地下にいる全部の悪霊を掃うことができると思われます」

なつじ「な、なんて便利なんざましよう!!」

さいほの「どっかの主婦か、君は」

ほのか「あ、日本!! なんか雇見つけたよ!!」

苑子「で、出口!？」

日本「とりあえず中に入りましょう!!」

日本が扉を開け私達は中に入り込んですぐに扉を閉めて鍵もかける

ほのか「ここは……………部屋？」

中は地下にもかかわらず普通のうす暗い部屋だった

さいほの「地下なのに部屋？日本の家って複雑怪奇だな」

日本「私にとっては欧米文化の方が複雑怪奇なのですが……………」

苑子「そんなことより日本、ここならできるんじゃない？除霊」

なつじ「さ、さっきまでバカだった苑子がまともな意見を……………
！？」

苑子「そろそろ怒るよ？」

日本「確かにまともな意見ですね……………。やってみますか」

苑子「に、日本まで……………」

日本はお札のようなものを取りだした

そしてぶつぶつと呪文のようなものを言いはじめる

ドンドンッ！！

さいほの「ちっ、来たか!!」

苑子「わわわ、どうしよう日本!!」

日本「……………」

日本は苑子の言葉を無視した

苑子「シカトっすか!？」

なつじ「違うよ大バカ野郎!!日本、集中してるからお前の声なんて聞こえないんだよ!」

確かに日本は目を閉じてずっと呪文を唱えている

かなり集中しているようだ

苑子「……………よしっ!」

さいほの「藪崎?」

苑子「日本ががんばってるんだから、ちゃんとそれに集中できるように私達もがんばりますかっ」

なつじ「苑子……………お前、ただのバカだと思ってたがちゃんと頭も使えるみたいだな」

苑子「ふふっ、私だって本気だせばこんなの朝飯前だよ」

さいほの「私も同感だぞ、藪崎」

ほのか「私もっ」

苑子を先頭に私達は扉の前に並ぶ

私は小刀、さいほのははさみ、なつじはこのぎり（なんで持ってる！？byさいほ）、苑子は彫刻刀を手に持ち準備を整える

苑子がドアノブに手をかけ私達に目で合図をする

全員地了解を得た苑子は力いっぱいドアノブを回した

そして壊した

「「「「.....」」」」

ちらつと見たらわからないがよく見ると黒くモヤモヤした……

ほのか「って悪霊!？」

なつじ「この部屋に入ろうとしてるみたいだね、さすが悪霊」

ほのか「感心してる場合ですかっ!？」

苑子「日本!！」

日本はまだ呪文を唱えている

さつきまではぶつぶつとしか聞こえなかったが今ははっきりと聞こえている

さいほの「たぶんもう少して除霊できるかもしれない! 私達もできるかぎりのことをするぞ!！」

さいほのははさみで壁からでてきている悪霊の手を刺す

悪霊は手を激しく動かしさいほのをはらう

さいほのはその勢いで壁にたたきつけられた

さいほの「ぐっ!！」

ほのか「さいほの!！」

さいほのは痛そうに顔を歪める

さいほのはしばらくは動けそうにない

それなのに悪霊はあっさりと部屋の中に入ってきた

苑子「えええっ！？なんてあっさりと！！」

悪霊はとても素早い動きで日本に突進していった

なつじ「日本っ！！」

しかし悪霊が日本に攻撃する瞬間、日本から凄まじい風が吹き暗い部屋が一気に明るくなった

悪霊はそのせいで日本に近寄れなくなっている

日本「去れ、悪しき霊達よ……………」

日本が呟いた瞬間、目の前にいた悪霊は消え辺り一面を白い光りが

包み込んだ

ほのか「ほえ？」

光りが消えたと思うと、そこはさっきと変わらない暗い部屋だった

部屋の真ん中には日本が立っている

私の近くではさいほの達もいる

日本「ふう、除霊完了です」

苑子「マジか！？すげえ！！」

さいほの「じゃあもう出てこないんだな」

日本「はい、もういないはずですよ」

なつじ「よかったー……」

ほのか「さすが日本だねー！！」

日本「ありがとうございます。さ、早く家にもどりましょうか」

日本はドアの方に歩いていき、ドアノブを握ろうとする

日本「……………え？」

なつじ「どしたの日本？」

日本「ドアノブが……………ありません」

四人「……………あ」

そう、さっきの苑子のばか力でドアノブは壊れてしまったのだ

つまり

「「「「「出られない……………」「「「「」

いろんな意味でピンチなのだった

さいほの「や、やっと出られた……」

ほのか「なにもかも全部苑子のせいだよ」

苑子「え！？ちやうよ！？」

なつじ「いや、お前だろ」

日本「出口がすぐ見つかったですね……」

私達はなんだかんだあの部屋を出て、そしてまたなんだかんだで出口を見つけて家に帰って来れたのだ

日本「みなさん、お先にお風呂どうぞ。私は着替えてきます」

ほのか「わ、ありがとう！！」

苑子「行こうなつじ！！」

なつじ「いや」

苑子「え！？」

さいほの「早く行け」

四人は風呂場に走っていった

苑子「いい湯ーだーなー」

なつじ「古っ」

ほのか「気持ちいいー！」

さいほの「広いな。泳げるよ」

ほのか「泳ぐな」

日本『着替え、置いときますねー！！』

なつじ「あ、はい！！」

苑子「そろそろ出よっか」

さいほの「……………なんだこれは」

ほのか「え？何が？」

先に出たさいほのが置いてあった着替えを見て言った

なつじ「何って……………うわっ」

なつじもそれを見てすごく嫌な顔をした

苑子「何ター？……………え」

あの苑子まで驚いている

なんだか知りたかったので三人の所に行った

ほのか「……………ええ……………」

そして驚いた

日本がさつき着替えと行って置いてったものは

四人「メイド服……………？」

あの人は私達にコスプレさせるらしい……………

私達、日本の家でうまくやってけるかなあ……………

その13 やっぱり逃げるが勝ち（後書き）

—おまけ ほのかとなつじ—

ほのか「そういえばさなつじ、なんかいつのまに私のことほのかって呼ぶようになったよね？なんで？確か前まで黒須つつ呼んでたよね？」

なつじ「んー？成り行きだよ？」

ほのか「な、成り行き？」

さいほの「じゃ私も名前呼びにして！」

なつじ「ほのかとかぶるからダメ」

さいほの「……………」

→名前がほのか

あだ名を変えてもらえないかわいそうなさいほのであった

感想・意見がありましたらよろしく願いします！

質問とかがあったらどんどん聞いてください！

その14 夏は暑いのだ (前書き)

くたばれエロじじい！

by ほのか、さいほの、なつじ、苑子

夏休み編です！

一応、長編の予定です

その14 夏は暑いのだ

私達は日本の家でダラダラしていた

今は夏でとても暑いから扇風機をまわしてそれぞれ好きなことをやっている

しかしそんな平和な空間はほどなくしてある人物にぶっ壊されるのであった

アメリカ「みんなーっ！！夏なんだぞーっ！！」

なつじ「知ってるよ消え失せるカス」

アメリカ「……………」

苑子「なつじの毒舌が夏になってパワーアップしてるよ」

ほか「暑さのせいでイライラしてるからね」

さいほの「今敵にまわすのは危険だね」

なつじのパワーアップした毒舌をあびせられたアメリカは太陽の下で立ち尽くす

日本「みなさんスイカ切ってきた……ってアメリカさん？」

日本は自分の庭で立ち尽くしている汗ダラダラのアメリカを見て驚く

苑子「スイカスイカー♪」

苑子は日本が持っている皿の上からスイカを一つとってかぶりつく

日本「ア、アメリカさん？何やってるんですかそんなところで……

…」

アメリカ「ああ、日本……俺って死んだ方がいいのかな……？」

日本「何があっただんですかアメリカさああん！！」

ほのか「なつじがやったんだよ」

なつじ「違うし、ちょっとお話したけだし」

さいほの「お話したけであんなのになるか？」

なつじ「なるなる」

苑子「ならねーだろ」

日本「と、とにかく中に入ってください。」

アメリカ「いいんだ……このまま立ち続けて倒れて死んじゃっても俺は別にいいんだ……」

日本「菜摘さん、あなたホント何したんですか。アメリカさん精神的に大ダメージくらっちゃってますよ」

苑子「イギリスのスコーンなみに攻撃力がばねえ」

なつじ「だからホントにちよつとからかったただけだってば」

さいほの「もういいから引きずって中いれるぞ」

ほのか「うん、よいしょ」

苑子「汗ダラダラじゃんっ！！ぬれてるよ!!」

さいほの「我慢しろ」

アメリカは私と苑子が無事、回収しました

アメリカ「うはー、涼しいんだぞー!!」

ほのか「なんでクーラーつけてんの？節電……」

日本「その話はなしの方向で……」

苑子「東北、早く復興できるといいねー……」

さいほの「そうだな、原発もなんとかしてほしいな」

なつじ「というわけで私達は東北地方の方々を心から応援しています。」

ほのか「クーラーががんの部屋にいる人達と言えることじゃないよね」

日本「そういえばアメリカさんは何故私の家に？」

アメリカ「スイカうまうま」

日本「アメリカさん、話聞いてます？」

アメリカ「スイカうまうま」

日本「……………そろそろ斬りますよ？」

アメリカ「でさ、今は夏真っ盛りじゃないか！」

ほのか「うわ、めっちゃ早口なんだけど！聞き取れなかったんだけど！」

なつじ「スイカの種がめっちゃ飛んできたわ。苑子、アメリカから飛んできた種もろ受けてるし」

さいほの「もう一回言ってくんない？」

アメリカ「こんな暑い中だとイライラして頭もおかしくなっちゃうだろ！？」

苑子「ダメだコイツ人の話聞いてねえ」

ほのか「私のイライラの原因、ほとんどアメリカなんだけど」

さ・な・苑・日「同感」

アメリカ「だからみんなで夏らしい……………」

なつじ「ゆつくりしゃべんなかったらハンバーガー没収な」

アメリカ「だ〜か〜ら〜み〜ん〜な〜で〜……………」

さいほの「ねえコイツ殴っていい？」

アメリカ「だ、か、ら、み、ん、な、で」

苑子「うん、次ぶざけたらぶっ飛ばすから」

アメリカ「で、だからみんなで夏らしいことをしようじゃないか！」

日本「やつとまともに……………」

ほのか「最初っからそうしろよ」

アメリカ「ってことでみんなで海に行くんだぞ！」

さいほの「あー、海か……………」

全員「って、海!?!」

アメリカ「うん、海。輝く海なんだぞ」

なつじ「それはわかるけどさ、なんで海？ほかに夏らしいことあるっしょ。祭とか」

アメリカ「だってフランスが『夏は海しかねーだろ！』って……………」

さいほの「あいついつか殺す」

苑子「絶対なんかたくらんでるよね」

ほのか「ありえる。でも海、いいかもね！」
さ・な・そ「え」

ほのか「だって家でダラダラするよりさ、みんなで遊びに行った方が楽しいと思わない？」

苑子「まーそうだけど…」

さいほの「海に行くことに反対はしていないが私達、水着持ってないぞ？」

ほのか「……………あ」

なつじ「でも荷物の中に学校のスクール水着が入ってたよ」

ほのか「ま、それでいつか」

フランス「断固反対iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

日本「わあっ!?!」

さいほの「お前どっから出てきてんだよ」

フランスはいきなり庭にある池から飛び出してきた

なつじ「つかなんて格好してんだよお前!?!」

しかも全裸で

ほのか「うわっ!?!お前そんなに自分の肌を他人に見せたいのかよ!?!変態だ、こいつ変態だよ!?!」

苑子「おまわりさああん!?!ここに变な、いや変態がいますううううう!?!」

フランス「警察呼ばないでよ!?!」

日本「なんでフランスさん全裸なんですか」

フランス「お兄さんスタイルだからかな」

日本「一度、病院に行かれた方がよいと思います」

アメリカ「日本、いつものハッ橋どっかいつちやってるんだぞ」

フランス「とにかく、お兄さんはスクール水着は断固反対です!?!」

さいほの「なんでだよ」

フランス「だってスクール水着とかはポロリとかが……」

ほ・さ・な・苑「くたばれエロじじい……」

フランス「ぐはっ!!」

フランスは四人に撃退されて、池に沈められたとさ

続く

その14 夏は暑いのだ (後書き)

くおまけく

イタリア「……………ドイツ」

ドイツ「なんだ？」

イタリア「あんまり言いたくないんだけど……………」

ドイツ「……………」

イタリア「……………出番欲しいよ!!」

ドイツ「それはみんなもだ」

イギリス「なんでフランスが出て俺は出ないんだよばかあつ!!」

ロシア「フランスくん、あれ出たっていえるの？最後死んでたよね？」

中国「フランスはああいうキャラある。オチ担当のキャラある」

というわけが出番のないキャラの雑談でした

その15 水着選びは大事（前書き）

釘バットが一番しっくりくる

by なつじ

いやぁ……夏ですねぇ…

宿題………終わんねえよ………

その15 水着選びは大事

アメリカ「でも、スクール水着で海って恥ずかしいかい？」

さいほの「んーまあ確かに……」

なつじ「まあ小学校の水着みたいに名前が堂々と書いてないのはいけどね」

苑子「でもぶっちゃけ地味だね」

ほのか「ちつ、めんどくさいけど買いに行くか」

私は立ち上がって、池に浮かんでいる死体を「死んでないよ!？」（フランス）「見る

ほのか「アメリカ」

アメリカ「ん？なんだい？」

ほのか「フランスを鎖でぐるぐる巻きにしてあとこのお清めの札をフランスに張って庭にある蔵の奥深くにある古い箱にいれてしつかり鍵をかけてきて」

アメリカ「任せるんだぞ!!」

苑子「了解しちゃうのかよ!!」

アメリカは池に浮かんでる死体という名のフランスを担ぎ蔵へと走って行った

ほのか「よしっ、邪魔者もいなくなったことだし買いに行くか!!」

さいほの「いなくなっただっていつか封じたよね」

ほのか「あいつは封印するべきなんだよ。わかってくれ」

なつじ「封印っつーか完全に死ぬだろ」

ほのか「気にしない、気にしない」

日本「気にしてください……」

ほのか「さー、行くぞー」ってことで日本、どこぞ。ドア出して

日本「当たり前のように言わないでください」

苑子「うーん、やっぱショッピングモールとか涼しーね」

私達はなんだかんだで近くの大きいショッピングモールに到着し、水着売場に来ている

なつじ「さ、さっさと選んで帰っぞ」

なつじは大人の水着を見始める

苑子「あれ？なつじは子供用の水着売場を見るべきなんじゃない？」

なつじ「ぶっ殺すぞ」

ほのか「さいほの、これ似合うんじゃない？」

そう言って私はさいほのに水色のフリフリワンピースの水着を見せる

さいほの「えー……ちょっと子供みたいじゃないか？なつじならまだしも……」

なつじ「みんなそろって殺されたいの？」

釘バットを握るなつじ

日本「菜摘さん、釘バットって古い……」

なつじ「釘バットが一番しっくりくる」

日本「答えになってませんよ……」

アメリカ「お腹空いたんだぞ……」

ほのか「アメリカは水着買わないの？」

私はお腹が空いて少し元気がないアメリカに聞く

アメリカ「俺かい？俺は去年とかなので大丈夫……………」

「なーにが大丈夫だ」

苑子「わ、イギリスじゃん」

アメリカの隣には久々の登場、ツンデレ眉毛のイギリスがいた

イギリス「ツンデレ眉毛ってなんだばかあ！！」

ほか「語りに文句つけないでよー。私あんま国語得意じゃないからこういうの苦手で……………」

イギリス「苦手とか得意じゃないの問題じゃないだろ！」

なつじ「なんでいんのイギリス？」

イギリス「水着を買いにな……………つかお前、物騒なもん持ってんなあ……………」

なつじが持つ釘バットに軽く引くイギリス

さいほの「太って入らなくなったか？」

イギリス「ちげーよ、もうそろそろ変えた方がいいと思ったただけだ。んでアメリカ、お前去年の水着が着れると思ってんじゃねーぞ……………」

アメリカ「ど、どういうことだい？」

イギリス「そのまんまの意味だ。お前去年と比べて結構太っただろ」

アメリカ「そういえばお腹が出てきたような……」

アメリカは自分の腹を見て少し不安そうに言った

イギリス「だから買い替えた方がいいぞ」

アメリカ「イギリスのおごりがいいんだぞ」

イギリス「誰がおごるかバカ」

イギリスとアメリカは二人で男性用の水着売場に歩いていった

ほのか「日本は買わなくて大丈夫？」

日本「私は泳がないので……」

さいほの「えー、なんでだよー。せっかくの海なんだから泳ごうぜ
っ」

なつじ「さ、さいほのがめずらしく マークを……」

苑子「明日は雪が降るね」

さいほの「そんなにダメか？ダメなのか？」

さいほのは少し落ち込む

ほのか「みんな泳いだ方が楽しいでしょ？ほら、買った買った！」

私は日本の背中をおす

日本「え、でも今貯めてるお金は夏コミのための……………」
ほのか「はよ行け」

日本「……………はい」

日本は渋々アメリカ達の所へ歩いていった

しっかし水着種類いっぱいあんなあ……………
迷う……………

なつじ「水着、ワンピース系のやつで大丈夫だよね？」

苑子「うん、まあそうだよね」

アメリカ「買ってきたんだぞー！！」

さいほの「早っ！！」

アメリカが袋を持って笑顔で帰ってきた

ほのか「イギリスと日本は？」

アメリカ「まだ買ってなかったから置いてきたんだぞー！！」

ほのか「ほー」

なつじ「苑子、これいいと思わない？」

苑子「あ、いいねー！！それでいいんじゃない？」

なつじ「そーだね。買ってくる」

なつじは黄色のワンピースの水着を持ってレジへと走る

しかしそのなつじの前に

フランス「ワンピース断固反対iiiiiiii!」

なつじ「ぎゃああああああ!」

変態が現れた

さいほの「なんでお前なんだよ、ちゃんと封印したはずじゃ……

……」

イギリス「お前ら、コイツ封印したのか……」

苑子「わああ、いつの間に」

いきなり現れたイギリス&日本。

日本「はい、買い物邪魔になると思ったので……」

フランス「今、お兄さんすごく傷ついたんだけど……」

ちょっと涙目になったフランス

アメリカ「それにしてもよく抜け出せたねー!!」

フランス「お兄さんに出来ないことはないからね」

ほのか「次はもっと頑丈にするか」

フランス「やめてやめて!!」

さいほの「お前ワンピース断固反対ってじゃあビキニにしろってか？」

フランス「その通り!!」

なつじ「やだよー、私ワンピースがいい」

フランス「ダメだあっ!!ワンピースもポロリがない……………」

ほ・さ・な・そ「くたばれえええ!!」

フランスはまた四人にボコボコにされたとき

その15 水着選びは大事（後書き）

くおまけく

中国「なんであへんに出番があつて我にはないあるかあああああ
！！」

ドイツ「落ち着け中国！！」

ロシア「中国くん、君だけじゃないんだよ？出番がないのは」

イタリア「ヴェ……………」

またまた出番がない人のトーク

イギリスは無事脱出できたようです

その16 目的地まで行く時が1番楽しい(前書き)

なんか……周りがすごく綺麗に見える……!!

byイギリス

気付いたら8月の後半になっていた……

し、宿題……;;

その16 目的地まで行く時が1番楽しい

さいほの「もう集合時間だぞー!」

ほのか「苑子が起きないからー!」

なつじ「そうだよー」

苑子「だって眠かったんだもん……」

日本「は、はあ……はあ……」

私達は走っていた。

本当は8時に駅に集合（どこの？っていう質問はなしで）のはずだったのだが、家を出たのは集合時間の3分前。家から駅まで行くのにかかる時間は約15分。つまり完ぺきに間に合わないのだ。

遅刻したら絶対ドイツに怒られるよ……

ほのか「つ、疲れた……」

さいほの「朝ごはん食べてないし……」

苑子「なんでこんなことに……」

なつじ「お前のせいだろ」

日本「ぜえ……はあ……」

ていうか日本さっきからしゃべってないよね？しゃべってるみたいになってるけど」「の中、息の音だよね？

さいほの「あ、駅がみえてきた！！」

なつじ「家から駅まで走れば8分ちよつと……っ」と

苑子「メモせんでええわ」

ほのか「とにかく走るぞーっ！！」

私達は体力に限界が近付いている日本の手を引き、駅まで全速力で走って行った。

イタリア「ヴェ……来ないね……」

イタリアは駅前に立ってる銅像の台に座って心配そうに呟く

ドイツ「ああ……もう集合時間から5分たっているのだが……」

ドイツも腕時計を見て言う

イギリス「寝坊か？」

アメリカ「俺は楽しみで眠れなかったんだぞ!!」

フランス「ホントお前は子供だなあw」

中国「それよりフランス、お前なんでそんなに傷だらけあるか」

ロシア「中国くん、それはふれちゃいけない所だよ。」

フランス「大丈夫さ!いずれ消えるのさ」

イギリス「漫画とかだといつの間に傷とかが治ってるよな」

アメリカ「お決まりなんだぞ!」

イタリア「ヴェ……?あ、あれ日本達じゃ……」

イタリアは指を差して問う

イタリアが指差した方向を見ると全速力で走る少女四人とその少女達に腕を引かれながら苦しそうだが必死に走っている青年がいた

中国「ほのか達ある!」

ロシア「あの五人、かなり汗だく……」

ほのか「ぜえ……………遅れて……………はあ……………ゴメ…ゲホッゴホッ!!」

ドイツ「と、とりあえず息を整えてから話せ!」

私達はとりあえず深呼吸をする

ある程度、落ち着いたので私は話しはじめた

(日本はまだつらそうだが)

ほのか「いやあ遅れてゴメン。苑子が昨日の夜に遅くまでアニメ見てたから朝起きれなくて私達四人で必死に苑子を起こしたんだけど苑子がやっと起きたのは7時50分。そこから準備やらなんやかんやをして、家を出たのが7時57分なんですぜ、旦那」

中国「つまり原因は苑子あるね?」

苑子「録画をする機械が壊れちゃってリアルタイムで見るしかなかつたんだよ……………」

ほのか「私も見たかったよ……………夏。友人帳。どーだった?」

苑子「お腹が痛くてトイレずっと入ってたから見過ごした」

ほのか「意味ねーじゃん。つかどんだけトイレいたんだよ」

ドイツ「まあ行くか」

なつじ「あれ?説教とかしないの?よかつ……………」

ドイツ「してほしいか?」

ニヤリと笑うドイツ
不気味すぎますぜ隊長

なつじ「滅相もございません」

DSなドイツにはDSななつじも恐れてしまうのだった

そして私達は切符を買い、電車に乗り込む

さいほの「何分くらいで着く？」

フランス「2時間ちよつとかな？」

長いなオイ。

まあ暇なのでー……

ほのか「なんかよくわからんゲームウー!!」

苑子「イエーイツ!!」

苑子だけのつてくれた

ありがとう苑子。

日本「なんかよくわからないゲーム……と言いますと?」

よくぞ聞いてくれた日本

私はどこからか箱を取り出し説明を始める

ほのか「まずココに箱があります。この中には様々な罰ゲームが書かれた紙が大量に入っています。じゃんけんで負けた人はこの箱の中の紙を一枚ひき、紙に書かれている罰ゲームに従ってもらおうというゲームです。ちなみにじゃんけんに負けた人に拒否権はありませんのでそこらへんは理解してくださいまし」

なつじ「ほう、なんかおもしろそうだな。やるか！」

なつじはやる気満々だ

イギリス「でも俺は……「最初はグーッ！じゃんけんぽいッ！」話聞けよー！」

全員が手を出す

イギリスがグー、それ以外の人はパーだった。

ほのか「さあイギリス、ひきなさい」

イギリス「俺かよ……」

イギリスは嫌そうに箱に手をつ込み、三角に折られた髪を一枚取り出す

それを私は受け取って内容を読み上げた

ほのか「『右隣の人を10分間見つめ続ける』だってさ」

イギリスは反射的に右隣を見る。

イギリスの右隣に座っているのは…………

イギリス「……フランス……………」

イギリスは思いっきり嫌そうな顔をする

フランス「うふふ、お兄さんドキドキちゃう」

イギリス「気持ち悪いんだよ！！嫌だこんな……………」

ほのか「拒否権はないのよイギリス？」

私はイギリスの耳元であることを囁いた

聞き終わった途端イギリスの顔がどんどん青ざめていく

ほのか「これをばらされなくなったら従うことね」

イギリスは涙目になりながらフランスを見つめ始めた。
(というか睨んでいる)

ほのか「さー、始めましょー」

全員「(コイツはイギリスに何言っただ……………」

イギリス「っておい、俺はフランスを見たままじゃんけんすんのか？」

ほのか「もちのろん」

イギリス「ど、どうやれと……………」

ほのか「はい、じゃーんけーん」だから話聞け！！」ポイツ！！」

イギリス、チヨキ

それ以外、グー

イギリス「またかよ！！」

アメリカ「運悪すぎなんだぞ」

なつじ「さあ引け」

イギリス「チツ……………」

イギリスは紙を引き、私に手渡す。

ほのか「えーっと……………」『最高のキメ顔をする』だって」

イギリス「なんで俺が引くやつは恥ずかしいのばかりなんだよ！！」

顔を真っ赤にしてキレルイギリス。

イタリア「イギリス、罰ゲームっていうのは大体恥ずかしいことなんじゃないかな」

イギリス「つーか俺、フランス見たままキメ顔すんのか!？」

苑子「じゃあ30秒だけ見ないでいいよ」

イギリスはフランスから眼を放す

イギリス「なんか……………周りがすごく綺麗に見える……………!!」

フランス「どういうことだゴラ」

ロシア「じゃ、最高のキメ顔をどーぞ」

イギリスは戸惑いつつも自分では最高のつもりのキメ顔をした

イギリス「……………何笑いこらえてんだよ!」

全員、必死に笑いをこらえていた

ドイツ「い、いや……………笑いなど……………こらえてないぞ……………ククッ……………」

さいほの「フフッ……………」

ほのか「……………プッ」

イギリス「……………やらなきゃよかった……………」

イギリスはかなり後悔したらしい

ほのか「じゃーんけーんポイツ!!」

負け……苑子、イタリア

苑子「っあー、負けちったー」

ほのか「複数の時は誰か一人がくじを引いてそれに従ってね」

苑子「よし、引けイタリア!!」

イタリア「お、俺!？」

苑子「うん、わっち運悪いんだもん」

イタリア「それ俺もなんだけど……」

イタリアはくじを引く

ほのか「えーと……『前にいる人に愛の告白』だって」

苑子「なんじゃそら……」

苑子は前を見る

苑子の前の人はなつじだ

苑子「（よかった女で……、しかもなつじだし）」

イタリアの前はドイツだからイタリアはなんのためらいもなくドイツに愛の告白をする

イタリア「ドイツ、世界で君が1番好きだよ!」

ほか「どうしよう、この二人なのにBLに見えてしまった……………」

BL嫌いなんだけどなあ…

ロシア「苑子ちゃん、言わないの?」

苑子「あ、うん」

苑子はなつじを見る

なつじはそれを睨み返す

さいほの「睨み返すな……………」

ほか「苑子ちょっとビビってるよ」

苑子「えと……………よしっ」

苑子は決心して口を開く

苑子「君は道端に咲く名前も知らない小さい花のよう……………!」

なつじ「喧嘩売ってんのかてめえはああああ!」

なつじが苑子にアイアンクローをする

苑子は綺麗に宙に舞い頭から床に落下する

アメリカ「よく飛んだんだぞ……………」

アメリカが動かない苑子を見て顔を青くして言う

イギリス「真面目に考えても結局そうなるのか……………」

中国「ある意味天才ある」

ほのか「背が小さいなつじにとっては最高の侮辱だね」

なつじ「てめえも死にてえか？」

ほのか「は、はは……………」

なつじ、超機嫌悪い……………」

フランス「苑子ちゃん動かないけど大丈夫かい？」

さいほの「ほっとけば大丈夫だろ」

ほのか「大丈夫じゃないよ……………」

「次は○○駅、次は○○○」

電車にアナウンスが流れた

もうすぐ目的地だから私達は荷物をまとめる

そしてちらりと窓を見ると……………

ほのか「おおっ！！」

さいほの「どした……………ってわぁ……………」

なつじ「海だぁぁ！！」

窓の外は綺麗な青い海が広がっていた

苑子「海！！？」

ほのか「起きた！！」

さいほの「だからほっとけば起きるつつたろ」

私達の叫び声で死んでた苑子が飛び起きる

日本「綺麗ですね……………」

イタリア「ヴェー……………」

私達は駅につくまでずっと窓の外を眺めていた

その16 目的地まで行く時が1番楽しい(後書き)

ほのかがイギリスに何を囁いたのかはみなさんのご想像にお任せします

その17 海に行ったらまず泳げ！（前書き）

仕方ないので斬っちゃいました

b y 日本

夏休みもう終わっちゃうじゃねーか！！

しかし夏休みが終わっても夏休み編は続きますぜ

あの人達が久々の登場です！！

その17 海に行ったらまず泳げ！

苑子「海だあああああつー！」

なつじ「黙れウザいくたばれ苑子」

苑子「……………ぐすっ」

こんにちは、ほのかです

というわけで海です

やっと着きました

青い海、白い砂浜、そして砂浜にうちあげられた大量の海藻が私達を迎えてくれました

さいほの「しっかし暑いね、水着に着替えて早く泳ごう」

ほのか「おっしゃああー！！まっかしとけええいー！！」

私と苑子は更衣室に直行した

イギリス「元気だなあいつら……………」

日本「フランスさん、まさか更衣室をのぞこうなんて考えてませんよね？」

フランス「かつ……………考えてねーよっー！！」

中国「考えてたあるな……」

さいほの「マジかよ、近づくな変態。行くよなつじ」

なつじ「うーす」

ロシア「今のさいほのちゃん目、思いっきりフランスくんを軽蔑した目だったね」

フランス「うう……」

アメリカ「とにかく早く着替えて早く泳ぐんだぞ!!」

男性陣も更衣室に歩いて行った

なつじ「あれ、中国は女子更衣室じゃないの？」

中国「我は男ある!!」

『やっと見つけたわ。我々の計画の邪魔な存在』

『あの時は手間がかかったからね。』

『ええ、でも今回は前みたいにはいかないわ。』

『全員まとめて排除してやろう』

『失敗は許されないわよ、キリハ』

『わかってるさ、キリカ』

黒いマントに身を包んだ蒼い髪の子と女は怪しく笑った

苑子「うーみーはー広いーなーおおーっきーなー」

なつじ「黙れ読みにくい」

苑子「さーせん」

さいほの「男性陣の方が着替えるのが遅いとはどーゆうことだ」

ほのか「人数多いからね」

イタリア「おまたせー！」

ドイツ「遅くなってすまない。フランスが女子更衣室をのぞこうと……」

さいほの「まだ諦めてなかったんかいな」

日本「仕方ないので斬っちゃいました」

ほか「いやそんな『やっちゃいました』的なテンションで言われても……」

フランス「痛かった……」

苑子「痛かったで済むことじゃなくね？」

私達は砂浜にビーチパラソルをさし、その下に休み場所を作り海に飛び込んだ

アメリカ「イエーイッ」

なつじ「ちょ、アメリカ！水！水飛ぶ！しょっぱい！！」

各自好き勝手に遊ぶ

しかし日本だけビーチパラソルの下で休んでた

日本「若いつていいですね……」

「日本、泳がないの？」

日本「はい……ってえ？」

日本の前にいたのは知らない顔の少女だった

日本「えと……どなたですか？」

「はあ？何言つてんの日本。私だよ私」

その人物は眼鏡をかけた

日本「ほのかさん！？」

そう、正体は私でした

ほのか「そーだよ！」

日本「ぜ、全然違う……」

ほのか「よく言われるぜ」

私は眼鏡を外す

ほのか「さ、早く泳ごー！！」

日本「えっ、ちょ……」

私は日本の背中をおした

日本、顔から海にザブーン！！

ほのか「あ、ゴメン！しょっぱいよね、水」

日本「いえ、ちょうどいい塩加減です」

ほのか「え……………」

苑子「なつじー、浮輪外しなよー」

なつじ「やだ。泳げないから」

なつじは浮輪をしてプカプカ浮いている

苑子「泳げないんじゃない？底に足がつかないだけじゃないの？」

なつじ「死ね」

なつじは苑子を沈めた

さいほの「あ、なんか藪崎が沈められてる」

ほのか「ホントだ」

日本「よく冷静に言えますね……………」

アメリカ「H A H A H A」

私達の遠くでアメリカが大声で笑いながら泳いでいる

さいほの「元気だね」

ほのか「そうだね」

日本「若いつていいですね」

中国「三人ともじじいみたいある……………」

ほのか「あ、中国。いたの？」

中国「さつきからいたある……………。それより昼にするあるよ」

さいほの「おう、今日の昼は何かなー」

日本「私を作ってきた弁当です」

中国「+イギリスのスコーンある」

……………

ほのか「わっ…………私まだ泳いでる……みんな先に食べてて！」

さいほの「待てやゴリアー！！お前も道連れじゃあつ！！」

逃げようとしたがさいほのにあえなく捕まる

ほのか「嫌だあつ！！イギリスのスコーン食べるくらいなら昼飯くらいいぬいてやるううつ！！」

さいほの「ちよつとくらいなら大丈夫だろ！！」

ほのか「さいほのはヘタリアのことよく知らないからそんなこと言えるんだよ！！あれは……あれは暗黒物質^{ダークマター}、いや殺人兵器なんだああああ！！」

さいほの「落ち着け！！食べなきゃいいだろ！！」

ほのか「無理だ！！あのイギリスの笑顔を見たら食べなきゃいけない気がするんだ！！」

さいほの「お前のイギリス萌え的なんだかは捨てる！！」

ほのか「私はイギリスより日本が好きなんだあああつ！！」

さいほの「知るかあああああつ！！」

直後、腹部に激痛が走り私の意識はそこで途絶えた……………

ほのか「……………はっ」

私が目を覚ました場所は砂浜の上、というかさっき設置した自分達の休憩場所だった

私の顔を皆が覗き込んでいた

ほのか「……………ココハドコデスカ？」

苑子「テンゴクデース」

なつじ「ナグリマスヨー」

苑子「ジャア、チキウデース」

なつじ「コロシマスヨー」

苑子「ジャア……………」

さいほの「もういいやめれ」

私達のポケ合戦はさいほのの仲裁で、ひとまず終了する

ほのか「んで、ここが砂浜の上だっつーのは最初っからわかってたけど」

なつじ「じゃあ聞くな」

ほのか「いいじゃん別にー。それよりなんで私はここにいるの？」

確か海で泳いでた気がするんだけど………」

イタリア「俺、詳しい事はよく分かんないんだけどさいほのちゃんがぐったりしたほのかちゃんを担いできたんだよー。びっくりしたよー!」

中国「ああ、皆には言ってなかったあるな。いろいろあってさいほのがほのかの腹を思いっきり殴って気絶させたある。」

日本「いきなり気絶されたので驚きました」

へー……ほおー……

なあるほどお……

ほのか「さーいーほーのーちゃん?」

さいほの「私はなんも知らんよ」

ほのか「嘘つくな!!目撃者だってちゃんといえるんだからな!!」

さいほの「いやあ、やってみたくて」

ほのか「やってみたくて　じゃねーよ!!気絶するほどやるやつがどこにいる!!」

さいほの「ここにいます」

ほのか「だああああっ!!ム力つくうううっ!!」

苑子「落ち着けMEGANE」

ほのか「黙れ！！全然かつこよくねーんだよ！！つか今眼鏡かけてねーよっ！！」

フランス「そこですか」

日本「とりあえず落ち着いてください……」

ほのか「うん」

なつじ「落ち着くのはやっ！！」

イギリス「ほのか、もう気分は大丈夫か？」

ほのか「うん！！大丈夫！！元気100%！！」

イギリス「じゃあ俺のスコーン食べれるよな？」

イギリスが笑顔で真っ黒なスコーンを差し出す

ほのか「ごめん、急に元気なくなった。みんなで食べて」

ロシア「でもみんな先に食べちゃったよ？」

ドイツ「……………まあがんばれ」

全然気付かなかったがみんなの顔色がかなり悪い

ホントにあの殺人兵器を食べたらしい

意識があるだけでもかなりすごい

苑子「私はさっきまで意識なかったよ」

ほのか「そうなの！？いや、お腹いっぱいだから……………」

イギリス「あと一つだけなんだ。食べてくれるか？」

イギリスがさっきと変わらない笑顔で私の手の上に殺人兵器を置く

こ……………これを食べるの……………？

ほのか「ちよっとトイレ……………」

アメリカ「逃がさないんだぞ」

逃げようとしたがアメリカに手を掴まれ引き戻される

ほのか「え……………えと……………」

なつじ「食べるよね？」

なつじが黒い笑顔で言うがこの殺人兵器に比べたら怖くもなんとも
ない

ほのか「あ…………え…」

全員「さあ—！」

全員に言われる

ほのか「う…………うわあああああつ—！」

私は叫びながら黒い物体を口に入れた

その後の記憶がないのは言うまでもない

その17 海に行ったらまず泳げ！（後書き）

イギリスのスコーンってどんな味がするんだろーか？

一回食べてみたいです！

軽く次回予告

海で楽しく遊ぶ四人と枢軸・連合。

しかしその平和な時間はあいつらによって破壊される……………！！

まあこんなかんじですかね。

お楽しみにー

その18 眉毛の屍（前書き）

いや…………俺死んでねえし…………

byイギリス

話が進まねーぞコンチクショウ

宿題終わらねえぞコンチクショウ

さいほの「知るか」

その18 眉毛の屍

ほのか「うー……頭痛えー……」

さいほの「二日酔いのおじさんか君は」

私はイギリスのスコーン（別名、殺人兵器）を食べて見事に気絶し、さつき目が覚めた

ほのか「さいほのとかよくたえられたね……」

さいほの「もうすぐで意識が飛びそうだったけどな」

ちなみに今、休憩場所には私とさいほのしかない

みんな泳いでいる

ほのか「さいほのは泳がんの？」

さいほの「ちよつと休憩。疲れたからな」

さいほのはクーラーボックスからスポーツドリンクを取り出し口にふくむ

さいほの「黒須もちよつと飲んだら？」

そう言つてコーラを手渡された

私はそれを飲む

ほのか「うー！炭酸強おつ！！」

さいほの「蓋を開けた直後のよく冷えた炭酸水って妙に炭酸強いよね」

ほのか「ああーわかる」

こう話してると普通の女の子なんだけどなあ……

ほかの人から見たらまさかこのどこにでもいる女の子が世界を救う人間として命を狙われてるなんて思わないよねえ……

つかそんな設定、読者さん忘れてるよねー

ま、この世界に来てからたいした出来事何も起きてないし……

大丈夫だよな？

『ふつ、完全に油断してるな』

キリハがビーチパラソルの下でのんびりしている少女二人を見て言

った

『これなら楽にできるわね』

キリカがニヤリと笑う

『うーん、そうはいかないかもね』

『どういうこと？』

『あの国の八人、なかなか強いよ。一部を除いて』

一部というのは言うまでもない

『ドイツやアメリカは運動神経がいいからもちろん戦うのは強いはず。日本は剣術が得意。イギリスは……うん、あれだ。魔法的な何かでバーンと。中国は中国だからな。カンフー的な何かだ』

『ちょっと待つて。最後らへん適當すぎない？』

『気にするな。まあイタリアはヘタレだからな。何も出来ないだろ。フランスは弱いかもしれないがそこそこ戦力にはなるはず』

『手強いわね……』

『でも1番気をつけるのはあのバカ四人組だ。がむしゃらだがいろんな意味で強い』

『ええ、いろんな意味でね』

キリカとキリハは少し呆れ顔で言った

『しかしどうやって殺すの?』

『ここは海だ。最高の殺人スポットだと思わないかい?』

キリハはとても嬉しそうに海で遊んでいたり休んでいたりする標的を見た

イギリス「……………ん?」

苑子「どしたの眉毛」

イギリス「んだとゴラ。さっきから嫌な予感がしてな……………」

なつじ「またまたあ、イギリスの嫌な予感ってのはあんま信用できないよねえ」

イギリス「うるせえ!!!」

アメリカ「イギリスーツ!!!」

イギリス「ぶふああ!!!」

突然、アメリカがイギリスに突っ込んできた

メタボ気味のアメリカが上にのっけているため沈むイギリス

苑子「わああ！アメリカ！死んじゃう！イギリス死んじゃうよ！！」

アメリカ「え？」

苑子の叫びを聞いてイギリスを見るアメリカ

しかしイギリスはもう動かなくなっていた……

なつじ「ぎゃああああ！？イギリスううう！！」

アメリカ「あ、ゴメンなんだぞ」

苑子「謝る気全然ねーよコイツ」

イタリア「どうしたのー……ってわああああ！？」

泳いできたイタリアが動かないでそのまま浮いているイギリスを見てかなり驚く

イタリア「うわああん！！ドイツー！イギリスが死んでるよおお！！」

ドイツ「何！？」

イタリアに呼ばれてドイツと日本達もやってくる

イギリス「いや……俺死んでねえし……」

ほか「どーかしたのー？」

休憩場所にいた私とさいほのもその場に泳いできた

中国「こ、これは大変ある！すぐに人口呼吸を……！」

さいほの「誰がすんの？いつとくけど私達女子は断るね。いろいろあれだし」

ほか「この小説は恋愛なしの方向だから」

苑子「イギリスと……」

なつじ「何照れてんの？苑子」

苑子は妄想ワールドに入ってる

フランス「じゃあ俺が……！」

ほか「わーわー！！ダメダメダメエツ！！恋愛はなしだけどBLはあり、ってわけじゃないからあ……！」

フランスが人口呼吸をしようとしたところを私が必死にとめる

中国「でもこのままだとイギリス死ぬあるよ？」

フランス「別にいいよ？」

さいほの「お前は助けたいのか死なせたいのかどっちなんだ」

イギリス「だから俺大丈夫だって……………」

イギリスの言葉は誰も聞いちゃいない

というかイギリスの意識があることもみんな知らない

フランス「いやあ、別に死んでもいいんだけど人口呼吸、お兄さんやってみたくて♪」

なつじ「ギャアアアア！！ここに…………ここに限りなく変態な最低男がいるよおおおお！！」

なつじの叫びで海水浴に来ていた人達がフランスに冷たい視線を浴びせる

フランス「嘘嘘！！だからやめて！！お兄さん泣いちゃうから！」

苑子「勝手に泣いてるカス」

はい、ブラック苑子キター……………！！

久々の登場ですねー

苑子「つかやるならやれよ。早くしねえと大変だろうが」

なつじ「おお、ブラック苑子でもイギリスの心配はす……………」

苑子「ほら、早くしねえと。時間の無駄だから。読者飽きちゃうだろおが」

思いやりもクソもないブラック苑子ちゃんなのでした

その18 眉毛の屍（後書き）

書き終わって気付いたこと

日本とロシアが空気w

今回、一度も喋っておりません。

このことに気付いたあなた、明日の運勢最高です。
嘘です。

その19 ピンチ襲来！？（前書き）

死んでねえって言うてんだろおおおおお！！

boyギリス

BL苦手なのに今回ほんのちよつとBLあります。

ほんのちよつとですから！！

その19 ピンチ襲来!?

イギリス「……………はあ、はあ……………」

イギリスが疲れたように息をしている隣には頭にたんこぶを作ったフランスが浮いていた

おっとこれでは状況がイマイチわからないと思うんで時間を少し戻します

ロシア「ねえ、早くしないとイギリスくん死んじゃうよ?」

ロシアが笑顔でフランスを見る

それに怖じけづいたフランスはイギリスに顔を近付けはじめた

ほのか「もう見てらんないいいいい!!」

B.Lが嫌いな私はそこで目をつむった

フランスの唇がイギリスに触れようとした瞬間！

イギリス「だゝゝかゝゝらゝゝ……………」

動かなかったイギリスがフランスの顔を掴み

イギリス「死んでねえって言ってんだろおおおおお！！！！」

思いつきりフランスを殴った

フランスは綺麗に宙を舞い、海に落下した

そしてさっきまでのイギリスと同じ状態になった

私達はただただ、その二人の様子を呆然と見ていた

そして今に至る

苑子「イギリス……………生きてたの？」

イギリス「国がそう簡単に死んでたまるか」

ほのか「うん、でももしかしたらフランス簡単に死んじゃうかも」

中国「奴はゴキブリ並に生命力が高いある。ほっといても大丈夫ある」

中国の言葉に全員が納得した

『キリハ、あいつらバカなの?』

『今ごろ気付いたの?そう、あいつらは正真正銘の……』

キリハは間を開けて、きつぱりと言った

『バカだ』

『きつぱり過ぎるわ』

苑子「ブエックシヨイ!!」

なつじ「うわっ、汚っ！」

ほのか「ひでえなオイ」

日本「風邪ですか？」

苑子「んー、たぶんちがうかなあ？」

さいほの「誰か藪崎の噂でもしてんじゃねえか？」

苑子「そうかなあ……」

→バカの代表

『あの子が1番に反応したわ……』

『ああ、バカの代表だからじゃないか？』

『悲しすぎるわね、あの子』

二人は苑子を可哀相な目で見た

見られている苑子はまったくしゃみをした

『なんか見ててつらくなってきた、早くやりましょう』

『そんな理由でかよ』

キリハは手を前に出した

『まあ早くやらなきゃいけないのは変わらないけどね』

キリハの手が青くひかりだし、どんどん光を増していく

『何をするの？』

『まあ見ればわかるって』

光は激しく光った後、消えた

『これで終わりだ』

さいほの「あ、そうだ日本」

日本と話をしているとさいほのが私達のところに泳いできた

さいほの「実は……ぬおっ!!」

しかし突然沈んだ

ほのか「さいほの!!? ってギヤァ!!」

足に突然重みを感じ、私も水に沈んだ

足を見てみると重そうな鉄の玉がついている鎖が足についていた。
なんだコレエ!!?

ほのか「ぷはっ!!」

私は頑張っ て顔を水面から出した

日本「ほのかさん!! どうしました!!?」

ほのか「足にいつの間にか重りがついてる! みんなも気をつけて!
!」

なつじ「何が……」

そんななつじの足にも突然重りが現れた

なつじ「わぁ!」

なつじは浮輪をしていたから浮輪に捕まりなんとか絶える

苑子「なつじー、大丈夫ー?」

なつじ「苑子も気をつけて！」

苑子「だーいじょーっ……………」

苑子、笑顔で沈む

その場にいた全員がコイツバカだと思った

しかし私は絶えていたが限界になりまた沈む

やばっ！鼻に水入った！！ツーーンってするうううっ！！頭いてええー！！

どんどん沈んでく私の手を誰かが握り、引き上げてくれた

ほのか「げほっ！！げほっ！！は……………鼻が……………」

日本「大丈夫ですか？」

助けてくれたのは日本だった。

ああ……………大好きな日本に助けてもらえるなんて……………

今なら死ねる……………

ってダメだろ死んじゃ。つか今死にそうになったし。まあそれどころじゃなくて、

ほか「さいほのとなつじと苑子の近くにいる人（人じゃないけど）は助けて!!」

私は周りにいるイタリア達に呼び掛ける

さいほの「がぼがぼ!」

フランス「おい大丈夫か!？」

さいほの「ちつ、お前か……」

フランス「助けたのにひどくない!!!？」

フランスがさいほのを助けたが、さいほのめちゃくちや嫌そう……
…。ドンマイフランス

なつじ「ううー!!もーダメ!」

浮輪を掴んでいたなつじは重さに絶えられなくなり、そのまま沈んでしまった

近くにいたロシアは急いで助ける

ロシア「危なかったねー」

なつじ「ありがとー……」

なつじ危機一髪!

あとは苑子だけだ

苑子の近くにいたイギリスはなんとか顔を出している苑子に手をのばす

イギリス「苑子！手、出せ！」

苑子「…………ポッ」

イギリス「何照れてんだお前！！バカか！！」

苑子「バ…………バカとはなんだ！！私だって……………」

しかし突然、大きな波が来て苑子をさらっていった

全員「あっ」

波が消えたときには苑子はどこにもいなかった

なつじ「苑子おおおお！！！」

イギリス「チッ……………」

イギリスは苑子を探しに水に潜った

その19 ピンチ襲来！？（後書き）

なんとなく次回予告っ

なつじ「苑子が逝っちゃったんで次回は苑子のお葬式です」

苑子「勝手に殺すな！！」

ほのか「はい嘘です。真面目にやりまーす。さいほのよろしく）
- ^) / 「

さいほの「おう任せろ！！行方不明になった薮崎！！薮崎は無事なのか！！そしてミス。ルの運命は！！」

ほのか「おーい話がずれてるぞー」

強制終了。

その20 嫌な人達と再会（前書き）

どうかで………会いましたっけ？

b y ほか、さいほの、なつじ、苑子

今回は苑子視点

その20 嫌な人達と再会

……あり？

……私……どうなったんだっけ……？

確かみんなで泳いでたら……

ああ……思い出した……

なつじに殺されたんだ……

いや違うな……
つか絶対違うな……

ん……？よく見たらここ海の中だ……

そうだ、確か足に重りが……

今ならまだチャンスはあるかも！

私はがんばって足を動かし泳ごうとした

まあ無理なわけで

最初っから泳げないしね

→無意味な行動

ああーそろそろ息できなくなってきたあ

やばい、私死ぬかもしれない

つか死ぬだろこれ、完全に

こんなところで死ぬなんて……

せっかく二次元に来れたのに……

ま、死んだらなっじ呪ったりとりついたりして遊ぼつと……

私は遠くなっていく水面を見ながらまぶたを閉じようとした

そんな私の前に突然、金髪にエメラルドの瞳の人物が現れた

え、イギリス！？

イギリスは私の腕を掴み、水面へと泳いでいった

苑子「ぶはっ！！げほっ……げほっ……」

私はやっと水面から顔を出し、酸素をめいっぱい吸った

ほのか「苑子！！」

苑子「はー死ぬかと思ったー」

イギリス「俺が行かなかったら確実に死んでたぞ」

苑子「あははっ、ありがとー」

イギリス「べっ、別にお前のためじゃないんだからな！！これは……その……」

出たよツンデレ

めんどくせえ

ドイツ「とにかく陸に行くぞ。四人は今一緒にいる奴から手を絶対離すなよー！」

ほか「ほーい。日本、重いかもしんないけどがんばってね！」

イタリア「俺も手伝うよー！」

日本「あ、ありがとうございます」

黒須はイタリアと日本に掴まって泳いでいった

私はイギリスと中国に手伝ってもらって陸まで泳いでいった

この二人と一緒にいけるなんて……！！

薮崎苑子、幸せすぎるぜ！

なつじ「で、どーする？この重り」

みんなが無事に砂浜についた後になつじが自分の足に繋がれている鎖とそれについている鉄の玉を見る

頑丈に繋がれていて簡単にはとれそうもない

んー、どーしたのか

しばらく考えてみて私はあることをおもちついた！！じゃなくて思いついた！！

苑子「そのままでもいいんじゃない！？」

なつじ「キングオブバカは黙ってる」

しかしなつじに冷たくつけはなされてしまう

ほのか「このままじゃ歩くの大変だしねえ」

黒須は立って歩こうとしてみた

しかし一步も進めず頭から前に倒れる。い、痛そう……

さいほの「……………おい、大丈夫か？」

ほのか「この重り限りなく重たいよ！！足があがないもん！」

黒須は体を起こして頭に出来たたんこぶを涙目でさすりながら言った

相当痛かったんだろうな……

さいほの「なんか衝撃を与えて壊してみるの？」

イタリア「壊れるかなー？」

イタリアは黒須のを棒でぺしぺし叩いている

まあ壊れないわけで

中国「仕方ないあるな。我に任せるある!」

中国が中華なべを持って私の前に立つ

苑子「えっ、ちよっ、私?つかそれ危な……………」

中国「ほあちやあああああ!」

苑子「ちよつと待ってえええええ!」

キンッ!!

甲高い音が辺りに響いた

中国「やっぱりダメあるか……………」

苑子「ジーンンってきたあぁ……………」

こっちまでダメージが……………」

日本「傷すらついてませんね……………」

アメリカ「どーなってるんだいコレ!」?

『ふははは!!!苦戦してるみたいだな!』

全員「!?!?!?」

突然、空から声がした

上を見ると二人黒い人がいた

つか浮いとる!!?」

『久しぶりだな。よくここまで生きていたものだ』

片方の方が見下したように言う

つか……」

ほ・さ・な・そ「どこかで……会いましたっけ？」

『『………』』

誰だあいつら？

『きつ……貴様ら忘れたのか!!?』

ほのか「忘れたも何も会ったことないですよ」

さいほの「イタリア達知ってる？」

イタリア「ううん。知らないー」

ドイツ「俺もだ」

日本「私も覚えが……」

アメリカ「あんなのに会ったかい？イギリスはどうだい？」

イギリス「俺も会ってないな」

フランス「お兄さんも」

ロシア「僕もー」

中国「我もあんな奴ら知らないある」

全員知らないらしい

『忘れたのか！ほら、お前達四人を殺そうと……』

さいほの「殺そうと………？」

『こつちの世界に来る前に、ほら』

なつじ「ヘタリアの世界に来る前に………」

四人「ああ！！！」

やつと思ひ出した！！

確か………

苑子「キリヌキ！！」

って名前だったような

『違うわ！！俺の名前はキリハだ！』

『私はキリカよ！』

二人が必死に自分の名前を叫んでいる

ほのか「んで、私達になんか用？」

『決まってるだろ！！お前達を殺しに来たんだよ！』

さいほの「オーマイガー」

『あなた全然驚いてないでしょ』

さいほのはさほど驚いてない

『それよりあなた達の足についてるそれ。そう簡単にはとれないわよ』

キリカが私達四人の足についてるのを指差して言った

なつじ「えー、なんでー」

『その鎖には強力な魔法がかけられてる。そう簡単には外れな……』

ほのか「外れたけど？」

『……………』

イギリス「こんなの俺の魔術で外れるさ」

イギリスの魔術？魔法？のおかげで重りは簡単に外せた

あー、足が軽い

『ちつ、やっぱりお前達みないな“国”がいると厄介だな』

キリハがイタリア達を見て怖い顔で言った

『やっぱり全員殺した方がいいんじゃない？』

『少し手間がかかるが仕方ない』

二人が話し合った後に私達の方を睨む

イタリア「ヴェ……ドイツ……」

ドイツ「落ち着け、大丈夫だ」

ほのか「あ、なんかすごく嫌な予感がする……………」

うん、黒須に同感だ

なんか二人から出てるオーラがハンパないし

どうしよう、このままじゃ死ぬかも

いやそんなおちゃめなもんじゃねーな

苑子「あわわわ……なんか出来ないの……」

日本「私に方法があります。合図をするので一斉にここから逃げますよ」

日本の言葉に全員が頷いた

辺りが静寂としている

そして日本が叫んだ

日本「今です!!」

日本が少し大きい玉を地面に叩きつけた

玉は叩きつけた瞬間に白い煙りを出して辺りを覆った

なつじ「すげえ!!忍者だ!!」

中国「早く逃げるある!!」

私達は感動しているなつじを引っ張ってその場から逃げた

その20 嫌な人達と再会（後書き）

なんかロシアとかあんまりしゃべってないような……

まあ次からがんばろー

→がんばることじゃない

その21 ただいま逃走中（前書き）

誰のせいだと思ってるあるかああ……！！

b y 中国

なんか今回、苑子とアメリカとロシアが真面目すぎるw w

真面目なキャラじゃねーだろこの人達w w

その21 ただいま逃走中

『げほっ……げほっ……あ、あいつらは!?!』

『ちっ、逃げられちゃったみたいね』

『変な道具使いやがって……!!』

白い煙が消えたときにはもうキリ八達のターゲットは逃げていた

『くそっ、絶対に逃がすな!!』

キリ八とキリ力は黒い煙となって消えた

さいほの「はあ……はあ……ど、どこまで行くんだ……?」

フランス「バスに乗って駅に行こう。ここから駅はかなり遠いからな」

苑子「に、荷物は！？持ってきた！？」

ドイツ「そんなの取りに行く暇がなかっただろう！！」

イタリア「ばつちり持つてきてるであります！」

ドイツ「お前は……………」

全員分の荷物を持って敬礼するイタリア

アメリカ「イタリアナイスなんだぞ！！」

イタリア「でももう限界……………」

イタリアは倒れた

ほか「ぎゃああああ！！イタリアああ！！？」

イタリア「いっぱい…………走ったし…………全員分の荷物…………持ってたし…………体力的に…………限界…………」

なつじ「なんかゴメン、イタリア」

中国「とりあえず荷物は持つある。だからがんばるある」

イタリア「も、もう無理……………」

イタリアは動こうとしない

走るのは無理そうだ

苑子「がんばれ！！でも私も限界」

苑子もイタリアの隣で倒れた。

ほのか「苑子までええええ！？」

苑子「昼に食べた……イギリスのスコーンで、お腹が痛くて……」

ほぼ全員「……………はっ！！」

突然、お腹が痛みだした

いだだだだ！！

さいほの「うーっ！！腹がああああ！！」

ロシア「僕は平気だよ？」

ロシア恐るべし

あ、でもちよつと顔色悪いからつらいんだろうな

今立っているのはロシアと作った張本人のイギリスだけ

イギリス「おっ、おい！！大丈夫か！！？」

中国「誰のせいだと思ってるあるかああ……！！」

日本「い、一生の不覚……………」

なつじ「うごおおおー!!」

イギリス「ちよつと待て!今なんとか……………」

『見つけたわ!!』

立ち止まっていたら突然キリカとキリハが現れた

『ちよこまかと逃げやがって!』

キリハが手からなんか玉みたいなものを飛ばしてきた

イ、イリユージョン!?

苑子「うわわわわ!!」

玉は苑子の近くに落下し落下した場所には大きなくぼみができた。
ダメじゃん、道壊しちゃ

苑子「うわぁ……………」

つかあれ当たったら死ぬよね。確実に逝っちゃうよね

ドイツ「バス停までもうすぐだ!我慢しろ!」

そつ言うあなたが我慢できてませんぜ、隊長

無理しないでくださいえ

ドイツ「おいイタリアー！！立て！」

イタリア「キュー……」

イタリア、見事に気絶

疲れとお腹の痛みが一斉に来たもんだから無理ないな

ドイツ「ったく……ほら、行くぞ！走れ！！」

イタリアを担いだドイツの後を私達はなんとか追いかけた

バス停に着いたときちょうどバスが来たから、急いで乗った

バスの中には誰ひとりいなくて静まり返っていた

やがて入口がしまり、バスは動きはじめた

窓を見るとキリカとキリハが悔しそうに顔を歪めていた

『ちっ、また逃げられたか……！』

『安心なさいキリハ。あいつらは死ぬという運命から逃げられないの』

キリカがニヤリと笑った

ほか「よかったあ、おいかけてこないよ」

座席に座り、私はとりあえず安心する

ドイツ「ああ、なんとか逃げのびたみたいだ」

ドイツが気絶しているイタリアを座席に寝かせた

なつじ「あれっ、そういえばお腹痛くないよ」

苑子「ホントだ」

確かに

痛くない！！

さいほの「イギリスの魔術か？」

イギリス「ああ、逃げながら腹の痛みがなくなるように呪文を唱えていたんだ。」

なんかこの小説のイギリス、魔術とか使いまくってる気がする

ま、いつか

イタリアも腹の痛みがなくなったせいか顔色がさっきよりよくなっていた

アメリカ「あーもう災難だったんだぞ！」

フランス「仕方ないだろ。俺達は世界を救うんだからあいつらに命を狙われて当然さ」

イタリア「ウヴェー……」

イタリアが目を覚ました

ドイツ「大丈夫か？イタリア」

イタリア「ヴェー……なんかくらくらするよぉ……」

さいほの「頭冷やす？氷あるよ？」

イタリア「ありがとー……」

さいほのが袋に氷をいれてイタリアのおでこに当てる

イタリア「ちべたっ」

さいほの「氷だから当たり前でしょ」

ドイツ「すまないな」

さいほの「いいってことよ」

さいほの、お母さんみたいだなあ……

微笑ましい光景だよ……

苑子「……………ねーねー」

しばらく窓の外を眺めていた苑子が全員に声をかけた

ほのか「どしたの？」

苑子「お腹減った」

ほのか「殺すぞ」

苑子「ウソウソ！あのさ、さっきからおかしいと思ってたんだけど……」

苑子が自分なりに真面目な顔をつくった

私達から見たら変顔にしか見えないが

苑子「なんか私達以外に人がいない気がする」

なつじ「え？どーゆーこと？」

苑子「さっき私達が重りのせいで死にそうになったやん？普通誰か

が溺れそうになったら周りの人は助けに来るでしょ？」

私達は苑子の話を黙って聞いている

苑子「でもイタリヤ達しか助けに来なかったよね？私、変だと思つてイギリスと中国と陸に行こうとしてる時に周りを確認してみたの」

苑子にしてはめずらしく長々と真面目に話をしている

苑子「でも周りにはいつのまにか私達以外誰もいなかったの。キリ八達から逃げてる時、道路を走って逃げてたでしょ？その時にも車が一台も走ってなかったの」

日本「そういえばそうですね……。必死だったので気づきませんでした」

なつじ「苑子、よく気づいたね。苑子のくせに」

苑子「泣いていい？」

ほのか「よくわかったね、苑子！」

苑子「えへへ」でも問題はそこじゃないの」

イギリス「十分問題だろ」

苑子「だってさ人もいないし、車も一台通ってないのにバスが走ってるなんておかしくない？」

ロシア「あ、確かに……」

苑子「しかもこのバスは私達が来るのを予測していたかのようにグッドタイミングに来たでしょ？このバスは1時間に一回しかここに来なくて毎時間30分ごろに来てるの」

さいほの「よく知ってるね……」

苑子「さっきバスに乗る前に時刻表をちらっと見たらそう書いてあったんだ」

苑子は照れたように笑った

ドイツ「今は16時10分だな……」

苑子「私達がこのバスに乗ったのは10分前だよね？」

ほのか「ってことはこのバスが来たのは16時ってこと!？」

めっちゃ遅いor早いやん!!

苑子「そゆこと!」

苑子が元気よく言う

ロシア「ということはこのバスは……」

苑子「そう、怪しいってこと!」

イギリス「まさかあいつらの……」

全員「罨!!!」

全員が声をそろえて言った瞬間にバスは全速力で走り始めた

なつじ「ぎゃああああ！？早っ！！」

イタリア「ねーねードイツー……………」

ドイツ「どうした！？」

イタリアが運転席を指さす

イタリア「そういえばこのバス……………運転手いないよ？」

イタリアの言葉にロシア以外全員が顔を青ざめる

ホラーじゃんっ！！

さいほの「じゃあこのバスどこに向かってるわけ！？」

苑子が窓を開けてどこに向かってるか確認する

このバスが向かってる先は……………

崖^{がけ}だった

苑子「うーん、地獄かなっ」

さいほの「きつぱり言うなあああああ!!」

普段冷静なさいほのがパニックってるよ……

つか普通パニックるよねこの状況。

なんでロシアそんなに落ち着いてられんのかな

なつじ「どとどとどすんの!？」

イギリス「どうするって言われたって……」

パニックってる内にどんどん崖は近づいて来る

アメリカ「早く降りるんだぞ!!」

アメリカがバスの入口を開けて言う

フランス「降りるってたってこんな速さのバスから降りるのか!?!危
険だ!!」

アメリカ「でもこのままだと死んじゃうんだぞ!」

ドイツ「アメリカ……」

アメリカがほかの人より冷静だ……

イタリア「でも……」

アメリカ「世界が滅びてもいいのかい!？」

イギリス「アメリカ……お前……」

アメリカ、いつもはあんなんだけどちゃんと周りのこと考えてるんだ……

ちょっと意外だ

ロシア「……アメリカくんの言うとおりだねー」

中国「ロシア!!？」

ロシア「こんなところで死んで敵の思い通りになりたくないからねー」

ロシアの言葉に全員言い返すことがなかった

つか言い返したら殺される……

やがてドイツが口を開いた

ドイツ「俺は降りよう」

イギリス「俺も降りるぞ……べつ、別にお前らのためじゃ……」
さいほの「私も降りる」

イギリスのツンデレ、華麗にスルー

苑子「わっちも降りるー！！酔ってきたし！」

なつじ「そこかよ。私も降りる」

ほのか「私も降りるー」

日本「私も降りさせていただきます」

中国「我也降りるある！」

フランス「汚れるのは嫌だけど命の方が大切だからね……。お兄さんも降りるとするよ」

フランスはため息をついた

これで大体の人は降りることを決意した

あとは……

イタリア「……………ヴェ？」

全員の視線がイタリアに集中する

イタリア「えっ！？え、えと……………」

イタリアはしばらく戸惑っていたがやがて

イタリア「おっ、俺も降りるでありますっ!!」

なぜか涙目で大声で叫んだ

苑子「うー、すぐ終わるって思ったら楽に思えたけどなんか怖いなあ……」

苑子が開いた入口から高速で流れる景色を眺めながら言う

確かに怖い

下手したら死……

いやいや!! そんなネガティブなこと考えちゃダメだ!

やるからには思いっきり行かなきゃ!!

さいほの「……………で、誰から逝くの?」

さいほの、さりげなく不吉な漢字使わないで

アメリカ「ここはイタリアで!」

イタリア「ヴェツ！？ななななんで！？」

アメリカ「なんとなく！！」

なんとなくかい

イタリア「やだやだやだあっ！！痛いのだよあ！！」

ドイツ「そんなことで泣くな！！」

イギリス「おい、早くしろ！崖、もうすぐそこだぞ！」

確かにもうすぐで崖だ

早くしないとぶっちゃけやばい

アメリカ「じゃあイギリスが先に逝くんだぞ」

イギリス「なんでだよ！あと漢字ちげえよばかあ！」

イギリスがアメリカにつかみかかる

苑子「わあ！！暴れないでよ！落ちちゃうでしょ！」

開いた入口の1番近くにいる苑子が叫ぶ。イギリスとアメリカの争いは壮絶で周りを巻き込んでいく

苑子「ちよっ……だから暴れるなって……あ」

苑子がイギリスに押されたアメリカにぶつかってアメリカと一緒に

バスの外に飛び出す

しかも全員が1番前にいた苑子によっかかっていたから苑子が飛び出したことによって全員バランスを崩して外に飛び出した

全員「……………あ」

全員がバスから降りた（というか落ちた） 後、誰もいなくなつたバスはずっと崖まで走っていきそのまま奈落の底へと落ちていった

その21 ただいま逃走中（後書き）

こんなことがあったら本気で怖いと思う書いた張本人……（作
者）

その22 危機一髪？（前書き）

な、なんだってええええ！！？

b y 苑子

更新遅れました……………

運動会の練習とか運動会の練習とか運動会の練習とかで忙しくて…

……………

家に帰って即爆睡だったため全然執筆してませんでした！

反省してまーす

→してねえ

その22 危機一髪？

なつじ「う、うーん……」

私は瞼を開けて、重い体を起こした

周りを見ると苑子達が倒れていた

なつじ「あー……何があつたんだっけ……？」

ガンガンする頭で何があつたか思い出す

あ、そういえば全速力のバスからダイブ（落ちた） んだー！

つかよく無傷でいられたな………

ポタッ

安心してゐる私からなんか赤い液体が落ちてきた

なんじゃこりゃ？

私はおでこを触ってみる

なんかぬるっとしていた

触った手を見ると真っ赤になっていた

あー、うん……

……

なつじ「ぎゃあああああ！！？あつ……頭からああ！！ケチャップ
がああああ！！」

なんだこれえええ！！？

昼にあれか！？ケチャップいつけたフランクフルト食ったか
らか！？

ケチャップ食っただけで頭から出るんかああああ！！？

なつじ「だれか助けてええええ！！」

ロシア「菜摘ちゃん落ち着いて」

なつじ「ぎゃああああ！！？ロシアアアア！！？いたのおおお！！？」

ロシア「聞いてなかったの？落ち着いてって言ったよね？」

ロシアに黒い笑顔を向けられて私は強引に自分を落ち着かせる

ロシア「あー、頭打ったんだね。血が出てるよー？」

なつじ「血じゃないよ！ケチャップだよ！」

ロシア「ホント一回落ち着いて」

平気な顔をしているロシアも所々擦り傷をつくっていた

なつじ「ロシアも大丈夫？所々ケチャップが出てるよ？」

ロシア「血とケチャップは全然違うからね？あとさっき聞いて思ったんだけどケチャップ食べただけで体から出るわけないからね？」

パニックっていた時の私の間違いをロシアに冷静に訂正される

なつじ「つかみんな死んでないよね？」

ロシア「うん、さっき確認したけどちゃんと生きてたよ」

ロシアと話をしているとだんだん怖い話になってしまつのは気のせいだろうか

死んだとか生きてたとか笑顔で………

さいほの「うう………」

さいほのがうめき声をあげながら起きた

なつじ「チャオー　さいほの大丈夫ー？」

なんとなくイタリアの口調を真似てさいほのに声をかける

さいほの「なんか体のあちこちが痛い……………」

なつじ「ロシアよりは少ないけど擦り傷だらけだね…………二人ともあとで消毒しよっか」

どうよこのお姉さんぶり!!

これで誰も私のことをチビなんて呼ばなくなる!!

さいほの「自分でできるから大丈夫だよ」

ロシア「こんくらいほつといっても大丈夫だよ」

私を頼ってー!!

なんか恥ずかしいよー!!

アメリカ「いつつ……………ここはどこだい?ていうか俺は誰だい?」

イギリス「ふざけるな」

アメリカ「いだっ!」

起きてさっそくボケたアメリカをイギリスが殴る

ほのか「う……………よかった……………生きてたわ……………ってうわっ!なつじ頭からケチャップが!」

ロシア「だから違うってば」

日本「いたた……腰うつた……」

中国「あいやあああ……体のあちこちが痛いある……死んじやうある……」

ドイツ「おいイタリア、大丈夫か？」

イタリア「全然大丈夫じゃないでありますっ！！」

ドイツ「大丈夫だな」

フランス「うわー汚れちゃったよ……」

みんなが次々に目を覚ます

よかった、みんな対した怪我してないね……

あとは……

なつじ「苑子、起きないね」

さいほの「死んだんじゃね？」

ほのか「おい……」

その時、苑子の指がかすかに動いた

そしてゆっくりと体を起こして苑子は立った

苑子「いやー死ぬかと思っただわー」

全身血だらけの姿で

なつじ「今から死んでもおかしくねーからな」

ほのか「ほいつ、出来たでー」

ほのかが私の頭に包帯を巻いて仕上げに思いつきり私の頭を叩く

なつじ「いだっ！！何すんだよ！」

ほのか「いやあ、つい」

なつじ「お前後で覚えてろよ」

苑子「ふがふがふが」

苑子は全身に包帯を巻いているから何言ってるかわかんない

なつじ「全身に包帯って………そんなにひどい怪我だったの？」

よく生きてんな

さいほの「んー？いや怪我はあんましてなかつたよ？でもなんか血だらけだったからとりあえず包帯ぐるぐる巻きにしたいっ！」

さいほのが満足した顔で親指をつきあげてグッジョップした

全然よくないよ……

中国「それよりこれからどうするあるか？」

「ほのか「うーん、つか人が誰もいないのってなんで？」

なつじ「敵のせいなんじゃないの？」

日本「菜摘さんの言うとおりです」

どうだ！すごいだろう！！褒めろ、讃えろ、ひざまづけええええ！！！！

って私はプロイセンか

日本「ここは敵が作り出した異次元の世界です。敵がこの世界を消さないかぎり私達はここから出られません」

苑子「な、なんだってええええ!!?」

ホントこいつリアクションうぜえな

ロシア「じゃあ敵を捕まえて消してもらえばいいんだよね」

笑顔で言ってるところが余計怖いよロシア

ドイツ「でも敵がどこにいるか……………」

ロシア「いい加減出てきたらー？」

ロシアがドイツの声を遮って大声で言った

えっ、いるの！？どこどこ！？

そしたらどこからともなくあの二人が出てきた

『ふっ、気づいていたか。さすが“国”だな』

キリハだとかいうやつが見下したように笑っ

うぜえ殴りてえ。いいよね？少しくらい問題ないよね？

ということで、

なつじ「なつじパンチ！！」

『ぐはあっ！！！』

なつじパンチ、キリハの顔に炸裂だぜ

『キ、キリカああああ！！！』

あ、姉の方だったわ。やべえ間違えた。まあ似てるから悪いんだよ
私はなんも悪くない

『貴様！キリカになんてことを！！』

なつじ「いやあ、つい　つかお前シスコン？」

『違う！！ただキリカが好きただけだ！』

さいほの「それをシスコンというのだよ」

ここにきてまさかのシスコン発覚……

キモい……

ロシア「どうでもいいから僕達をここから戻してくれない？」

『戻すわけないだろう！！お前らはここで死ぬんだ！』

苑子「ねえ、キリハ達はどうしてそんなに私達を殺そうとしてんの？」

苑子がまた変顔、じゃなくて苑子なりの真面目な顔になった

『それは上からの命令だからに決まってるだろう！』

苑子「へー……でもキリハ達、ホントはこんなことしたくないんじゃない？」

『！！！！！！？』

苑子の言葉にキリハとキリカが言い返せなくなる

苑子「あ、凶星？凶星だよね？凶星以外ありえないよね？」

ほのか「なんで嬉しそうなんだよ……………」

『お、お前らに話す必要はない！！行くぞキリカ！』

『あ、ああ……………！』

イタリア「あ、ちょっと待って！！ここから出し……………」

突然、イタリアの横から高速で何かが二人に向かって飛んでいった

それは二人に直撃し、二人は地面に落下した

『いっつつつ……………何を……………』

ロシア「言ったよね？捕まえてここから出してもらって」

ロシアは笑顔で地面にささった水道管をぬいた

この笑顔の前ではキリハとキリカも従うしかなかった

なんだかんだで気が付いたらさっきまで静かだったのに車の走る音でうるさくなった

つまり戻ってきたわけだ

苑子「ありがと……………ってあれ？」

あのバカ双子はまたどっかに消えちゃったし……

でもよかったー、戻ってこれて

あのままあそこにいたらどうなってたんだろ？

ロシア「異次元世界から出られなくなってそのまま異次元に飲み込まれちゃうんだよ」

なつじ「うん、勝手に心を読まないで」

エスパー？

やっぱロシア怖いわ……

私は空を見上げた

さっきまではオレンジ色だった空が今は真っ黒になっていた

つまり夜だ

さいほの「これからどうするの？」

イタリア「早く帰ろーよー！怖いよー！」

イタリアはドイツの肩を掴みぐわんぐわん揺らす

ドイツ「帰りたいのはやまやまなんだがな……………」

ドイツは困った顔で呟く

ドイツ「もう……………帰る電車がないんだ……………」

苑子「……………は？」

ドイツ「ここはあまり電車が通らないんだ。一日に三回くらいしか」

アメリカ「そんな……………」

ほのか「あ、じゃあバスは！？」

イギリス「あんなことがあった後でよく乗りたいと思えるな……………」

あとバスも今日はもうやってこないぞ」

ほのか「えー……………」

なつじ「じゃあタクシー！」

中国「どんだけ金かかるあるか。我は嫌ある。第一あの狭い車にこの人数が入れると思うあるか？」

…………… 思いません。

じゃあ……私達野宿するしかないのかな……

日本「そんなこともあると思ってここ周辺のホテルを調べてきました」

日本が紙の束を出して笑顔で言った

日本が菩薩に見えた瞬間だった。

その22 危機一髪？（後書き）

感想お願いします!!

その23 温泉は泳ぐところじゃありません（前書き）

じゃあ俺はこっちで寝

出てけ変態

byフランス、さいほの

夏休み編を書きはじめて約一ヶ月……

もう10月やん！！秋やん！肌寒くなってきたやん！！

と思う方もいらっしゃると思います。

しかし安心してください

私の中ではまだ夏休みは続いているのです！！

さいほの「どこに安心すればいいんだよ……………」

その23 温泉は泳ぐところじゃありません

紙を片手に道を進んでいく日本を私達は重い荷物を持ちながらついていった

ほのか「に、日本……まだ……？」

日本「申し訳ありません……。先ほどまでいたところは人通りが少なくてホテルまではかなりの距離があることを言うのを忘れていました……」

まだ歩くつてことが……

正直つらいな……

フランス「もう真つ暗だな……」

ドイツ「早くしないとまたあいつらがやって来るかもしれない。がんばろう」

イタリア「……ヴェ、ヴェ……」

さいほの「大丈夫か？荷物持とうか？」

イタリア「だ、大丈夫！！女の子に重い荷物なんか持たせられないよ！」

なつじ「じゃあ私の荷物持つて」

イタリア「え、」

さいほの「コラ」

なつじ「あいたっ!」

完全に疲れているイタリアに荷物を持たせようとしたなつじをさいほのはチョップした

鬼か、なつじは

なつじ「鬼じゃない、ドSだ!」

苑子「自分で言うなよ……」

つか自覚あんのかよ

しばらく歩いていると辺りはだんだん騒がしくなっていき明かりも増えた

中国「やっと都会っぽい所に来れたあるな……」

日本「たぶんこっちです」

人が多いからみんなとはぐれないように日本についていく

やがてどでかい建物の前に到着した

苑子「え、まさかここ？」

日本「はい、そうです」

さいほの「でかつ！！絶対宿泊料金高いだろ！！」

なつじ「ダメだよさいほの、そんな現実的な話はやめよーぜっ」

さいほの「いやここは読者も気にするところだろ」

ほのか「なんだかんだでどうにかなるもんなんだよ、金は」

さいほの「世の中そんなに甘くねーよ？」

細かいことは気にしなーい

そしてまあなんだかんだでホテルの中へ

そして部屋ん中

部屋は10階で男と女でわかれて部屋に入った（隣同士の部屋）

さいほの「おー、大きい」

なつじ「つかあっち一部屋で8人！？せまくね！？」

フランス「じゃあ俺はこっちで寝」

さいほの「出てけ変態」

ほのか「フランスは床で寝るから大丈夫じゃない？」

突如入ってきたフランスをさいほのが蹴りで廊下に追い出した後、私達はお風呂に行く準備をした

苑子「洋風なホテルなのに温泉があるなんてめずらしいねー」

さいほの「なんかいつも露天風呂入ってるからあんま楽しみじゃないな……」

苑子「そうかい！？私はワクワクすっぞ！」

なつじ「うざい」

苑子「ひどい……」

ほのか「お、なんか棚に浴衣が入ってたよー！！」

さいほの「和風と洋風が見事にコラボってるホテルだな」

苑子「じゃあご飯は中華かな！？」

なつじ「どうでもいいだろ、そんなん」

私達はこなくなっただらない話をしながら部屋を出た。
そして隣の部屋のドアをノックした

ほのか「おーい、温泉行こー！」

『ぬわあああ！！やめるんだぞおお！！』

さいほの「……………何が起きてるんだ中で」

なつじ「！！！！まさかあいつらが来たんじゃない！？」

苑子「マジでか！？よくここだってわかったな！！」

ほのか「と、とにかく助けなきゃ！！」

私達はドアを開けて中に入る

さいほの「お、おい！！大丈夫……………か……………」

中に入った途端、私達はその場に立ち尽くした

部屋に充満した何とも言えない臭い、そして部屋の隅っこでいがみ合うアメリカとイギリス

イギリスは黒い物体を手に持っている

アメリカ「だあかあらあ！！君の料理なんて死んでもいらないんだぞおお！！」

イギリス「な……………！お前がお腹空いたってうるさいからあげてやるんだろうが！！」

アメリカ「お腹は空いたとは言ったけど君の料理が食べたいなんて一言も言っていないんだぞ！！ていうか死んでも言わないんだぞ！！」

イギリス「てめ……………！！」

なつじ「なにやってんだてめえらは」

なつじが二人にチョップする

アメリカ「お腹が空いた、って言ったらイギリスが勝手に料理を差し出して来たんだぞ!!」

イギリス「腹が減ってるなら食べんだろ!!」

フランス「餓死寸前でも食べれないね、お兄さんは」

苑子「私もだなー」

イギリス「てめえら……」

さいほの「はいはいそこまでー」

イギリスがキレル五秒前のところでさいほのが手を叩いてイギリスの前に立った

さいほの「ふんっ!!!!」

そしてイギリスの腹を思いきり殴った。

イギリスは白目を向いてそのまま床に倒れた。

お、オーマイガー……

さいほの「ほれ、行くぞ。早く入りたい」

さいほのはぐったりしたイギリスをドイツに渡し部屋をでた

か、かつこいい……………!!のかな?

ほのか「うはあああ!!でかあああ!!」

温泉はすんごく大きかった。たぶん百人は余裕でいけるんじゃないか!?

苑子「ダー……イブ!!」

なつじ「すんな」

なつじは走って温泉に飛び込もうとした苑子の足を自分の足にかけて転ばせた

苑子「ぬ……っ!!」

苑子、頭から落下
痛そ……………

なつじ「まずはかけ湯だバカ」

さいほの「だからって普通ここまでするか？見てごらん、綺麗な床が赤い液体で汚れていくよ」

うわ！苑子出血しとるやん！！！どんだけ出血すんだコイツ！いつか大量出血で死ぬんじゃない？

なつじ「あ、すみません。ホテルの人。」

ホテルの人かよ

苑子「う、うう……」

ほのか「大丈夫？」

苑子「うん！大丈夫っ！」

そつ言う苑子は頭と鼻から大量に血を流している

全然大丈夫じゃないように見えるのは私だけだろうか

かけ湯をして私達は湯舟につかる

ほのか「ううううっ！！日焼けがヒリヒリするうう！！」

苑子「ほんとやね」

なつじ「苑子、日焼けしたん？」

元々苑子は肌が黒いからあんま焼けたようには見えない

苑子「焼けたでー？ほら水着の後がくつきり」

さいほの「ホントだwって私もだ」

なつじ「うわ、私も」

ほのか「私もだ！」

みんな日焼けした体にくつきりと水着のあとがついている

おかしくて私達は声をそろえて笑った

あいつらに監視されていることに気付かずに……

その23 温泉は泳ぐところじゃありません（後書き）

夏休み編は遅くても10月後半には終わらせたいです……

まあ私の中では夏休みはずっと続く……

なつじ「しつこい」

さーせん

感想等、お願いします！

質問とかあったらどんどん聞いてください！

その24 浴衣DEトーク (前書き)

じじいだ

立派なじじいだ

b yさいほの、苑子

最近肌寒くなってきましたね……………

風邪をひかないよう気をつけてください

その24 浴衣DEトーク

さいほの「ふー、さっぱりしたあ……」

さいほのは濡れた髪をタオルでふきながら浴衣の袖に腕を通した

さいほの「……………そういえば浴衣ってどうやって着るんだ?」

苑子「さあ?」

苑子がまぬけな顔で答える

なつじ「私もあんまわかんないな……」

ふっふっふ……………

ほのか「ここはほのか様にお任せヨー!」

なつじ「誰も頼んでないけどな」

なつじの毒舌が心にグサツときたけど、そんなことこの際気にしない
いい

(と言いながらも涙が出ちゃうのはなぜだろう)

苑子「黒須よく旅行とか行くもんねー」

ほのか「うむ!だから浴衣着るのは(たぶん)慣れてるよ!」

さいほの「おお！よろしくお願いします黒須先生！！」

せ、先生……………！！

なんていい響き……………

よおし、私にどんどん聞きなさい！

なつじ「体重いくつですか先生」

ほのか「ぶつ殺すぞ」

それは聞くな

ほのか「まずこうしてこうしてこうすんだよ！」

さいほの「先生、何がどうなのかさっぱりわかりません」

ほのか「作者が浴衣の着方を詳しく知らないから仕方ないんだよ齊藤くん」

さいほの「そうなんですか先生」

ほのか「大人の事情なんだよ齊藤くん」

苑子「まだ作者は中学生のガキですよ先生」

ほのか「ノリだよ藪崎くん」

なつじ「もうやめろそのやりとり。うつすぞ」

ちっ、なんか今日のなつじノリ悪いーな

苑子「でもさすが黒須！浴衣着れたよ！」

さいほの「こんな黒須にも頼れる所があるんだな」

そ、そんなに頼れないのか私は……

なつじ「おおー」

ほのか「さ、行こうかー」

私達は女子風呂から出て置いてあったマッサージチェアに座りイタ
リア達が出てくるのを待った

さいほの「ああー、そこそこ。気持ちいいー……」

さいほのは思いつきり和んでいる

なつじ「肩こってたんだよなあ……」

苑子「ぐおー……」

苑子はいつの間にか口を開けて爆睡していた。
やめて恥ずかしいから

私はなるべく苑子とは他人のふりをしたが周りの冷たい視線は苑子
だけじゃなく私にもふりかかる

苑子あとで覚えてるよ……！！

さいほの「つかあいつら遅いな。海の時もそうだったがこういう時に女より男の方が遅いとはどういうことだ？」

なつじ「またフランスが覗こうとしてんじゃない？」

ほのか「それはないでしょw」

ドイツ「その通りだ」

なつじ「冗談だったのに本当だったとはアンビリーバー」

男湯からぞろぞろと男が出て来た

一名ボロボロだったが

さいほの「覗こうとしただけでなんでそうなるんだ」

アメリカ「そう言うのは聞いちゃいけないお約束なんだぞ!!」

アメリカがH A H A H A と笑う

しかし今気付いたけどみんな浴衣似合ってるなあ……

日本はもちろん外国の人とかが着ても似合っんだな浴衣ってまさにオールマイティアイテム！

って何言ってるんだ私は

日本「まあ夕食の時間まで部屋でお話でもしましょうか」

こういつ時って日本がいてくれて本気で助かる

んで部屋。
(男の方の)

せつかくこういう時なんだし聞けるもんは聞いとかないと!!

と、いうことでえー……

ほのか「質問コーナー!!」

苑子「いえーい!!」

よかった、苑子のつてくれた

安心するな苑子いると

なつじ「またくだらない……」

ほか「くだらないよ!!さてさて。。。県の。。。さんからの質問!」

さいほの「募集とかしてねーだろ」

ほか「まーまー、成り行きだよ成り行き。それよりこのコーナーは今まで疑問に思っていたことを質問しちゃえ　っていうごくありきたりなコーナーだよ!」

イギリス「まんまだな」

ほか「つーことで質問っ!」

中国「言った張本人からあるか……」

ほか「日本って爺って言われてるけど何歳なの!？」

なつじ「黒須にしては普通の質問……。私も気になった」

日本「そうですね……」

日本が顎に手を当てて考える

日本「忘れてしまいました……」

さいほの「じじいだ」

苑子「立派なじじいだ」

イタリア「に、日本……おじいちゃんみたいだよ……」

日本「だからもう爺さんですって」

さいほの「あ、次は私が質問していいか？」

ほのか「なにになにー？」

さいほの「なんでイギリスの料理はまズ……」

ほのか「それ以上言うなあああああー！」

私はとつさにさいほのの口をふさぐ

イギリス「ん？なんだ？」

ほのか「いやいやいやなんでもない！！気にしないで！」

さいほの「んー！んー！」

もがくさいほのをおさえつけて笑顔でイギリスを見る

イギリス「そ、そうか……」

よかった、感づかれなかった……

私はさいほのを解放して安心する

さいほの「で、なんでイギリスの料r……」

ほのか「だあああああー！！！」

もうキリがないからさいほのは気絶させちゃいました

イギリス「な、なんなんだよ……………」

苑子「なんでもないよ！さいほの、イギリスの料理食べたらしいからあとでさいほのだけに食べさせてあげてね！いい？さいほのだからね！！」

イギリス「え、あ、ああ……………」

まあ、完全に失神しちゃってるさいほのはおいといて

ほのか「はい次のしつもーん！誰かいなーい？」

フランス「はいはい！お兄さんが……………」

ほのか「はい、ほかー」

フランス「え！？なんで！？」

なつじ「お前が質問することは大体想像できんだよ変態」

フランス「ち、違う違う！お兄さんちゃんとした質問するから！」

苑子「ちつ、仕方ねーなあ。言わせてやるよ」

なつじ「おお、いきなりブラック苑子」

フランス「ほいきた！！ずばり！君達四人のスリーサイズ……………」

ほ・な・そ「死ね」

この後、フランスがどうなったかは言うまでもない

さいほの「う、うん……………？あれ？」

ロシア「あ、さいほのちゃん。おはよう」

さいほの「お、おはよう。って……………何があっただフランス」

さいほのが起きてまず目についたのはボロボロになったフランスだった

ドイツ「……………まあ自業自得だな……………」

さいほの「ホント何があっただ……………」

ほのか「私は女の敵を退治しただけだよ」

苑子「ペッツ！……！」

さいほの「そ、そうか……………」

ほのか「はいほかに質問ある人っ！」

ロシア「じゃあ僕いい？」

なつじ「ロシアか、なんか珍しいね」

ロシア「えっと……菜摘ちゃんって妹いるよね？」

なつじ「え？うん、いるよ」

ロシア「妹が自分の言うことを聞かない時ってどうしたらいいのかな……」

なつじ「え、そうだなー……殴る？」

苑子「姉とはあるまじき答えだな」

ロシア「そ、そっか……今度やってみるよ……」

ほのか「いや、やんなくていいから」

ベラルーシのことでホントに困ってたんだな……
大変だなあ……

イタリア「うう……ドイツお腹すいたよ……」

イタリアはお腹をおさえている

ドイツ「もうこんな時間か」

時計は7時をさしていた

日本「夕食の時間ですね。行きましょうか」

苑子「いやっほう!!!中華、中華!」

さいほの「だから中華と決まったわけじゃないってば」

中国「中華料理なら我が国が1番あるよ!」

ああもう中華料理の話に……………

つか私、中華料理苦手なんだけど……

まあとにかく夕食、夕食ー♪

私達は部屋から出て食事の会場に向かった

その24 浴衣DEトーク (後書き)

感想お願いします！

その25 食事は計画的に（前書き）

ごっそーさん！！

b y 苑子

今回は普段目立たないさいほのが語り&メイン（？）な話

そしてさいほのが萌えに目覚めてしまいますw

その25 食事は計画的に

私達はエレベーターに乗り3階にある食事の会場に向かった

さつきからほとんどの人がテンション高すぎてついていけない

薮崎は中華中華うるさいし……

だから中華じゃないかもしれねえだろーが

いろいろな事を考えていると食事の会場についた

会場についたとたん薮崎を含むほとんどの人達のテンションはMAXになった……

苑子「いやっほーいーい！！中華中華ああああ！！」

ほのか「肉ううううっ！」

イタリア「パスタアアアアア！！」

アメリカ「ハンバーガーー！！」

中国「ただ飯食い放題あるううううっ！！」

やめる叫ぶな恥ずかしすぎるし周りの人の視線が痛い

残った私達は入口付近にいる人に自分達の人数を言い席を案内してもらった

（12人って言ったらかなりびっくりされたが）

どうやら夕食はバイキングらしい。席につくと様々な食べ物のいい匂いがただよってきて食欲をそそる

日本にさっき走っていった奴らを捕まえて来てもらいとりあえず全員を席に座らせる

私は一息ついて話しはじめた

さいほの「いいか？このホテルは私達だけじゃなくほかの人も宿泊してんの。だからはしゃぐのはわかるけどほかの人の迷惑になることは絶対にやらないこと、わかった？」

さつきまで思いつきりほかの人に迷惑をかけていた奴らははい、と小さく言った

さいほの「うん、じゃあ行ってよし」

一部「いやっほーい！！！」

おいコラ人の話聞いてたのか

私は話が終わった途端突っ走って行った奴らを捕まえ、また説教したさすがにわかったらしく次は静かに食べ物を取りに行った

なんで私が疲れなきゃいかなのだ……

おぼんと皿を取り食べたい物を食べきれる量皿に乗せて席に戻った私が席についた時にはすでにドイツとイタリアとロシアは席に座っていた

って……

さいほの「イタリア、パスタだけかよ!!」

イタリア「え!?だ、だって……」

さいほの「だってじゃない!ほかの物も取ってきなさい!できれば野菜!」

イタリア「は、はいいい……」

イタリアは渋々皿を片手に席を立てサラダコーナーに向かった

ロシア「お母さんみたいだね」

ロシアがニコニコして私を見る

さいほの「当たり前のことだよ。ああ疲れた……」

ドイツ「でも助かるな、ありがとう」

さいほの「そっか、いつも苦労してんのはドイツだもんな」

ドイツ「まあな……」

ドイツと話をしていると次々とみんなが戻ってきた
みんなが持ってきた料理を見るとイタリアのようにみんな栄養バランスが崩れまくっている

言いたいことはたくさんあるのだが今は疲れたしせつかくの旅行だ。

こんなことで嫌な思いはさせたくないから見て見ぬふりをしよう

全「いただきますーす」

みんな食べ物をつまんで食べはじめる

食べてるときだけ静かだな……

イタリアはやはりかわいそうなので特別にパスタだけ食べてもいいことを許可した

笑顔でパスタを頬張っている姿がなんとも微笑ましい

って何考えてるんだ私！

私は二次元などには興味はないはずだ！何ちよつとオタク的な目でイタリア見てんだ私！！

これじゃ黒須達と同類じゃねえかああああ！！

ほのか「ん？どしたのさいほの」

さいほの「な、なんでもない」

言えない、ちよつとだけイタリアに萌えてしまっていたなんてええ……

齊藤ほのか、一生の不覚……！！

苑子「ごっそーさん！！」

なつじ「早っ！！あんないつぱいあったのに……」

アメリカ「ごちそうさまなんだぞ！」

イギリス「お前も早いな……………」

苑子とアメリカはもう食べ終わってデザートを取りに行った

しかし……………」

さいほの「イギリス、お前料理まずいわりにはちゃんとした物食べ……………」

ほのか「わーわーわーわあああああ!!」

私のイギリスへの言葉は黒須によって遮られる

さいほの「なんだよ黒須、私は……………」

ほのか「ほのかチョップ!!」

さいほの「いだっ!!」

黒須の必殺技『ほのかチョップ』が私の頭にヒットする。
当たった所がハンパなく痛い、それがほのかチョップだ。

黒須を睨むと、黒須は私に小声で話しかけてきた

ほのか「いい!? イギリスは料理がまずいことがコンプレックスなんだからあんまりつつこんじゃダメなの!! わかった!?」

さいほの「あ、うん……………」

イギリス「なんだ？」

さいほの「いや、なんでもない」

イギリスは気にしない様子で食事を再開した
私と黒須も食べ物を口に運ぶ

しばらくして全員食べ終わり食事の会場を出た

苑子「はああ……お腹いっぱい」

なつじ「ご飯を三杯おかわりし、デザートにアイス在五個も食べり
や腹いっぱいにもなんだろ。普通」

ほのか「苑子食べ過ぎ……」

こついう黒須もアイスを七個たいらげている。
お前も例外じゃねーからな？

アメリカ「それよりさ、ゲーセン行かないかい!？」

アメリカがテンション高めで提案する

中国「ゲーセン？」

日本「なるほど……いいですね、ホテルにはゲーセンは定番です
からね」

フランス「ゲーセンは、っと………3階にあるみたいだな」

フランスが壁に設置してある物を見て言う

アメリカ「よし、じゃあ行くんだぞー!!」

アメリカは走り出した

イギリス「おいゲーセンならこっちだぞ」

アメリカ「……………」

しかしアメリカが進んだ方向はゲーセンとはまったく逆の方向。
やっぱこいつはバカだ

その25 食事は計画的に（後書き）

感想とかお願いします！

その26 ゲーセンではしゃぐのは子供だけ（前書き）

お前らチビって言いたいだけだろ！！

b yチビ……じゃなくなてなっじ

すいません、結構間があいてしまいました；

その26 ゲーセンではしゃぐのは子供だけ

私達はゲーセンに向かっていた

ほのか「つかお金あんの？」

日本「そこは気にしない決まりです……」

気にしちゃダメなのか……

やがてゲーセンに到着してアメリカはかなり興奮している

アメリカ「すごいんだぞー！日本のゲーセン！」

フランス「来たことないのか？」

アメリカ「ゲーセン来ること自体が始めてなんだぞー！」

さいほの「そうなの！？」

アメリカ「とりあえず遊びまくるんだぞー！」

アメリカはゲーセンの中を歩きまくり嬉しそうにゲーム機を見ている

子供^{ガキ}か。

アメリカ「日本ー！これ壊れてるんだぞー！」

日本「え？」

アメリカに呼ばれて私達はアメリカのもとに行く

アメリカはクレイゲームのボタンを押しながら不安そうに日本に訴えた

アメリカ「ボタンを押してもうんともすんとも言わないんだよ……」

日本「あー……アメリカさん。ゲームセンターのゲーム機はすべてお金を入れないと動かないんですよ……」

アメリカ「な、なんだいそれ！？なんでゲームやるだけなのにお金を払わないといけないんだい！？」

苑子「あ、それ私も思う！！」

なつじ「同情するところじゃねーだろ」

なつじがハリセンでアメリカと苑子を叩く

ってハリセン！？どっから出てきた！

苑子「いたい……なんで！？なつじもそう思うでしょ！？」

なつじ「そういう決まりなんだから仕方ないっしょ。黙ってお金投入しろ」

苑子「なんで私！？」

ほか「一回くらいいいじゃん！アメリカにやらせてあげよ？」

苑子「うー」

苑子は渋々財布から100円玉を取りだしクレーンゲームに入れる

アメリカ「……………」

さいほの「いーか？欲しいものをボタンを押して取るの、やってみ？」

さいほのに言われた通りにアメリカはボタンを押してクマのぬいぐるみを狙う

しかし初めてなのでクマのぬいぐるみを掴んだはいいがすぐ落ちてしまう

アメリカ「あ、落ちちゃったんだぞ」

さいほの「あー、残念だな。終わりだ」

アメリカ「え！？終わり！？全然楽しめてないんだぞ！？」

中国「そういうゲームある」

アメリカ「なんだいなんだい！！ぼったくりじゃないか！！ぼったくりだああ！」

アメリカはクレーンゲームの透明なガラスを叩いたりするもんだか

らイギリスは急いでアメリカを止める

ほのか「こういうのだから取れたとき嬉しいんだよ」

苑子「こんなことで騒ぐなんて子供だね^{ガキ}w」

アメリカ「なんだとおっ!？」

ドイツ「落ち着けアメリカ」

苑子「こういうのはコツがあるんだよ、っと……………」

苑子はまた財布から100円を取りだし入れた

そしてボタンを押す

苑子「こうやってえぐりこむように……………うつべし!うつべし!」

なつじ「ボクシングか」

こうふざけているように見えてもちゃんとぬいぐるみをがっちりとキャッチしている

アメリカ「おお……………」

日本「上手ですね、苑子さん」

苑子「いやあ……………」

ぬいぐるみはそのまま上に持ち上げられ出口へと移動していく

フランス「おお！いけるんじゃないか！？」

そして出口の真上にたどりつきぬいぐるみはゆっくりと落下していき取りだし口に……………

いけなかった。

ぬいぐるみは出口の近くにあった人形の山につっかかり落ちてこなかった

……………

苑子「返せええええええ！！私の幸せと時間と200円を全て返せええええええ！！」

さいほの「お前は子供^{ガキ}すぎるよ！！」

我を忘れクレーンゲーム機を叩きまくったり蹴りまくったりする苑子をなつじと中国がなんとかおさえる

なつじ「落ち着いて苑子！あとでアイスおごってあげるから！！つていうのは嘘だから！」

中国「何が言いたいあるか……………」

苑子はようやく落ち着いてきた

イタリア「???何あれ?」

イタリアがそう言っ指差したのは誰もが知っているゲーセンに必ずあるゲーム機、太鼓の。人だ。

日本「ああ、これはリズムに合わせて太鼓を叩くゲームですよ。このバチで太鼓を叩くんですよ」

イタリアに説明しながらバチを持たせる日本。

ほのか「よしっ！イタリアやろっ!」

イタリア「イエッサーー!!」

私は100円を入れて準備満タンド

さいほの「……………イタリアの分も出してやれよ」

ほのか「うっさいなあっ！出すよ!!」

言われなくても出すっつの

私はもう一枚100円を取りだし入れた

ゲームが始まり陽気な音楽が流れる

ほのか「イタリアは何の曲がいい？」

イタリア「俺は何でもいいよー」

ほのか「じゃあ私が決めるね、えーと……………」

苑子「あ、黒須が好きな『凜として咲く花の如く』があるよー!」

な、なんだとお!!?

ほのか「よしやるぞイタリアああ!」

イタリア「え、え!？」

私、この曲大好きなんだよおおっ!!

おっしやあああ!!

本気出すぞおおっ!!

そしてなんだかんだで終了。

イタリア「ヴェー……………難しいね……………」

さいほの「覚えれば簡単だよ、もう一曲できるからやってみ?」

ほのか「なつじ、やる?」

なつじ「なんで私?」

ほか「え、だって部活でパーカッションやってたから得意かな？
って……」

なつじ「そんな理由かいな」

私はなつじにバチを渡す

なつじ「なんの曲がいい？」

さいほの「ミス。ル！！」

なつじ「お前には聞いてねーよ」

イタリア「なるべくゆっくりで簡単な曲がいいな」

ロシア「さっきの早いし難しかったよねー」

ほか「うん、私間違えまくった」

さすが撫子ロック

なつじ「じゃあこれね」

そう言ってなつじが選んだのは早くてめちゃくちゃ難しそうな曲

全員『こいつドSだ……』

全員がそう思った

中国「イタリア、とりあえず落ち着いて頑張るある！」

イタリア「う、うん！」

曲が始まってゲームが始まる

予想通り曲がめちゃくちゃ早いからめっさ難しかった

なつじは無表情でそれを叩く

イタリアは最初の方は叩ける所はがんばっていたがだんだんついていけなくなり半泣きになる

イタリア「うわああ！できないよおお！」

ドイツ「泣くな！がんばれ！」

苑子「つかなつじうまつ！！チビなのに！」

ほのか「ホントだ！チビなのに！」

さいほの「さすがパーカッション！！チビなのに！」

なつじ「お前らチビって言いたいだけだろ！」

すげえ叩きながらつつこんだ、神だ

結局イタリアは何もできずに、なつじは一回も間違えずに曲が終わった

なつじのあの勝ち誇ったような顔がムカつくのは私だけだろうか

イタリア「ドイツー難しいよー」

イタリアは泣きながらドイツのもとに行く

ドイツ「泣くな……… たかがゲームだろう」

さいほの「そのたかがゲームで素人に勝って喜んでる奴がここにいるがな」

なつじ「んなつー!」

苑子「おとなげないよー」

なつじ「大人じゃないもーん」

そういう問題じゃねーだろ

中国「どうするあるか? もう一曲できるらしいあるよ」

ほのか「いいよー、やりたい人やってもー」

アメリカ「じゃ俺が……」

さいほの「お前破壊しそうだからダメ」

イギリス「じゃあ俺がやってやる」

苑子「イギリスが太鼓……… 似合わないww」

イギリス「うるせえ黙れ」

さいほの「あと一人は？」

フランス「お兄さんやっていい？」

なつじ「フランスも似合わねえww」

イギリス「ふっ、お前が相手か。絶対負けねえからな」

フランス「お兄さんも久々に本気出しちゃおうかな」

イギリスとフランスの間に火花が散る

そんな火花散らすようなゲームじゃないんだけど……

曲が始まった途端、おりやああああ！！と二人が叫び声をあげ太鼓を叩く

恥ずかしくないのかな、大人として

つか二人ともやる気あるくせに全然叩けてないし
なんてくだらない争いなんだ

見てらんないから二人を置いて私達は別のゲーム機を見る

苑子「あ、お菓子とるゲームだ。懐かしいなあ」

ほのか「昔よくやったわあ。私結構得意なんだよ？」

ロシア「面白そうだね、やってみていい？」

さいほの「いいけどこれもさっきのクレーンゲームみたいにぼったくられるケースもあるよ?」

ロシア「僕はそんなこと気にしないからいいよ?子供じゃないしね」

今の言葉、きつとアメリカと苑子の心に深く突き刺さっただろう

さいほのから100円を受け取りゲームを始めるロシア。

ほのか「ロシアこれ初めてなの?」

ロシア「うん、ロシアにはこんなのないし」

初めてのわりにはロシアはたくさんお菓子をとった

日本「上手ですねロシアさん」

ロシア「いいねこのゲーム。楽しいしお菓子も取れるし」

ロシアはご機嫌だ

よかった、コルコル言わないで

あと勝負を終えたイギリスとフランスが帰ってきた

苑子「おかえりー、どーだった?」

イギリス「同点だった」

ほのか「ど、同点?!?!?」

あのゲームで同点って難しくね!?

ほのか「ど、どんだけ仲良いんだ……………」

フランス「絶対お兄さんの方が叩けてたって……………」

なつじ「大人が必死になることじゃないでしょう」

なつじが呆れ顔で肩をすくめる。

中国「……………」

私は中国の様子がおかしいことに気付いた
辺りをキョロキョロと見渡している

ほのか「中国、どうしたの?」

中国「い、いや……………」

中国は一回黙ってしまったがやがて決意したように私に話しはじめた

中国「おかしいある……………」

ほのか「おかしい?」

私と中国の様子に気付いたのかさいほの達も騒ぐのをやめ、黙る

中国「いや……………気のせいかもしれないねえあるが……………さっきまでいた人が
いつの間にかいなくなってる……………」

中国に言われて初めて気付く。

確かにさっきまで私達以外にもたくさん人がいて賑やかだった（私達だけで十分賑やかだが）のには今は私達しかいなくてゲーム機の音が室内に響いていた

さいほの「もう遅いからじゃないか？」

日本「いえ……まだそれほど遅い時間帯ではないですし………」

じゃあなんで？

ま、まさか………

「久しぶり………いや、さっきぶりか？」

全員「！！！！！」

突然聞こえた声に全員が反応する

ゲーム機の音でうるさいのにその声だけははっきり聞こえた

なつじ「ま、またあいつら………」

「またとは失礼ね、私達だって好きであなたたちをつけてるんじゃないわ」

また声が聞こえる

私達はなるべく固まってどこからあいつらが来てもいいように警戒する

「さつきはよく生きてられたな、生命力はゴキブリ並か？」

苑子「ゴキブリじゃないもん!!」

なつじ「反応するところこ!？」

「でも今度はゴキブリ並の生命力を持つあなたたちでもダメね」

突然、周りの景色が歪んだ

ゲームセンターから景色は変わり、私達は遊園地のような所にいた

さいほの「ここは……………」

「「ようこそ、楽しい楽しいワンダーランドへ」」

空にはキリハとキリカが浮かんでいて私達を見下ろしながら怪しく笑っていた

その26 ゲーセンではしゃぐのは子供だけ（後書き）

次回から本題に入るかも……

つか今10月やん……

秋やん、寒いやん……

その27 変態には気をつける!?(前書き)

何?思いやりって

知らね

b y 苑子、さいほの

なんとか投稿できた………

その27 変態には気をつける!?

「「ようこそ、楽しい楽しいワンダーランドへ」」

二人が声をそろえて言った。

なつじ「かつこつけてんじゃねえよ、うぜえ」

そんな二人になつじの毒舌がふりかかる

ずっと冷静にいた二人もなつじの毒舌には流石に傷ついたらしい

「な、そんなこといわなくてもいいじゃん!! せつかくラスボスみたいに演じたのに……………」

ほのか「うるせえよ下っ端」

「下っ端だからこそこんな時くらいラスボスみたいにさせてくんない!!? 思いやりって言葉知ってる!?!」

苑子「何? 思いやりって」

さいほの「知

らね」

「とことんム力つくやつら

だなお前ら!!」

中国「ていう

かなんでこんな所に呼んだあるか。下っ端」

「強調して言うなああああつ!!」

「落ち着きなさいキリハ」

うん、あれだな。キリハはガキだ

なつじ「で、なんで私達を呼んだの」

「よく聞いてくれたわね」

苑子「いや別に聞きたくて聞いたわけじゃねえし。何その待ってました！って顔。バレバレだかんね」

苑子の言葉にキリカはピキツときたが いい加減もたししているとダメなので我慢して話を続ける

「私とキリハはあなたたちの状況を監視させていただいたわ」

ドイツ「監視？」

「そ、あなたたちがあのホテルに入ってからずっとね」

ほのか「うわこの人達監視してたらしいわよ、やあねえ（小声）」

さいほの「警察に通報した方がいいかしら。ほんと最近の若者は怖いわねえ、何するかわからないわ（小声）」

ヒソヒソ

「聞こえてんだよムカつくからやめろ！！」

フランス「いやほんとこれ犯罪だよ？自首すれば罪は軽くなるよ？」

「うるせえよ黙ってる！！」

なつじ「ん？ちょっと待って……………ずっと監視してた、ってことは……………」

「？」

なつじ「お風呂入ってたときも監視してたってこと？」

.....

「は、はは.....」

「まあ、女子風呂を.....少し.....」

二人は笑う

しかし

ほ・さ・な・そ「ぎゃあああああ！！変態iiiiiiii！！！！」

私達女は笑える話じゃなかった

地面に落ちてる石を二人に投げまくる。投げて投げて投げまくる。
ひたすら投げまくる

「ちょ、痛っ！やめ、いたたた！！」

「大丈夫！！キリカ（一応男）は見えてないから！！いたたた！」

さいほの「そういう問題じゃねーんだよクソアマああああ！！」

ほのか「どうせ鼻血たらしめて微笑みながら見てたんだろおお！！」

「私にそんな趣味などないわケええええ！！つかお前らタオル巻いてたろうが！！タオル巻いたまま入浴するなって注意書きに書いてあったのに平気な顔して巻いてたろうが！！」

苑子「あほおおおお！！実はタオルの下には水着も装着してたんだよおおおお！！」

「知らねーよなら別にいいだろうが！！」

ほ・さ・な・そ「いいわけねーだろばかあああああ！！！！」

なつじ「最低野郎めが死ねええええ！！」

もうどつちが悪なんだかわかんなくなってきたわ

「ていうかキリカ、なんで女湯なんだ？別に男湯でもよかったんじゃないか？だったらこんなにごちゃごちゃ言われなかったのに……」

「……………それもそうだな。そしたらキリハも監視できたし」

ロシア「その前に入浴を監視することがどうかと思うんだけど」

フランス「変態め！！」

イギリス「お前が言うなよ」

「ああもう！いちいちうるさい野郎共だな！！とにかくっ！」

キリカは私達にビシッと指差す

苑子「ああー、人に指差しちゃいけないんだよー」

「うるせえ！」

キリハが苑子を怒鳴り睨む

苑子も睨み返す。負けず嫌いめ、でもしかしやっぱり変顔にしか見えない

「お前らに……」

キリカはゆっくりと口を開く

「決闘を申し込む」

その27 変態には気をつける！？（後書き）

本題入る言ったくせに入ってねーじゃねえかあ！！

つーわけで軽ーく次回予告の巻

決闘を申し込んだキリカとキリハ。

その決闘の内容とは……………！？

ほのか達は決闘を受けるのか！？
そして彼女達の運命は！？

その28 決闘（前書き）

お前らが死ぬこと確定だな

by なつじ

今回シリアスだと私は思う。

その28 決闘

なつじ「決闘……………?」

苑子「それってどういう」

「そのままの意味だ」

キリカがぴしゃりと言う

「私達にはお前らを殺せと命を受けている。だからそれには従わなければならない」

さいほの「何回も失敗してるけどな」

「誰のせいだと思ってんだ」

「しかしいつまでたっても命令に従えてないためボスはお怒りになっている」

ほのか「ボスいたんだ!」

初耳!!

イギリス「単独で世界征服なんかたくらむ馬鹿がどこにいたんだよ」

苑子「プーちゃん（プロイセン）ならやりかねない」

全員「ああ……………」

納得すんな！！byプロイセン

ん？いまだここからプロイセンの声が……………

気のせいか

アメリカ「決闘ってどんなのだい！？」

「かくれんぼよ」

さいほの「……………は？」

「かくれんぼよ」

ほのか「いや二回言わなくていいから」

日本「かくれんぼとは……………あの有名な遊びのことですか？」

「その通り。ルールもほとんどは同じ」

「鬼はあなたたち全員。隠れるのは私とキリハよ」

ロシア「範囲はこの遊園地全域、ってこと？」

「そうだよ」

キリハとキリカが笑う。いつもより自信があるようだ。ちょっとムカつく

キリハとキリカは私達の前まで来た。今気付いたけどキリカとキリハの顔、そこそこ整ってんなチクシヨウ

「ほとんどは遊びのかくれんぼと同じ。でも違うのはルール」

イタリア「え？さっきルールも同じって……………」

「全部とは言ってないわ、一部だけよ。今から説明するわね」

キリカがどこからかホワイトボードを持ってきてペンのふたをとりいろいろ書きはじめた

「私とキリハ隠れる側はこの遊園地全域を使い隠れることができる。でも隠れる側は隠れる場所を変えることができる」

なつじ「え、なんかずるくね？」

「別にいいだろ。鬼はお前達12人、隠れる側は俺とキリカ2人だけなんだぞ？こんくらいの手ンデいいだろっ」

中国「んー、まあいいある。説明を続けるよろし」

中国は近くのベンチに座り腕くみをしている。えらそうだな。

その隣で日本がお茶をすすってほっこりしている。爺みたいだな。あ、爺か

「隠れる側は見つかっても終わりじゃない。自分を見つけた鬼を倒せばセーフとする」

ドイツ「倒す……！？それはつまり……！」

「殺す、ってことだ」

さいほの「やっぱりお前らの目的はそれが」

「そうよ、私達はおくれんぼで遊ぶことが目的じゃない。あなたたち全員を殺すことよ」

物騒だな……

「そして隠れる側は鬼を途中で殺してもよし」

……は？

ほのか「それって……自分が見つけられなくても鬼を殺してもいい……ってこと？」

「そうだ、言っただろ。俺達は遊ぶのが目的じゃない。これは殺し合いなんだ」

じゃあおくれんぼの意味なくね？

「制限時間は2時間。それまでに私とキリハを見つけれなかったらあなたたちの負け。逆に私とキリハを見つけれたら私達の負け」

フランス「………負けた方は？」

キリ力はためらいもなくその言葉を告げた

「死ぬ」

私は息をのむ。

あいつらが私達を殺さなければならぬのは前からわかっている。しかしそのボスの命令とやらのせいで自分が死ぬのはいいのかな、怖くないのかな。私は絶対やだな。

あと苑子が前にキリ八達に聞いた言葉

「ホントはこんなことしたくないんじゃない？」

あの言葉を聞いた途端二人は戸惑っていた。

じゃあこれだつて………

自分達がやりたくてやってるわけじゃないはずだ

「じゃあ始めるぞ」

キリ力が静かに言う

私は思い切つてさっきまで思ってたことを聞いてみることにした

ほのか「ねえ……」

なつじ「ボスの命令なのはわかるけど、それで二人が死ぬのっておかしい？」

今まさに言おうとしたことをなつじに言われた。
こ、心読まれた……！？

なつじ「怖くないの？」
わあまるで私の語りがまるまる聞こえてたみたいに私の思ったことをすらすらと……

「怖くなど、ない」

キリカは聞かれて少々戸惑ったが落ち着いて答えた

「任務を成功できないということはボスの命令に従えないと同等のこと。つまりこのゲームに俺達が負けた際には罰を受けるのだ。それは当たり前のことだ」

キリハは表情変えずに言う

なつじ「へえ、そっか。じゃあ……」

なつじは二人を睨む

なつじ「お前らが死ぬこと確定だな」

そして突き放すように言った。

私達は信じられない顔でなつじを見た。

だってあのチビで毒舌でドSでアホななつじがこんなにカッコイイ
こと言ってるのだ。

明日は雪降んじゃねえか？

なつじ「ほのか後で殺すからな」

聞こえてたらしい

「ふ、いい度胸だ。では始めよう」

キリカが指をパチンと鳴らした

その瞬間キリハとキリカの後ろにブラックホールのような穴が現れた。

「今から30分後にゲームスタートだ。それまでに作戦でもたてて
おけ馬鹿共」

苑子「んだとゴラァッ！！」

苑子を無視して二人はブラックホールのようなものの中に消えていき、ブラックホールのようなものも消えた

その28 決闘（後書き）

後書き書くことないんでこれからはキャラ達に反省会でもやらせようかと思っています

* * * * *

さいほの「率直に言おう。なつじと黒須、シリアス似合わないすぎ」

ほ・な「ホントに率直だなオイ」

苑子「うん、似合わない」

なつじ「お前に言われたくねーよ」

さいほの「いや、なんか藪崎シリアス以外と似合ってるから問題ナツシング」

ほのか「ありすぎだよ！なんで苑子似合っちゃうんだよ！」

苑子「ふふ、それは私が天才だk……………」

強制終了

その29 チーム決め（前書き）

アメリカくん、勝手な行動したらどうなるかわかってるよね？フフ……

byロシア

今回はギャグ中心を目指しましたが……

それほどギャグもないと気付いたのは書き終わってからだったという。

その29 チーム決め

キリカとキリハが消えた後、私達は話し合うことにした

さいほの「どーする？あいつら、私達をマジで殺す気だぞ」

さいほのが道に落ちてる石をフランスに投げながら言う。

フランスはいたっ、と言って涙目になる

つかなぜに石投げとるん？

なつじ「どうする、って……………勝てばいいじゃん」

ほのか「そんな簡単に言うけど……………私の勘だとあいつら強いんじゃない？」

なつじ「知ってるよ？」

知ってるのかよ

なつじ「いやあ、なんか強いってわかってても勝てる気がするんだよね！！」

世の中そんなに甘くねーぞ

ドイツ「それにあいつらはいっつ俺達を襲ってくるかわからん」

イタリア「ヴェー……白旗振れば見逃してくれるかな？」

だから世の中そんなに甘くねーっての

日本「しかし敵もすぐ私達の居場所がわかるというわけではありません、でも大勢で行動していたらすぐ居場所がわかってしまいます。ですから何人かにわかれて行動することにしましょう」

日本の提案に全員が頷いた。

と、いうことでえ……

ほのか「くじ引きイエー！！！」

イギリス「お前四次元ポケットでも持ってたのか？なんでもかんでもどこから取り出して………」

さいほの「ドラ。もんか君は」

私をあのためk………じゃなくて猫型ロボットと一緒にしないでくれたまえ

ほのか「えっと、ここに三種類の紙が入ってっから一人ずつ引いて同じ種類の紙の人とチームになってねー」

さあ引いた引いた、と言いながら全員にくじを引かせて最後に私自身も引く

アメリカ「俺は黄色の紙だったんだぞ！」

苑子「私も黄色ー」

黄色の紙を引いたのは苑子、アメリカ、ロシア、ドイツだ。
みんな身長でかいな

なつじ「私は緑だったよ」

緑の紙を引いたのはなつじ、フランス、さいほの、日本だ。
性格がみんな違いすぎるぜ。

イギリス「俺は青か」

青の紙を引いたのはイギリス、イタリア、中国、そして私だ。

凸凹だな

ほのか「よし、じゃあチームも決まったことだし行動開始！」

ドイツ「ちよつと待て」

歩き出した私をドイツが止めて何かを渡してきた

ドイツ「携帯だ、全員に渡しておくから何かあったら必ず連絡しろ。
いいな？」

ほのか「うむ、了解!!」

私は携帯を握りしめた。つか私もとから携帯持ってんだけど……ま、今回はこれを使おうと

さいほの「じゃ、みんな死ぬなよー」

なつじ「アデュー」

日本「失礼します」

フランス「また会おうっ」

そういつて緑チームはいなくなった、フランスとはもう会いたくないが

ドイツ「では俺達も行くでしょう。イタリア、迷惑かけるなよ」

苑子「バツハハイー!!」

アメリカ「HEROの出番なんだぞ!」

ロシア「アメリカくん、勝手な行動したらどうなるかわかってるよね?フフフ……」

アメリカ「NOooooooooooooooooo!!!!」

黄色チームも出発した。

ほのか「んじゃ、私達も出発しますか」

イギリス「そうだな」

イタリア「パースター！！」

中国「大声出すんじゃないある！！」

つーことで私達青チームも静かな遊園地の敷地内を歩きはじめた

その29 チーム決め（後書き）

〈反省会〉

フランス「つかどこでくじ引きの箱とか買ってきたの？」

ほのか「東急ハ。ズ！」

フランス「リアルな答えだなオイ」

ほのか「じゃあ口。ト！！」

イギリス「じゃあつてなんだよ」

さいほの「ちなみに電車で海に行くときに出てきたあの罰ゲームだっけ？あれも東急ハ。ズだ」

苑子「なんで知ってんの？」

さいほの「拉致られてくだらない買い物に付き合わされた」

ほのか「いや、あれさいほのが『CD買いに行くぞ！』って言うて私を拉致ってなんだかんだで東急ハ。ズにたどり着いたんだよ？」

なつじ「そのなんだかんだの間に何があった。どうしてCDショッ

プに行こうとして東急八。ズにたどり着くんだ」

ほ・さ「なんだかんだで」

なつじ「ねえこいつら殴っていい？殴っていいよね？」

苑子「落ち着け落ち着け」

ちなみに多分、東急八。ズにはくじ引きの箱とか売ってないと思うので勘違いして買いに行ったりはしないでください……

感想お願いします！！

その30 決闘の始まり（前書き）

元気だけとお兄さん、心が折れそうなんだけど

by フランス

な、なんとか更新できた…………… ; ;

今回は緑チームメイン！

その30 決闘の始まり

さいほの「しっかし広いな、ここ」

私は呆れながら言った。

歩いても歩いてもこの遊園地の終わりが見えないのだ。

なつじ「ホントだね。あれかな、異次元？だからかな」

さいほの「なるほど。だから広いのか……………」

私は納得しようとしたがある疑問が頭に浮かんた

さいほの「じゃあさ、広い分探すのが大変じゃない？」

さ・な・日・フ「……………」

沈黙。

フランス「そういえばそうだな」

さいほの「そうだな　じゃねええええええー!!」

フランス「ぐぼあっ!!」

私は笑顔で答えた変態ナルシストの腹にスーパーさいほのパンチをくらわせてやった

変態ナルシストは地面にうずくまる

フランス「ふ、普通腹はやるか……………?」

さいほの「顔の方がよかったか?」

フランス「腹にしてくれてありがとうございます」

フランスはひざまづく

なつじ「さいほのもSになったね、私もがんばらないと」

何をだよ

日本「しかしいつ敵が来るかわかりませんね」

さいほの「あいつらが素直に隠れてるとは思えないしな」

なつじ「でも早く捕まえて帰りたいしなあ…………」

うーん…………

さいほの「あ」

日本「どうしました？」

私はニヤリと笑った

さいほの「いいこと思いついちゃった」

フランス「……………」

俺は広場にポツン、と立たされていた

フランス「な、なんでこんなことに……………」

その時、服のポケットの中に入ってる携帯がブルブルとふるえた

携帯を開きボタンをプッシュして携帯を耳にあてた

さいほの『もしもしー？元氣やつてるー？』

携帯から陽気な声が聞こえてくる

フランス「元氣だけとお兄さん、心が折れそうなんだけど」

さいほの『お前にできることといたらこんくらいしかねーだろ？』

フランス「あれ、なんか視界がぼやけてきたわ。おかしいな」

さいほの『いいか？お前はひとりだ。一人でいれば奴らは必ず狙ってくるはず。その時がチャンスだ』

フランス「ちょっと待って、それめちゃくちゃ危険じゃん」

さいほの「危険な仕事だからこそお前の出番なんだろうが」

フランス「今度は目から水が……」

俺は鼻をすする

さいほの『ま、何かあったら助けてやるから』

フランス「つかお前らどこにいるわけ？」

なつじ『陰から見守ってるよー』

フランス「陰？」

日本『ではフランスさん、お気をつけて』

ブチッ、ツーツーッ…

日本の声を最後に電話はきれた

俺は大きくため息をついて携帯をポケットにしまった

フランス「なんで俺が………ていうか敵がこんなみえみえの罠にひつかか…「見つけたぞ変態野郎！」ったよ………」

空を見上げると上空には嬉しそうに笑みを浮かべるキリハとキリ力が浮かんでいた

「ふっ、まさかこんなに簡単に見つかるとはな。世の中にはこんな状況なのに一人で行動するバカがいるんだな」

バカはどっちだ。

フランス「ちょっとやめてくんない？お兄さん、こっぴつの苦手なんだよねー」

俺は腰に念のために護身用にさしておいた短剣を手取る

「お、やる気か？」

フランス「やらなきゃこっちがやられるんで、ねっ！！」

俺は地面を強く蹴り上空にいる二人に向かって剣をふるった

しかし相手はひらりと攻撃を避けて俺の後ろにまわった

「戦ったって戦わなくったって同じだ、お前達は死ぬ」

男の方が俺の耳元で囁き、剣を俺に向かって振り下ろした。
間一髪ギリカの所で短剣でそれを防いだがここは空中だ。

相手の力に押されて俺は地面に叩きつけられた。

フランス「つつつ……………何すんだよ。俺の美しい顔に傷がついたらどうするつもりだよ？」

「うわこいつ自分が美しいって言ってるわ」

「キモッ」

フランス「聞こえてるからね？心にグサグサきてるからね？」

俺はなんとか立ち上がる。でもさっきのダメージが大きくよろける

「さすが漁夫の利のフランス。一人だと何も出来たいのね」

フランス「やめてくんないそのあだ名。カッコ悪いんだけど」

もうちょっとかつこいい名前にして欲しかったな

「ったく……もうフラフラじゃねえか」

キリカがバカにしたように言う。

フランス「はっ、久しぶりだから疲れちゃったよ。つらいね、戦いつていうのは」

「だったら今すぐ楽にしてやるよ！！」

キリカが突然姿を消した

フランス「ど、どこに……」

「上だよ」

声が聞こえて俺は上を向く。しかし何もいない

フランス「な……………」

「ははっ、騙されてんじゃねーよ」

また声が聞こえた。

後ろだ！！

気付いた時にはもう遅かった。

キリカは剣を振り上げてニヤリと笑っていた

「じゃあな、変態ナルシスト」

そんな最期に言われた言葉ってどうよ！！

ガキイイイン！！

辺りに甲高い音が響いた。

後ろを確認すると見慣れた黒髪の青年がいた。

日本「一人の所を狙うとは卑怯ですね、私はそういう人が嫌いなん

ですよ
「

日本はキリカの剣を自分の刀でおさえながら静かに笑った。

その30 決闘の始まり（後書き）

く反省会という名の祝福く

祝 30話突破あああああ!!

全員「いえーい!!」

ほのか「どうもっ!今回出番がなかったほのかです!」

苑子「いやあまさか30話いくとはね」

さいほの「びっくりだよ。あの作者がこんなに続けられるなんて」

なつじ「奇跡ってあるんだね」

イギリス「奇跡ではないか?」

ほのか「はい、というわけで。じいーかいよおーこくうー」

次回予告。

フランスが死にました

フランス「いやいやいやいや！俺死んでないからね！？勝手に殺さないで！？」

苑子「別によくなぁーい？」

フランス「よくないよ！！全っ然よくないよ！！」

ほのか「ちっ、しゃあねぇーなあ。」

次回予告！！

フランスは屍となった

フランス「変わってねぇーだろ！！死体と屍は同じ意味だからね！！」

ロシア「フランスくん、ちょっと黙ってね」

グサ

フランス「ぎゃあああああ……………」

ロシア「うふふ」

ほのか「……………」と、とにかく真面目に次回予告しまぁーす……………」

次回予告！

フランスは死にましたけど何か？

全員「開きなおんな！！」

終わりです

その31 戦闘開始（前書き）

あの子？誰だそりゃ

byさいほの

一週間に一回更新するのが精一杯になってきた………

が、がんばらなければ……

その31 戦闘開始

フランス「に、日本！！なんで……………」

日本「言ったでしょう、陰から見守っているって。私達はフランスさんの様子が十分確認できる位置に隠れていたんです。だからフランスさんが危機に陥っておりましてので助けに来た次第です」

日本は落ち着いた様子で話す。

フランス「つか助けに来んの遅くないか？来るなら敵が来たときに来てほしかったなあ」

日本「いや私は行こうとしたんですが……………」

く日本の回想く

なつじ「お、マジで敵来たよ。フランス戸惑ってるねー」

日本「では行きまし……………」

さいほの「待つて日本！もうちょっとおもしろくなつてから行こつよ！」

日本「え！？そしたらフランスさんが……………ってなんでそんなに目が輝いてるんですか」

なつじ「とにかく！まだ行かないで！」

日本「は、はあ……………」

日本「というわけですぐに助けに來れなかつたわけです」

フランス「うん、あいつら俺のことどーでもいいんだね」

フランスは寂しく言う

「あ、ええと……………すまん。攻撃しまくつて」

「そ、うね。事情があるなら言えいいのに……………」

フランス「やめてくんない？かわいそうな者を見る目で見ないで！」

キリカとキリハまで謝りながらかわいそうな目で見えるからフランスは涙目になる

フランス「で、あの二人はどうしたんだ？」

日本「作戦で私達を囚にして二人を倒すそうです」

日本が小声で言う

「もう話は終わったか？」

キリハはさつきと違って冷たい声で言った。

日本「はい。私達の話は終わりました、あなたたちは大丈夫なので
すか？」

「……どういうことだ」

日本「あなたたちはお互い最期の言葉を交わさなくていいのかと私
は言っているのです」

日本の言葉を聞き二人は日本を睨みつける。

日本はさつきと変わらない落ち着いた表情でいる。

フランス「……………」

フランス、完全にシリアスな空気についていけない。

かわいそうな奴だ。

「いい度胸だな。気に入った」

キリハが剣を構えた。

「氣遣いは嬉しいが俺達にそんな時間必要ない。俺達には今すぐにやらなければいけないことがあるからな」

フランス「……………」

フランス、やはりシリアスな空気についていけない。

「お前らを、殺すことだ！」

「……………」

キリカもシリアスな空気についていけないらしい。

仲間がいてよかったなフランス。

日本「そうですか、では始めましょうか」

日本も刀を構える。

やっと出番？がきたフランスも短剣を構える。

「か、覚悟しなさい！！」

キリカもちよつと遅れて剣を構える。

日本「フランスさん、大丈夫ですか？」

フランス「？何がだ？」

日本「いえ……フランスさん、戦いは好まないようなので……」

日本が控えめに聞くとフランスは難しい顔をした

フランス「うーん、そうだねえ……確かに嫌いだな。戦い、つか戦争は」

フランスは自分が持っている短剣を見る

フランス「人は味方も敵もたくさん死ぬし疲れるし……それに」

フランスは目を閉じて悲しそうに言った

フランス「大切な人まで奪うからなあ」

さいほの「うわ何あれキザすぎるよ。つかシリアスすぎるよ」

なつじ「おおフランス、あの子のこと思い出してるねえ」

さいほの「あの子？誰だそりゃ」

さいほのはヘタリア話の内容とかを一切知りませんw

なつじ「本人に聞いてー、話すのめんどい。で、いつ出る？」

さいほの「そうだな、あの二人が日本とフランスに氣をとられているところをバーンと！」

なつじ「おお！楽しみだねえ」

さいほの「そうだねえ」

→空気読めないーズ

日本「ど、どこからかまったく空気が読めない人達の会話が……」

フランス「お、俺も聞こえたわ。それと同時に殺氣も感じたわ」

二人は顔を青くしてガタガタと震える

キリカとキリハは何があったのこいつら？ みたいな目で二人を見ている。

「うーん、やっぱりこいつらといると調子狂うな……」

「そうね……なんか戦う気失せるわね」

キリカとキリハはさっきあれだけ言っ
 として完全にやる気をなくし
 たようだ

それをあの二人は見逃さなかった。

さいほの「うおっしやあああ！出番来たでえええええ！」

なつじ「行くぞさいほのおおおお！」

二人はそれぞれ手に武器を持ち油断している二人に向かって走ってきた。

フランス「ちよつ、あんな大きい声出しながら来たらバレんだろお
お！！」

日本「ははは、元気ですねえ……」

フランスはさらに顔を青くし、日本は孫を見る目で二人を見ている。

幸い馬鹿なキリカとキリハは背後から迫って来る二人に気付いていない。

さ・な「うおりゃあああああああ！」「」

二人は地面を強く蹴り、さいほのはのこぎり（怖ええっ）をなつじは鉄パイプを二人に向かって振り下ろした。

「「！！！！？」」

二人はようやく背後の殺気に気付き後ろを振り返る。

いける！！

なつじとさいほのはそう思った。

が……………

さいほの「おっ!？」

なつじ「へっ!？」

もともと運動神経が人並みの二人はなんとか上空に浮かんでいるキリカとキリハの所には来れたが二人の体は落下を始めていた。

フランス「あっ」

日本「あらら」

さ・な「ぎゃあああああ!!!!」

二人は叫び声をあげながら地面に落下した。

「.....」

キリカとキリハはそんな二人をなんともいえない表情で見ている。

さいほの「いっつつ.....まさか落下するとは思ってなかったわ
w」

なつじ「いや落ちるでしょ」

あの高さから落ちたのに怪我一つしない二人はある意味すごい

日本「大丈夫ですか!？」

二人を心配した日本とフランスが駆け寄ってくる

なつじ「お、フランスひっさしぶりー」生きてたんだ」

フランス「最後の一言余計だから」

さいほの「なんで死んでないの？」

フランス「意味似たようだからっ!!」

「お前らってホント何がしたいわけ？」

四人に冷たくキリハが問い掛けた

その31 戦闘開始（後書き）

く反省会く

ほのか「あれ？今回の語り誰やってんの？」

さいほの「作者」

苑子「へ！？なんでなつじとかやんないの！？出番あるのに！」

なつじ「めんどくさいから」

ほのか「おいおい！！じゃあほとんどの話で語りをやっている私はなんなんだい！！？」

さ・な「暇人」

ほのか「きつぱり言われたー」

感想お願いします！

その32 敵にまわしちゃ危険な人(前書き)

ツンデレ乙w

b y 日本

最近、緑チーム以外出番ないw

その32 敵にまわしちゃ危険な人

「つたく、何が来たと思えばお前らか」

キリハは呆れ顔で私達を見てきた。

私とさいほのも負けじとガンを飛ばす

さいほの「んだとゴラア。私達に気付かなかったくせにい」

なつじ「ダッサ。もうすぐで殺されそうになってやんのー、ププー
w 恥ずかしいw」

「キリハ、殺していいよね？こいつら今すぐ殺していいよね！？」

キリハは完全に私達の挑発に乗っている。最近こいつボケキャラになっ
てねえか？

フランス「お前ら普通叫びながら来るか？バレるに決まってるだろ
……」

さいほの「バレなかったよ？」

フランス「まあそうなんだけどさ」

なつじ「フランスごときが私に説教してんじゃねーぞ、ひざまづけ
変態」

フランス「なんでえ!？」

日本「ははは、平和ですねえ」

日本は本格的に爺ちゃん化を始めている。

「おーい俺達の存在無視すんなー」

さいほの「あ、まだいたの？」

「お前達さ、俺達の目的忘れてない？いつ襲ってきてもおかしくないんだよ？」

なつじ「でも襲わないで待っててくれてるんだね、やさしー」

「はっ!？別にあんた達のためじゃないし!」

日本「ツンデレ乙w」

日本がグツチョップする

オタクめ

あとキャラ崩壊しかけてるよ？

うーん、でもそろそろ本題に入らないとな

てことで……………

なつじ「えい」

手に持っていた鉄パイプを試しに投げてみた

「「ぎゃあああああ！！？」」

鉄パイプはそのまま二人の所に飛んで行った。

二人はびっくりして叫び声をあげる

反応でけえ

「な、いきなり何すんのよ！！」

なつじ「え？いや、暇だったからw」

「暇だったからって鉄パイプ投げんな！死んだらどうする！」

なつじ「いや殺すつもりだったんですけど。あんた達こそ本題忘れてるでしょ」

「ああそういえばそうだった！！忘れてた！」

マジで忘れてたんかい

さいほの「よっしゃあ！暴れるでえ！」

フランス「あの、のこぎり持って言わないで。めちゃくちや怖いんだけど」

さいほのは笑顔でのこぎりを構える

「いくぞ！」

キリカとキリハは空中を蹴って私達の所に突進してきた

なつじ「わっ！いきなり！？」

二人を避けるために私達は横に飛びのいた。

私と日本、さいほのとフランスで二手に分かれた

さいほの「お前とかよ……」

フランス「そんなに嫌かよ……」

さいほの「かなり」

向こうはさいほのがめちゃくちゃ嫌そうな顔をしてる。ドンマイ、フランス

「ちょうどいいな。キリカはそっちの変態チームを頼む」

「わかった」

さいほの「なんで私も変態ってことになってんだよ！一緒にすんな！」キリカはキリハに指示されて変態チーム……じゃなくてさいほのとフランスの所に行った。
さいほのはぶちギレてる

「お前らの相手は俺だ。30秒もたないだろうな」

キリハは私の方をチラチラ見ながら言う。

私そんなに弱いと思われてんのかな、なんか泣けてきたんだけど

日本「大丈夫です。私が守りますので無理はなさらないでください」

日本にまで思われてるよ……

なつじ「わ、私だって戦え……」「いくぞおおおお!!」「……………」

わー私、完全に無視されてるよー

二人で戦闘おつ始めちゃったよー

私いないことにされてるよー

しかーし！無視、てかいなことにされたくらいでへこたれる菜摘様ではないのです!!

なつじ「つーことで無視すんなあああああ!!」

「!!!？」

日本との戦いで気を取られていたキリハは後ろから襲ってきた菜摘様の攻撃を避けられず攻撃をもろ受けて気絶した。

日本「……………お、お見事です」

なつじ「私にかかればこんなもんよ!!」

私は得意げに言う。

日本は苦笑いしながら

日本『この人は敵にまわしちゃいけない……………』

と思っていた。

さいほの「あ、あつちは終わったらしいよ」

「え！？つてキリハああああ！！？」

キリカは振り返ってキリハの屍（おそらくまだ死んでないが）を見て混乱している。

フランス「どうやら菜摘ちゃんが殺ったらしいな」

おそらく一部始終を見ていたフランスが顔を青くして教えてくれた。

「このつ……………キリハの仇いいいい！！」

目に涙をためてキリカが私達に剣で切り掛かってきた。

さいほの「いや私達はなんも悪くないよ！？殺ったのあつちのドS
幼女だよ！？」

なつじ「聞こえてるからな」

あっちの方まで聞こえるくらい私は大きい声で言ったらしい。
ドS幼女がキレてるのは遠く離れたここまでわかる。だって殺気が
すげーもん。

その殺気に負けなくらいキリカも殺気を出している。

フランス「うっわすげえ殺気。お兄さん勝つ自信ないんだけど」

このフランスも感じとるくらいキリカの殺気はすごい。

さいほの「私、めんどくさいから休んでるね。よろしくー」

フランス「え！？ちょー！」

私は近くのベンチに腰をおろした。

フランス「お兄さん…………泣いていいかな…………」

フランスのか細い声が悲しく響いた。

その32 敵にまわしちゃ危険な人（後書き）

〈反省会〉

ほのか「そーいえばさ」

苑子「ん？」

ほのか「夏休み編、作者がこのまえ10月後半には終わらせるって
言ってたよね？」

苑子「あー、うん。そういえば言ってたね」

ほのか「今、11月だぜ？」

苑子「過ぎてるね」

ほのか「過ぎてるよ」

苑子「いやもう作者はそういう目標は達成できないタイプだから、
仕方ないよ」

ほのか「いや、でももう11月だよ？秋から冬に変わってきてるよ
？でもこの小説のキャラクター、まだ半袖だよ？」

苑子「でも作者の心の中は夏真っ盛りだよ？」

ほのか「もう作者の心の中は冬真っ盛りだよ」

苑子「なんという……」

ほのか「ていうか……」

ほ・苑「出番……まだかな……」

出番を結構気にする出番ないーズだった。

その33 変態だってがんばんぜ！（前書き）

君も変態なのかい？

ちげーよぶっ殺すぞ

byさいほの&なつじ

今回はがんばって早く投稿できた！
この調子でがんばんぜー！！

その33 変態だってがんばんぜ！

ガキイイン！！

静かな遊園地に剣がぶつかり合う音が響く。

私の座るベンチの近くでは変態………もといフランスがたぶんブラ
ンコ………じゃなくてブラコンのキリカと戦っていた。

私？いや私はごく普通の人間だから戦ってもすぐ負けるのがオチだ
し、第一………

すげえめんどくさそう

フランス「そんな理由で！？お兄さんもめんどくさいのは同じなん
だけど！！」

さいほの「なにげに私の頭ん中覗かないでくんない」

変態って人の考えてることわかるのか

フランス「わかんないから！」

さいほの「だから覗くなって言っただろ。つか変態なのは否定し

ないんだ」フランス、ツツコミながら戦ってるよ。すげえな。

さいほの「そういえばお前、そんなに強くないんでしょ？」

フランス「えっ？」

さいほの「いや前に黒須から聞いたんだ。漁夫の利が得意だって」

フランス「いらんことを教えやがって……」

フランスはため息をついた。

私達がこの世界——ヘタリアの世界に来てしばらくたった時、ヘタリアのキャラや世界のことについて何も知らなかった私は（年中ミス。ルのことしか考えてないから）黒須からたくさん教えこまれた。本当に教えられたことはめっちゃくちゃ多かったけど覚えが早い私はちゃんと教えられたことは大体覚えている。

なつじ「覚えが早いつて自分で言うな」

さいほの「君も変態なのかい？」

なつじ「ちげーよぶっ殺すぞ」

いつの間にかこっちに来てベンチに座っていたなつじと日本もフランスとキリカの戦いを見学していた。

頭ん中覗かれたんで君も変態なのかと言ったらめっちゃくちや睨まれたからとりあえずDS幼女からは視線をそらした。

フランスはなんとかキリカの攻撃は防いでいるが攻撃を仕掛けようとはしていない。いや、しようとしても出来ないのだ。相手の動き

は早く次から次へと攻撃してくる

日本「相手の方は戦いに慣れているようですね。動きに無駄がありません」

日本が戦いを見学しながら言う。

確かにキリカの動きに無駄はなく早く正確に攻撃をしている。

なつじ「あれはフランスヤバいんじゃないの？フランス、追い詰められてるよ？」

なつじの言うとおりフランスはおされていた。
息はあがっていてキリカの攻撃を防ぐ動きも徐々に遅くなって来ている。

さいほの「よくもあれで国としていれたもんだな。革命とか戦争の時どーしてたんだろうか」

なつじ「ナポレオンとかいたし、あとは……」

なつじは目を細めて呟いた。

なつじ「あの子……………ジャンヌダルクもいたからな……………」

さいほの「ジャンヌダルク？」

ジャンヌダルクってあの……………あれだ、うん。
何した人だよ、さっぱりわからん。
でも名前は知ってるな。

フランスはジャンヌダルクと何か関係でもあったのかな？

なつじ「まあそれより、さいほの加勢に行けば？もうフランス、危ないよ」

なつじはフランスを指差した。

さつきより動きが遅くなっていた、さすがにヤバイ。

さいほの「仕方ないなー、めんどくさいけど暴れちゃいますか」

なつじ「うーんやっぱりのこぎり構えながら言われたら怖くて仕方がないんだが」

日本「そういうものですよ」

私は気付かれないようにキリカの背後に周り、のこぎりを構えて走り出した。

相手は気付いていない、今度は確実に行ける！

そう思った瞬間だった。

ずっと前を向いていたキリカが突然振り返り私に向かって剣を横に振るった。

戦いなんてやったことがない私は素早い反応が出来ずなんとか咄嗟に避けたが左腕を少し切ってしまった。

さいほの「いつつー……いきなり何すんだよ！」

「それはこっちのセリフよ。背後から襲ってくるなんて……卑怯よ」

さいほの「私達はあんた達を倒すのが目的なんだからこうしなきゃ勝てないでしょうが」

「2対1なんだから……」

さいほの「こっちは二人でも戦いに慣れてないから力は一人に近いんです」

「うつわ言い方ムカつくなーコイツ」

いきなり左腕に鋭い痛みを感じて腕を見る。

さつき切ったところから血が大量に出ていて服を赤く染めていた。こんな初めてだわ。

日本「傷が深いですね……あれでは左腕は使えません」

なつじ「利き腕じゃないからよくね？」

日本「いえ……両手から片手になる分、のこぎりを両手を使って動かしていたさいほのさんの力が片手になることによって半分になつてしまふ、ということです」

なつじ「なるほど。さいほのの力が100%から50%になつちゃう、ってことか」

日本「そういうことです」

フランス「おい大丈夫か？」

さいほの「わりと大丈夫」

でも左腕うごかねー、意外と動かないもんなんだな。

さいほの「それよりさ。お前、私のことより自分のこと心配した方がいいよ？」

フランス「は？」

さいほの「後ろでキリカ、スタンバってるよ」

フランス「！！！？」

フランスは後ろを向く。

フランスの後ろでは剣を振り上げたキリカがスタンバってた。

「あまいな」

キリカは剣を振り下ろした。

フランスはその場から動こうとしない

さいほの「何やってんだよ早く避ける！！」

フランス「いやぁ……………ははは……………」

フランスは笑いながら地面にぺたんと座り込んだ。

フランス「腰……………ぬかしちゃった……………」

さいほの「じじいかてめえは!!」

私は舌打ちをして地面を蹴って走り出した。
しかし確実に間に合わない。

さいほの「くっそおおお!!フランス!」

フランス「は!?!」

さいほの「伏せろおおおお!!!!」

私は右手でのこぎりを力一杯投げた。

なつじ「いやのこぎり投げんなああああ!!くそ危ねええええ
!!!!」

さいほの「鉄パイプ投げたお前に言われたかねえわああああ!!」

鉄パイプも十分危ねえだろおが!!

「っ!!!!」

私の投げたのこぎりはキリカの腕を切り付けた。
キリカの手から剣がすべり落ちてフランスの近くの地面に刺さる。

フランス「ぬおっ!？」

何、剣がすべり落ちて近くに刺さったくらいでびびってんだお前は。

「っ……………よくも……………」

キリカが血が流れる腕をおさえて悔しそうに言う。

日本「あなた達の負けですよ。おとなしく私達をこの世界から出してください」

「そんなことするかっ!！」

キリカはキリハのもとに走っていった。

そしてキリハを担いでブラックホールのような物を作り出した。

なつじ「あ、てめっ逃げんのかよ!！」

「そう簡単に帰してたまるか!！あとここで終わっちゃったらほかの奴の出番がなくなっちゃうだろ!！」

さいほの「んなの知ったことか!！」

キリカはブラックホールの中に消えていった。

さいほの「あーもう逃げられちゃったー!フランスのせいだ」

フランス「俺!？」

日本「お二人ともお怪我はありませんか？」

さいほの「あります」

日本「あ、そういえばそうでしたね」

いや忘れんなよ

日本は白い布を細くちぎって怪我をしたところに結んだ。

なつじ「さいほの、大丈夫？」

さいほの「大丈夫、って言いながら怪我したところ叩くのやめてん
くない？」

地味に痛いんですけど

フランス「それよりあの二人、今度は別のチームの所に行くんじゃないか？」

日本「その可能性は高いですね」

さいほの「んじゃあ加勢にでも行くかつ!?!」

なつじ「え、めんどい。疲れたし」

さいほの「おめえなんもしてねえだろうが」

なつじ「んな！キリハを倒したのは私だよ！」

さいほの「ほとんどは日本が戦ってたじゃん」

なつじ「私だって頑張ったもん！！」

あれ、なつじ涙目になってる？

さいほの「ちょ、普通泣く！？」

なつじ「だって私だってえ……頑張ったんだもん！！」

おいいつものドS少女はどこ行っただ！！？

フランス「泣くな泣くな」

なつじ「うるせえよ触んな」

フランス「なんで俺の時だけドSに戻る！？」

さいほの「私が悪かったから泣くな！」

なつじ「ぐす……土下座してくれたら許してあげてもいいよ」

さいほの「さ、行こうか」

なつじ「おい無視すんな」

ドSな少女を無視して私達は遊園地を歩きはじめた。

その33 変態だつてがんばんぜ！（後書き）

く反省会く

さいほの「今回は反省会私達に頼まれたよ」

なつじ「あれ？反省会つて出番がない人が出るもんじゃないの？」

日本「ああ、それは次の話から私達の出番がまったくないからじゃないですか？」

さ・な・フ「はあっ！！！！？」

なつじ「つかフランスいたのかよ！！」

フランス「いたよ！！で出番がないって……………」

日本「次の話から私達のチームではなく違うチーム視点になるということですよ」

さいほの「なんだつてええええ！！？」

なつじ「え！？じゃあしばらく私達出番なし！？」

日本「はい」

さいほの「え、ちょ、私ただでさえいつも影がうすいのに出番がないってそれh……………」

強制終了。

てことで日本も言った通り緑チームのターンはここで終わりです。

さて次はどっちのチームにしようか……………

こっちのチームを先にしてくれ！！っていう願望がありましたらどんどん言っちゃってください できるかぎりそうします！

その34 上を向いて歩こう(前書き)

串かつになつてたよー！

b y ほか

最近寒くなってきましたね……………
なのに夏休み編……………

その34 上を向いて歩こう

ほのか「ちえー、日本と同じチームになりたかったなー」

イタリア「俺もドイツと一緒によかったよー」

中国「おめえらいちいち文句言ってるじゃねーある!」

歩きながらぶーぶー文句を言っている私達を中国が怒る。

中国「つかおめーが持ってきたくじで決めたんだからお前が1番文句言っちゃダメじゃねーあるか?」

ほのか「それはそれ、これはこれ」

中国「何あるかそれ……」

中国はため息をついた。

私達、青チームは敵のあの二人に会うこともなく平和な時間を過ごしていた。

中国「どこが平和あるか。ここはあいつらが作った異次元の空間ある。ずっとここにいれば我達はこの世界に飲み込まれてここで一生を過ごすことになるある」

ほのか「うそ!タイムリミットがあんの!」

中国「この前も言っただけある」

イタリア「え、どんくらいなの？この空間にいれる時間」

中国「せいぜい5時間あるな。まあこの空間に来てから1時間はたつてから正確にはあと4時間ある」

ほのか「それを早く言えよおっ！！のんびりしてられないじゃん！」

中国「普通この状況でのんびりしてる方がおかしいある」

まあ確かに……

イタリア「ど、どうしょ……早くあの二人倒さなきゃ……」

イタリアは顔を青くしてめっちゃめっちゃ焦っている。

あれ、そういえば……

ほのか「さっきからイギリスしゃべってなくね？」

イギリス「なっ！」

完璧に存在忘れてたわ。

中国「話に参加できなかったただけあるよ。不憫だから」

イギリス「誰が不憫だー！！」

ほのか「うそ、イギリスってプーちゃんと同じ不憫だったの!？」

イギリス「ちげえよバカ!!」

ほのか「バカ言っな!!」

まあバカだけどさ

イギリス「だいたい俺は話に参加できなかったんじゃない!!参加しなかったんだ!!」

イタリア「なんでー？」

イギリス「俺はこいつらとしゃべってたからな」

そう言って自分の隣の空中を指差すイギリス。

ほのか「……………なんもないじゃん」

しかしそこには何もいない。

イギリス「はあ!?!いるだろここに!ほら!!」

イギリスは何回も空中を指差す。

でもよく見てもそこには何もいない。

ほのか「何言ってんのさイギリス。そこに妖精さんがいるとでも言

いたいの？」

イギリス「いるから言ってるんだろおが！」

ほのか「いんのかよ」

出たよオカルト紳士

本当に妖精さんが見えるとは……………

中国「おめえら揃って緊張感なさすぎある！！敵がいきなり襲ってきたらどうするあるか！」

ほのか「大丈夫だよ、そんないきなり来るわけ……………」

イギリス「！！！！ほのか、イタリア、上！！！」

ほのか「へ？」

イタリア「ヴェ？」

私とイタリアはイギリスに言われ見上げる。

なんか光る物が空から降って……………

中国「何やってるあるか！！危ねえある！！！」

ほのか「ぬおわ！？！」

イタリア「ウヴェエ!？」

中国とイギリスに体を押されて私達4人は地面を転がった。

ほのか「いつて……………何が……………!!?」

私は言葉を失った。

さっきまで私とイタリアが立っていた所に何本もの剣が刺さっていたからだ。

ほのか「ああああそこって私達がさっきまでいた所……………だよ
ね?」

イタリア「も、もしあのままあそこにいたら……………」

ほのか「串かつになってたよ!!」

イギリス「串刺しだろうが!お前らいつ豚になった!そしていつ揚げたんだ!」

ほのか「いやぁお腹空いてたもんでつい……………」

中国「おめえさっきいっぱいバイキングで食ってたある!もう5話以上前の話あるがまだ1時間ちょっとしかたってねえある!」

ほのか「二人ともツッコミ乙w」

イ・中「うるせえ (ある)!!」

息ピツタだなー。

昔、アヘン戦争していたとは思えない！

イタリア「ねえ、この剣どっから降ってきたのかな……………」？」

イタリアが泣きそうになりながら私達に聞く。

ほのか「どこって……………空の雲からっしょ？」

イギリス「んなわけあるか」

中国「こんなことするのはあいつらしかいねえあるよ」

中国はため息をついて、空中に向かって叫んだ。

中国「いるのはわかってるある。我達は逃げないから出てくるよろし」

ほのか「え、敵？敵？」

いんの？どこに？

私がきよろきよろとしていると空中にあの二人が現れた。

ほのか「うわああああ！いきなり！？てか……………」

私は二人を見る。

ほのか「一人……………死んでね？」

中国「なつじが！？どうせ日本とかに協力とかしてもらってやったんじゃないーあるか？」

イギリス「たぶんそうだろうな」

なつじ「つくしゅんっ！！」

さいほの「うわ汚っ！風邪？」

なつじ「汚いは余計だボケ。うーん風邪かなあ？」

日本「誰か菜摘さんの噂でもしているんじゃないですか？」

なつじ「そーかなあ？」

「お前ら本当に仲間か？仲間を信用してないな」

キリカが腕を組み呆れた顔で言う。

ほのか「それでも仲間ですっ ねー」

イタリア「ねー」

中国「ああもうお前らやる気なさすぎある！せっかく敵が出てきたくれたんだからさっさと捕まえて元の世界に戻るあるよ！」

ほのか「あいさー」

私は愛用の小刀を取り出す。イタリアはお馴染みの白旗を構える。

ほのか「でも正直めんどくさい」

「お前あつちのミス。ル好きとまったく同じこと言うんだな」

さいほのも言ってたのか。

イギリス「いいのか？もし元の世界に帰れなくなったら大好きなアニメも見れなくなるんだぞ？」

イギリスの言葉に私は反応する。

大好きなアニメが見れなくなる……だと！？

じゃあ銀。とかサザ。さんとかち。まる子ちゃんとか見れなくなるというのか！！

（銀。以外はもとと見てません。）

ほのか「おっしやがんばるぞーっ!!」

中国「アニメでやる気出すとかお前の神経おかしいある。」

やる気を出した私を中国は冷ややかな目で見ていた。

その34 上を向いて歩こう(後書き)

感想お願いします！

その35 噂話は程々に(前書き)

ぶえっくしょいっ！

きたねっつの

byなっじ&さいほの

短いです。短すぎます。

その35 噂話は程々に

「つつつ……………ん？ここは……………」

さっきまでキリカに担がれてぐったりしていたキリハが頭を抑えながら目を覚ました。

チツ、敵がまた増えた……

「ってあれ！？さっきまで違う奴らと戦ってたような……………」

キリハは私達を見て驚いている。

ほのか「ああ、あんたなつじに負けたんだよ？あの小さくてドSで毒舌でちよこちよこしてる幼女に負けたんだよ？」

中国「すげえ悪口にしか聞こえねえある……」

「く、屈辱だ……………！！あんな小さくてドSで毒舌でちよこちよこしてて小さくてメガネの幼女に負けたなんて……………！！」

イギリス「お前らあいつをけなしたいだけだろ」

なつじ「ぶえつくしよいつ!!」

さいほの「きたねっつの」

なつじ「殺されたいの? ねえ?」

日本「やはり風邪ではないですか? 海に行ってから体を冷やしたの
で……………」

さいほの「大丈夫大丈夫。馬鹿は風邪ひかないから」

なつじ「誰が馬鹿だつて? あゝあ?」

なつじはキレる寸前だ。

フランス「あの二人どこ行つたんだろうな」

日本「もしかしたら他の方達の所に行ってるかもしれませんね」

なつじ「ぶわつくしよい!!」

さいほの「……………」

なつじ「何、可哀相なものを見る目で見てんだよ」

ほのか「もうさ、さっさと始めない？話進まないし、さっきからイタリアしゃべってねえし」

イタリア、空気状態。

「こうやって長引かせてんのはお前らだろうが」

キリカがキレぎみに答えながら剣を出す。
キリハも困った顔で剣を出した。

イタリア「お、俺は応援してるよ……………」

イギリス「お前も戦え！！」

イタリア「ヴェー！？」

イギリスは服から何かを取り出した。
私はそれを見て顔を青くした。

ほか「イギリス……何それ……」

念のため一応聞いとう

イギリス「何って……これ使って戦うんだよ」

イギリスが手に持っているのは………

少し短めの棒の先端に星がついたお馴染みのアレだった。

その35 噂話は程々に（後書き）

く反省会、という名のQ&A

ほのか「ねえ、そーいえばさ」

なつじ「ん？」

ほのか「今、私達異空間にいるわけじゃん？」

苑子「どもー」最近まったく出番のない苑子どうえす」

さいほの「ウザい黙れ」

苑子「うう……………」

なつじ「うん、で？」

ほのか「その……………異空間にいる私達の服装って何なのかな？」

苑子「ホテルのゲームセンターにいるときにつれてこられたから…

……………浴衣じゃない？」

さいほの「ところがどっこい！！それが違うんだなー！」

なつじ「なんなのそのテンション」

さいほの「私が説明しよう！！確かにゲームセンターにいた時に私達が着ていた服装は確かに浴衣だったけど異空間に来たときは不思議なことに海に行く前の服装に戻っているのですよー！」

苑子「な、なんだってー！！？」

なつじ「驚き方ウザい」

ほのか「し、証拠は？」

さいほの「ほら、あの二人と戦ってる時私達は普通に動きやすそーに戦ってます。この時の服装がもし浴衣だったらめっちゃ動きにくいですね、ハイ」

ほのか「なるほど！！」

なつじ「納得するんだ」

苑子「でもなんで普通の服装に？」

さいほの「作者の事情です」

ほ・な・苑「……………」

その36 変態は拳で撃退しよう(前書き)

だから見たくねえって言ってるだろ (ある)!!

b yほのか&中国

イギリスがとてつもなくかわいそうです……

その36 変態は拳で撃退しましょう

ほのか「いやいやいやダメダメダメーッ!!」

私は咄嗟にやる気満々のイギリスの手からお馴染みの星型ステッキを取り上げる。

イギリス「な、なにしてんだよ!!返せ!」

ほのか「いやだあっ!!あんなかわいそうなイギリス、私は直で見たくないいいいい!!」

見たら絶対しばらく眠れなくなるわ!!

イギリス「かわいそうってなんだ!!つかそれしか戦う方法ないだろ!」

ほのか「ほかにもこれより何倍もいい戦う方法あるわ!頭使えアホンダラ!!」

イギリス「アホいうなばかあっ!!」

私は若干キレながら星型ステッキを地面に叩きつける。

イギリスはそれを慌てて拾って埃を掃う。

イギリス「なんだお前!奇跡見たくねえのか!」

中国「我だってんなもの見たかねえある!!」

中国がイギリスの背中を飛び蹴りする。

めっちゃ綺麗な姿勢でした。さすが中国。

敵二人＋イタリアはそんな私達の様子困った顔で見ている。

イギリス「本当なんなんだよお前ら！奇跡が見たくn……………」

中・ほ「だから見たくねえって言うてんだろうが（ある）!!」

中国と二人で頭がいかれちゃってる変態オカルト紳士をボコす。

「お前ら仲間ボコしてどうすんだ！俺達を無視すんな！」

キリハがぶちギレる。

私と中国は仕方なくイギリスをボコすのやめた。

ほのか「ちっ、仕方ないなあ……………中国いくよ」

小刀を構えながら言う。どうよ私かつこよくね？

中国「おめえは大人しくしてるあるよ。あの变なのに絶対变身するんじゃねえある」

中国はボロボロのイギリスに言葉を吐き捨てた後、中華鍋を構えた。

イタリア「ヴェー……………俺は……………」

ほのか「イタリア戦いたくないっしょ？安全な所行って見てていいよー」

イタリア「うん、わかった！」

イタリアはとびきりの笑顔を見せると、とてとてとイギリスの所に走って行った。そこも危険だぞ。

「お前ら二人か。その内一人はただの人間、すぐに終わるな」

キリカが剣で私を指す。
剣がキラんと光る。

あ、どうしよう怖くなってきちゃった。

ほのか「ね、ねえ中国」

中国「ん？」

ほのか「私も見学してていいかなーなんて思っちゃったり……………」

中国「ダメに決まってるある」

ほのか「ですよねー……………」

私の願いは簡単に砂となって崩れた……………

でも怖えーよ！！あんな鋭い切れ味拔群の剣で体をチョン、とやられたら一瞬で私バラバラになっちゃうよ！！

（なりません。）

「おらあああああつ!!」

きたあああああ!!もうあいつら殺す気満々だああ!!殺気がパネ
エエエエエ!!

ほのか「ぎゃああああ!!やだやだ怖い怖い!!死ぬ、死ぬ!!」

私はその場にしゃがみこむ。

中国「ちょ、おめえ何やってるある!避けるある!」

ほのか「と、とおっ!!」

がんばって足を動かして横に飛ぶ。なんとか剣からは逃れられた。

中国「お前一人じゃ早く死ぬの確実ある。我からなるべく離れねえ
ように戦うあるよ」

ほのか「は、はは………ごめん………」

体を起こして中国の所に行く。あ、足震えてるよ私。

イタリア「ほのかちゃん、大丈夫?」

ほのか「だだだ大丈夫だよ、こんくらい………はは………」

イギリス「イタリアに心配されるなんて終わったな、ほのかw」

ほのか「お前後でもう一回ボコすからな。覚悟してろよ」

イギリスを軽しく睨んだ後私は改めて小刀を構えた。

中国「我から絶対に離れんじゃねーあるよ」

ほのか「了解っ！！」

私と中国は地面を蹴って敵に突進していった。

その36 変態は拳で撃退しましょう（後書き）

く反省会？」

苑子「大変だよみんなー！！」

なつじ「ん？」

ほのか「みんなって言っても私達四人しかいねえけどな」

さいほの「で、何？」

苑子「この小説のアクセス数が10000アクセスを越えてるんだってー！！」

なつじ「マジかよ」

さいほの「つかなんで今さら？」

ほのか「作者が最近になってアクセス解析の存在に気付いてチラッと見たらすごいことになってたらしいよ」

苑子「すごいねー！！」

さいほの「まあとにかく」

四人「これからよろしくお願いします！」

はい、というわけでアクセス解析の存在に最近気付いた作者です。
こんな小説を読んで？くださる方がいっぱいいるということは作者
にとっても嬉しいことです！

これからもこの小説を見守ってください！

その37 戸惑いながらの戦い（前書き）

え、みんなヘタレなの？

b yイタリア

今回ちょっとシリアス。

あとイタリア視点です！

語りが主人公以外なのはイタリアが初めてですね。
がんば！

その37 戸惑いながらの戦い

ほのかちゃんと中国が敵と戦ってる様子を俺はイギリスの隣で白旗を握りしめながら心配そうに見ていた。

イタリア「ヴェ……………大丈夫かな……………」

イギリス「大丈夫だろ」

さっきボコられていたはずなのに傷一つないイギリスが言う。

イギリス「中国は強いしほのかだってがんばれば出来るはずだ」

イタリア「で、でもほのかちゃんは普通の人間だしまだ中学生なんだよ？あんなに強い奴らに勝てるのかな……………」

イギリス「ほのかはお前よりは戦力になると俺は思うぞ」

イタリア「ガーン……………」

確かにそうだけどそんなはつきり言わなくても……………

イギリス「ま、あの二人がピンチになったら助けに行けばいい話だろ？そんな心配することじゃねーよ」

イタリア「うん……………」

俺は小さく頷いた。

イギリス「それにしてもあいつら、一体何がしたいんだろーな」

イタリア「え、世界征服するために邪魔な俺達を殺そうとしてるんじゃないの？」

イギリス「まあそうだけだよ」

イギリスは戦ってる敵二人を交互に見た。

イギリス「戦うのに戸惑っている感じがすんだ、奴ら」

イタリア「え？」

イギリスが言ったことに驚いて俺は握っていた白旗を落としそうになる。

イタリア「そ、そうなの？俺にはさっぱり……」

イギリス「お前はあんま戦争とかしないからな」

イタリア「ヴェ……」

イギリスはため息をついた。

イギリス「戦争とかしてるとな、結構いるんだ。戦いに出ている奴らに。戦うのを戸惑ってる奴らが」

イタリア「そ、そーなの？」

イギリス「お前もそういう奴らに含まれてるぞ」

イタリア「え、みんなヘタレなの？」

イギリス「ちげーよ」

イギリスに睨まれた……、怖いよー……

イギリス「戦争に出てる奴らってのは大体普通の国民なんだ。無理矢理連れて来られた」

イタリア「無理矢理？」

イギリス「普通死ぬかもしれない戦争に出たい奴なんていねーだろ？だから軍隊は必ずと言っていいほど人手不足になるんだ。だから国民を無理矢理連れていくんだ」

あ、そういう話は日本から一回だけ聞いたことがある気がするな。
昔あった戦争とかで日本の上司は国に住んでる男の人を無理矢理軍隊に連れて戦争したって……

イタリア「でもそういう人って大体……」

イギリス「戦死する」

やっぱり……

全員が生きて帰れるほど戦争って甘くないよね……

悲しいな……

イギリス「あいつらも無理矢理俺達を殺しにきた、そういう感じだな」

イタリア「じゃあ戦わなきゃいいのにな……」

イギリス「そんなことしたら組織はただじゃおかねえだろ」

イタリア「じゃああの二人は……」イギリス「俺達に殺されるか、俺達を殺さなきゃ苦しみから逃れられないだろうな……」

イタリア「そんな……」

俺は剣を使つて必死に戦つてる敵二人を見た。

戦つてる最中はあの二人はどんなことを思つてるのかな……嫌ならなんで俺達に言ってくれないのかな

複雑な思いが頭の中をぐるぐると回った。

俺は白旗を強く握りしめた。

その37 戸惑いながらの戦い（後書き）

〈反省会〉

ほのか「お前ら私と中国ががんばってる時になにのんびり話してんじゃああああー!」

イタリア「ええっ!？」

イギリス「つか戦うなって言ったのはお前らだろうが!」

中国「サポートくらいして欲しかったある!」

イタリア「ご、ごめん……」

ほのか「つかギャグいれろや!! シリアスやめろ!」

イギリス「あの話をギャグにするのは難しいだろ!」

中国「気合いでやればいいことある!」

イギリス「気合いでどうこうなる問題じゃねーだろ!」

ほのか「つか……」

ほ・中「私（我）の出番がねえーじゃねーか（ある）!」

イタ・イギ「結局はそこ!!!?!」

はい、というわけで反省会でしたー

その38 油断は禁物（前書き）

思ってるよ！私やれば出来る子なんで！！

by ほか

文がとっても意味不です！！

その38 油断は禁物

ほのか「おりゃあああつ！！」

私は力いっぱい小刀をキリ八に向かって振るった。

しかしキリ八は余裕の表情で手に持っていた剣でそれを防ぐ。

「弱いな、そんな力の弱さで俺達を殺せるとおもってるのか？」

ほのか「思ってるよ！私やればできる子なんで！！」

「自分でいうなよ」

キリ八は冷めた目で私を見た後、剣を振って私を払う。

ほのか「つかこっちは小刀なんだよ！剣ってずるくない！？」

「いやそんなこと言われてもな……………」

キリ八は困った顔をした。

「まあ文句言われても俺達の目的はお前ら殺すことだから知ったことじゃないんだけどな」

ほのか「知ったこっちゃないんだけどな　じゃねーよ！ム力つくんだよくそ野郎！！」

私はぶちギレた。

「やっぱりあなた慣れてるのね。こっぴつの」

中国「我は戦争を何度もやってるあるよ！！こっぴつのは慣れっこある！」

中華鍋で何度もキリカに攻撃をしながら中国は答える。
ほのかと違って中国は早くて的確に攻撃を仕掛けている。
これにはキリカも少し焦りを感じていた。

中国「我は“国”ある！戦争に慣れた我がこんなもので死ぬわけねえあるよ！」

「油断しすぎだよ？」

中国「っ！！！？」

キリカは得意げな中国の隙をつき剣をついた。
剣は中国の肩を深く切った。

中国「つつつ………4000年生きた仙人になんてことするあるか」

中国は傷をおさえてキリカを睨む。

「4000年生きた割には油断しすぎじゃない？私達はあなたたちを殺しに来たのよ？これは本気よ」

キリカも中国を睨み返す。

「これじゃ力入らないでしょ？どうする？」

キリカがニヤリと笑い、中国と地面に落ちた中国の中華鍋を交互に見た。

ほのか「中国！大丈夫？」

中国「大丈夫ある」

中国は片手で中華鍋を拾って、攻撃を再開した。
私も中国の援護をして二人でキリカとキリハと戦う。

さっきまで余裕の表情だった中国は疲労と傷の痛みのせいか動きが鈍り、つらい表情をしていた。やっぱ爺……………じゃなくて仙人だからかな。

そんな中国を敵の二人は集中的に狙ってくる。こいつらに心はねえるのか！

私はなるべく中国に負担をかけさせないように二人の攻撃をがんばって防ぐ。

中国「かたじけねえある」

ほのか「大丈夫だよ！」

中国も片手でなんとか攻撃を防いでいる。
でも中国も私も体力の限界が近付いてきている。早く決着つけないと。

ほのか「……………よし！」

私はいちかばちかの賭けに出ることにした。

相手は私ではなく弱っている中国を倒すことに専念している。つまり注意が私にまでいつていない。

だから私が相手に攻撃を仕掛けても気付かれない可能性は高い！！
ふふっ、我ながらすごい発想だ。久しぶりに頭使ったな。

考えてからすぐに私は実行した。

なるべく目立つた行動をしないように、しかし素早く相手に近付いていく。

相手はやはり中国しか見ていなくて私の行動に気付いていない。

今だ！！

私は小刀を構えて油断している二人に向かって走っていった。
しかしどんなに近付いても相手は気付かない。

これはさすがに私もおかしいと思った。
しかし私が少しスピードをゆるめた瞬間、二人はニヤリと笑った。

ヤバイ、はめられた!!

今まで私が怪我をした中国の身を守っていた。しかし今はその私は中国のもとにはいない。二人はこの瞬間を狙っていたのだ。

二人は同時に中国に攻撃を仕掛けた。

中国は中華鍋を構えて攻撃を防いだが片手しか使っていないため攻撃の反動で中国の体は空中に放り出された。

ほのか「中国!!」

中国はそのまま地面に落下し、痛さに顔を歪めた。

「あとはお前だけだな」

キリハが私を見て不気味に笑う。

あ、この状況かなりヤバいかも。
額に冷や汗が流れた。

中国ヘルプ!!

中国に助けを求めたがさすがに大ダメージを受けたのか地面に横たわりぐったりしている。まあ私が悪いんだけどさ

視界の片隅で二人が私に向かって剣を振り下ろそうとしているのが見える。

もう完全に終わったと思い、私がきつく目を閉じた瞬間

「仕方ないから助けてやってもいいぞ!!」

こんな腹立つようなセリフが聞こえてきた。
目を少し開けて声のした方を見てみると

「べ、別にお前らのためじゃないんだからな!!俺のためだ」

白い天使のような服?を見にまとい背中にある白い羽を広げ、手に星型ステッキを持ったツンデレ眉毛がそこにいた。

なぜか助かる気がしなかった。

その38 油断は禁物（後書き）

く反省会く

苑子「あー、ついに出て来ちゃったよブリ天」

なつじ「出ちゃったねブリ天」

ほのか「出ちゃいましたねブリ天」

さいほの「何、ブリ天って？ブリの天ぷら？」

ほのか「ちゃうよ？」

苑子「なんかお腹空いてきたね」

なつじ「そだね。ラーメン食いに行かない？」

ほのか「おー、いーねいーね。行こー」

さいほの「なんでこんなにやる気ねえの？ムカつくんだけど」

はい、やる気の反響会でしたー

その39 天使降臨！？（前書き）

やなこつた

b y ほか & 中国

短いです。

あと意味不です。

その39 天使降臨!?

突然の天使（変態ツンデレ眉毛紳士）の登場に私とキリカとキリハ、そしてイギリスの隣にいたイタリアまでもが何も言えない状態になってしまう。

いや普通なるよ？目の前になんともいえない天使が降臨してきたら誰でもこういう反応しかできないよ？

中国「おめえ何もするなって言っただじゃねーあるかあああああ！
！」

さっきまでぐったりしてたのが嘘のように中国はイギリスを怒鳴りつける。

イギリス「な…………お前らがピンチだったから助けようとしてやってるんじゃないか！！俺だって好きでこんな格好してねーよ！」

ほのか「いやお前さっきまで変身する気満々だったやん」

イタリア「ヴェー……………」

言い争う（？）四人をキリカとキリハは呆然と見ている。

「ほ、ほんと何なんだよあいつらは……………」

「人間？」

「ウザいから黙ってようか」

笑顔で答えるキリハをキリ力は黙らせる。

イギリス「とにかくくっっ！！助けようとしてやってんだ！感謝しろよな！」

中・ほ「やなこった」

イギリス「…………（´Д｀）」

イタリア「お腹空いたなあ……………」

イギリスの表情に私はつい笑ってしまった。

イギリス「笑うなばかあ！！」

と言われると笑ってしまうのである。

中国「お前には任せられないある。ここは我が……………」

ほのか「ダメだよ中国！まだ怪我が……………」

中国「痛い痛い痛い！！そこは掴んじゃダメある！！」

怪我もたくさんしている中国がまた戦おうとしたので私は中国の肩（よりによって怪我した方の）を掴んでしまった。
中国、さらにまた大ダメージ。

イギリス「まったく……………イタリア、お前の白旗ちぎって包帯にして中国の怪我の手当てしろ」

イタリア「え！？白旗を！？」

ほのか「いっぱい持つてるからいいしょ？」

イタリア「うん……………」

イタリアは渋々、持っていた白旗をちぎった。

ほのか「イギリスはどうすんの？」

イギリス「戦うに決まってるんだろ」

イギリスは星型ステッキを構えた。

ほのか「あれ？でも確かブリ天って人を子供にすることしかできないじゃ……………」

イギリス「おりやあああああ！！！」

ほのか「ってイギリスさあああああん！！？」

イギリスは私の言葉に耳を傾けずいまだに混乱している二人のもとに突っ走っていった。

その39 天使降臨！？（後書き）

く反省会く

ほのか「わあああああ！！もう11月終わっちゃうよおお！？夏休み編終わってないよおお！？」

なつじ「冬休み編じゃん、もう」

さいほの「だから作者は今日一回投稿できるようにがんばってるんじゃない？」

苑子「テスト前のくせにねー」

ほのか「とにかく私達も作者がスムーズに執筆できるように行動しないと」

さいほの「どーやって？」

四人「……………」

終了。

その40 真面目に戦いましょう(前書き)

じゃあその格好やめろや!!

なんでだよ!!

b y ほか、イギリス

短いです!

その40 真面目に戦いましょう

「わっ！！なんかあの眉毛、こっち来たわよ！？」

「わ、本当だ！！え、もしかしてあいつと戦わなきゃいけないの！？」

イギリス「そうだ！！正々堂々勝負しろ！」

「そんな格好で言われたら戦う気失せるんだけどおおおお！！？」

なんだかんだ言いながらもイギリスと敵二人は戦っている。

イタリア「ヴェ、ヴェ」

イタリアは機嫌がいいのか楽しそうに中国の傷の手当てをしている。

中国「いてっ、おめえもうちょっと丁寧にやるある！」

イタリア「あ、ごめんー……」

中国に注意されてイタリアは集中して傷の手当てをしている。

私はそれをぼんやりと眺めている。

いや、なんか微笑ましくね？自然とにやけてしまうよ？

まあ敵はイギリスに任せておいて、

私は一休みしますか。

近くのベンチに腰掛け、目を閉じる。

向こうの方でイギリスが一生懸命戦って……

イギリス「ほあた」

「ぎゃあああああ！？なんか出したあああ！！？」

「つかふざけてるようにしか見えねえぞあいつ！！」

……

ほのか「安心して休めるかあああああああ！！」

イタリア「ヴェー！？」

中国「なっ？」

私は小刀をしっかりと持って三人のもとへと突っ込んでいった。

イギリス「な！？なんで来たんだよお前！俺に任せ……」

ほのか「いや任せられるかああああ！！さっきキリハも言っただけと戦ってるっていうよりはふざけ合ってるようにしか見えねえんだ

よ！！」

イギリス「はあ！？俺はちゃんと真面目に……」

ほのか「そんな格好で笑顔で『ほあた』って言ってる時点で完ペきふざけてるように見えるから！！」

私はイギリスから星型ステッキを取り上げ怒鳴る。

そんな様子を敵二人はポカンと見つめている。

ほのか「とっにつかつくっ！！やるなら真面目にやれ！！」

イギリス「だから真面目にやってるっつの！！」

ほのか「じゃあその格好やめろや！」

イギリス「なんでだよ！」

ほのか「だからその格好で『ほあた』って言っていると真面目に戦ってるように見えないんだよこっちは！！」

イギリス「知るか、んなもん！！」

イギリスは私からステッキを奪い返し、敵の方に走っていった。

その40 真面目に戦いましょう(後書き)

〈反省会〉

ほのか「そういえば作者、昨日更新しなかったね」

苑子「近所の家に遅くまで遊びに行ってたからねー」

なつじ「そのかわり今日、あと一回更新するつもりらしいよ?」

さいほの「つか作者、テスト前やん。携帯いじってて大丈夫なのかな」

ほのか「大丈夫!!今回は自信あるんだって!点数が下がる」

なつじ「どんな自信だよ」

苑子「そんな自信だよ」

さいほの「ほんとに大丈夫なんかな……………」

はい、というわけでテスト前のくせに今日もう一回更新する予定です。あくまで予定ですよ！！

そろそろ真面目に勉強しなきゃまずいかもな……

その41 眉毛だってがんばんぜ!! (前書き)

目があ!! 目があっ!!

b y ほか

この話の題名、どっかで似たようなを見たような……
そう思ったあなた、鋭いです。

今回の題名、33話の題名の変態を眉毛に変えただけです。
理由? 題名考えるのがめんどくさかったからさ

その41 眉毛だつてがんばんぜ!!

「くっ……!! お前そんな格好してるくせになかなかやるな……」

イギリスとキリカとキリハが戦い始めてから約30分。キリハが肩で息をしながら言う。

キリカとキリハは所々傷を作っていた。

この傷は全てイギリスの攻撃（魔法）で作られたものだった。

イギリス「俺ん家の魔法なめんなよ!!」

イギリスが宙にうきながら得意げに笑う。

私は『ほあた』しか使えないと思っていたがそれ以外の魔法も使えるらしい。何でもありかあいつ。

中国「ふわぁーあ。もう見てるの飽きたある」

中国は傷の手当てが終わり、ベンチにすわってあくびをする。

イタリアはもう完全に寝ている。

今日シエスタしなかったからかな……

ほか「イギリスううう!! 早く終わらせてよおおお!!」

私がそう叫ぶと金髪の天使は振り返りエメラルドグリーンの瞳で私達を見た。

イギリス「こつちだつて大変なんだよ！！黙つて見てないでちょっとは手伝え！！」

ほのか「だつてイギリスが俺に任せろつてー……」

中国「我は怪我してるあるー」

イタリア「ZZZ……」

イギリス「とことんム力つくなお前ら！！わーったよ倒しいんだろー！！」

イギリスは私達を怒鳴りつけてから星型ステッキを頭上にあげた。あれ、なんかステッキに光集まつてない？え？幻覚？

そして大量？の光がステッキに集まり、イギリスは敵二人を睨んだ。

イギリス「くらええええええええええ！！」

イギリスはそう叫んでステッキを振り下ろした。

ステッキに集まっていた光がイギリスがステッキを振り下ろすと同時にビームみたいになってキリカとキリハに向かって発射された。

「わー！！なんかすごいきたよ！？」

「ホントだ！やば……………」

キリカとキリハは逃げる暇もなく光に飲み込まれた。それと同時に二人がいた場所で大爆発が起こり、すさまじい風がこっちにまできた。

ほのか「ぬあつ！？何が……………って目に砂がああああ！！」

中国「あいやああああ！！？」

イタリア「ZZZ……………」

す、砂が……………」

ってイタリアこんな状況でも寝れるのかよ。ある意味すげえな。

やがて風はおさまり大爆発のせいであがった煙も消えてきた。

ほのか「目があ！！目がああつ！！」

私はム。力か。

自分でツツコンじゃったよ。

イギリス「お前ら大丈夫か？」

ほのか「目があ！！目が……………」

中国「しつけーある」

イタリア「ううん？何が……」

イタリアがやっと目を覚ました。

ほのか「キリカとキリハは？」

イギリス「あの場所にはいなかった。たぶん、さっきの爆発で飛ばされたんだろ」

ほのか「死んだの？」

イギリス「いや、あいつらはこんくらいじゃ死なないだろ。今の魔法も最小限に抑えたしな」

中国「なんで抑えたあるか！？」

イギリス「いろいろあつて、な……」

イタリア「ヴェー……」

イギリスが空を見上げる。

イギリス「よし、ほかの奴らと合流するぞ」

中国「もうちょっと休みてーある……」

イギリス「早くしねーと5時間たちまうだろうが！ほら、さっさと行くぞ」

中国「あいやああああ！？嫌あるうううっ！！」

イギリスが中国の襟を掴み、いやがる中国をひきずりながら歩き始める。

ほのか「ふう…………ほら、イタリア行こー」

イタリア「あ、うん。行こー！」

まだ寝ぼけているイタリアの背中を叩いて歩かせ、私はポケットにいれてあるさつきドイツから預かった携帯を取り出し現在の時間を見た。

タイムリミットまで

あと3時間

その41 眉毛だってがんばんぜ!!（後書き）

く反省会く

ほのか「やつと青チームのターン終わったああああ!!」

さいほの「おつかれー」

なつじ「あんまツツコミしてなかったね」

ほのか「ボケの方が楽しそーだしね」

苑子「次の話から黄チームの出番だぜヤッフウウウ!!」

ほのか「苑子、最近全然出番なかったもんね」

さいほの「おめでとう」

なつじ「ケツ!!」

ほのか「あー、でも残念ながら黄チームのターンになっても苑子、出番ないよ?」

苑子「え!?!」

ほのか「うん、作者がそう言ってた」

苑子「はあ！？なんでだよ！それじゃあヘタリアキャラだけになつてんじゃねえか！華がねえじゃねえかああああ！おっしや今から作者に殴り込みに……」

ほのか「苑子さん、嘘だから」

苑子は簡単に嘘信じちゃうタイプだと作者は思っています。ハイ。

というわけで青チームのターン終了ー！おつかれー！

さて次の話からは黄チームのターンと同時にいよいよ夏休み編も終盤です！長かった……

よろしく願います！

その42 人にうざいと言っちゃいけません(前書き)

もしもしーらんす

b y 苑子

黄チーム、久々の出番！

あ、でも青チームも少し出ます。

あとロシアが空気。

その42 人にうざいとか言っちゃいけません

苑・ア「お腹すいたあああああ「うるさい!!」 ああああ……」

遊園地に私とアメリカの悲痛? な叫び声が響き渡る。ドイツに怒鳴られたけどね。

ドイツ「お前らさっきバイキングでたくさん食べただろう!」

苑子「私は食べてから約2時間もすればお腹ぺこぺこだよ」

アメリカ「俺は30分なんだぞ!」

ロシア「早くない?」

いや黒須も結構早いと思うな。

苑子「てゆーかさつき遠くの方で爆発音聞こえたよね? なんかあったのかな?」

ドイツ「何かあったら連絡するように言ってるんだが……」

ドイツが携帯を取り出したため息をつく。

私もポケットにいれておいた携帯を取り出した………その時!

『チャラリラリラー』チャラリラリラー』』

苑子「のわあああああ！！？なんか鳴り出したあああああ！？」

アメリカ「リアクションでかすぎるんだぞ！」

ロシア「携帯使ったことないの？」

苑子「私は年中パソコン使ってたからね。携帯持っとらん」

ドイツ「とりあえず電話だろ！？早く出る！」

苑子「へいへい」

私は携帯を開き通話ボタンを押して耳に当てた。

苑子「もしもしーらんす」

『うぎっ』

苑子「いきなりひどっ！！」

電話の相手は黒須だった。なんか久しぶりだな。

『いやあごめんごめん。うぎかったから』

苑子「いや、うぎかったから　って普通本人の前で言う？今すぐ心にグサツてきましたよ？」

『すいまってーん』

苑子「あとで覚えてろよ」

なんかテンション高いな黒須。

アメリカ「誰からだい？」

苑子「ん？ああ、黒須から」

『お、その声はアメリカかい？やっほー』

アメリカ「やっほー！！」

アメリカもテンション高いな。

苑子「で、なんで電話してきたの？」

『え？あー、うん。言いたいことがあってさ』

ロシア「言いたいこと？」

なんでロシア聞こえてんの？

『うん。えーっと……そのー……』

しばらく沈黙する。

『なんだっけ？』

苑子「知るか」

忘れてんのかよ

『あれだよ。さっきのこと』

電話の向こう側でイギリスが黒須に教えてるのが聞こえる。
バカなのかな、黒須バカなのかな？

『ああ！！そうだそうだ思い出した！！』

思い出したらしい。

『えっと、さつきね。キリカとキリハが私達のこと襲ってきてね。
それでキリカとキリハが行方不明になったから気をつけてね』

苑子「うん、何をどう気をつければいいのかさっぱりわからない」

なんでいきなりあの二人が行方不明になるんだよ。
私はそれが知りたい。

ドイツ「なんだって？」

苑子「なんかよくわからないけど敵二人が黒須達襲って行方不明になっ
たらしいよ」

ア・ド・ロ「は？」

うん、まあ当然の反応だよな。

『まったく、かわるよろし………もしもし』

相手が中国に変わった。

少し嬉しい、イギリスでもいいけどね

『さっきの訂正ある。つか説明不足だったあるな、説明しなおすからよく聞いとくよろし』

中国は落ち着いた声で話しはじめた。

その42 人にうざいと言っちゃいけません（後書き）

〈反省会〉

苑子「出番バンザイ!!」

なつじ「うん、黙って」

ほのか「私も出番あった!!」

さいほの「あれって出番って言えるの？」

ほのか「一応」

なつじ「つかなんか区切り悪くね？なんでこんな中途半端？」

苑子「なんか執筆してたらもうすぐで日が変わっちゃいそうな時間になってたからとりあえず投稿することにしたらしいよ」

さいほの「ああ！もう日付変わったちゃうー！」

ほのか「どどどどどっしようー！」

なつじ「この会話を終わらせればいいんじゃないかな、うん」

その43 説明は的確に（前書き）

とにかくすごい攻撃なんじゃないかい？

b
y
ア
メ
リ
カ

もう今回、今までで1番短い気がします；；
許してください、明日からテストなんですうううううう！！！！

その43 説明は的確に

『あいつらはさっきほのかが言った通り、いきなり我達を襲ってきた。最初、ほのかとイタリアが狙われたあるが危機一髪、我とあへんが攻撃を防いだある』

『あれって狙われてたんだー。てつきり誤って剣落としちゃったのかとww』

『ブエー』

んなわけねーだろ。

『で、あへんが変なことしようとしたから止めて我とほのかで二人の相手をするにしたらある。でも我は肩を切られて負傷、そこを奴らに狙われて我は大ダメージを受けたある』

ドイツ「大丈夫なのか？」

『イタリアが治療してくれたから今は大丈夫ある。で、我とほのかがピンチになった時にあへんが変身しちまったある』

おお、見たかったなー

『すごく腹立つあるがあへんは奴らを追い詰めていって最後になんかすごい攻撃したある』

苑子「すごい攻撃？…どんな？」

『すごい攻撃』

苑子「わからんわ；；」

アメリカ「とにかくすごい攻撃なんじゃないかい？」

苑子「だからわかんねえよ」

『……………次いつていいあるか？』

ドイツ「ああ、すまない。続けてくれ」

『その攻撃で起きた爆発のせいで奴らはどつか吹っ飛んじまったあ
る。』

ロシア「だからあの二人がいつ現れるかわかんないから気をつけて、
つてこと？」

『その通りだ』

いきなり中国からイギリスにかわった。

苑子「わかった！気をつけるね！」

『ああ、それと俺の個人的なお願いがあるんだが……………』

アメリカ「なんだい？」

『あの二人を……………殺さないでくれないか?』

苑・ア・ド・ロ「……………は?」

私達はイギリスの言葉にこんな声しか出せなかった。

その43 説明は的確に（後書き）

〈反省会〉

苑子「いやみじかあああああつ!？」

アメリカ「しゃーないしゃーない、明日から作者テストらしいんだぞ」

ロシア「テスト一日前のくせに普通投稿する?」

ドイツ「それが作者だからな」

苑子「まあ作者もテスト終われば1話1話が長くなるかもしれないね!」

はい、なりませんから。

作者は1日1話が精一杯だから!!

てことで作者は明日からテストです。
もう点数が悪いことが確定かもしれない……

その44 イギリスの頼み（前書き）

えー、めんどくさ

一回黙ってる

byアメリカ、ドイツ

うーん、なんか意味不な内容……
そしてギャグがない………

その44 イギリスの頼み

黄チームが騒いでる？その頃……

遊園地の奥の方にある倉庫。真っ暗闇の倉庫の中に二つの人影があった。

「キリハ、大丈夫？」

キリカがキリハの傷に手を当てる。

「大丈夫だ、どうってことない」

キリハは体中にひどい傷を作り、青い顔をしていてもキリカには大丈夫と伝えた。

キリハは先ほどのイギリスの攻撃からキリカを庇ってもらいに攻撃を受けてしまっただけかなり弱っている状態だった。

「しばらくここで休んでいましょう。私達は普通の人間と違って傷が治るのが何倍も早い。少し休めばすぐよくなるわ」

「ごめん……」

キリハはキリカに謝る。

「いいわよ。それにしてもあいつらホントおかしいわ……」

キリカがあの人間4人＋国8人のことを口にした途端、キリハが顔色をさらに変えたのをキリカは暗闇の中でも感じ取ることができた。

「ほんとだよ…………… あいつらホントにおかしいよ……………！！！」

「キリハ？確かにあいつらはおかしいけど……………」

「性格とか戦い方のこととかじゃないんだ」

「え？」

キリカはキリハがいるであろう場所を見る。

「あいつら……………俺達を倒す、とは言っても殺すとは一言も言わないんだ……………！！なんだ？殺さなきゃここから出られないんだぞ？なのに倒すって……………」

「キリハ！！！」

だんだん声を荒くするキリハの名をキリカが呼ぶ。
はつきりとした声で。

「う、めん……………」

「落ち着いて。あいつらが私達を殺さないでいてくれると思ってるの？そんなわけないわ。人によっては倒すってことは殺すってことなのよ」

「うん……………そうだよな……………」

キリハはそれきり喋らなくなってしまった。

『確かに……………あいつらは私達を殺すとは言わなかった……………。でもだからって私達を助けてくれるわけないし……………』

キリカはため息をついた。

『人間は……………信用できないのよ……………』

苑子「殺すな、ってどうゆうこと?」

『そのままの意味だ。奴らを殺すな』

ロシア「でもあの子達殺さないところから出られないんだよ?」
ロシアの言葉にイギリスは言い返せなくなってしまふ。

『……………話し合えば奴らだってわかってくれるはずだ』

アメリカ「えー、めんどくさ」

ドイツ「一回黙ってる」

アメリカ「……………」

ドイツに睨まれアメリカは黙ってしまふ。
隊長怖いです。

ロシア「でもなんで？彼女達を殺しちゃいけない理由でもあるの？」

『そ、それは……………」

イギリスがまた黙ってしまふ。

うーん、なんかよくわかんないけど……………」

苑子「わかった！キリ八達は殺さない」

ドイツ「苑子！？」

『いいのか？』

苑子「うん！ぶっちゃけ殺すのとか無理だし、なんかそっちの方が私的には楽かなー」

めんどくさいしね。

あとなんかこのままだとずっとシリアスっぽくなっちゃいそうだし。

『そうか、すまない』

苑子「ううん！大丈夫！！んじゃ、じゃばにー」

私はそう言って電話を切った。

アメリカ「本当にいいのかい？」

苑子「うん！だってあの二人、本当に私達を殺したいなんて思っていないしー」

ドイツ「え？」

苑子「だから殺すのかわいそうだからさ！！私はそこまで鬼じゃないさ」

私はニカツと笑った。

その44 イギリスの頼み（後書き）

〈反省会〉

ほのか「つかなんで電話で話してることアメリカ達にもろ聞こえてるの？」

苑子「え？なんかあるじゃん、携帯の電話の機能で。周りの人にも聞こえるように音声でかくすんの」

なつじ「あー、あるねー」

さいほの「つか藪崎意外に携帯使いこなせてるな」

苑子「あー、それはね。出番ないとき歩きながらとかずっと携帯いじってたからw」

ほ・さ・な「女子高生かお前は」

その45 グッパでチヨキを出す人は大体バカ（前書き）

返事したらしたでバカだけどね

byロシア

またまた短いです
テスト終わった……

その45 グッパでチヨキを出す人は大体バカ

イギリスは携帯を閉じて私に返してきた。

ほのか「苑子達、なんだって？」

イギリス「わかった、ってさ」

中国「よくイギリスの頼み聞いてくれたあるな。普通敵を殺すなど言ってハイそうですか、って言う人いねーある」

ほのか「それがあつちのチームにはいるんだなあ」

中国「？」

イタリア「苑子ちゃんのこと？」

ほのか「そ。苑子は1番早くにあの二人が私達と戦うのを拒んでるってわかった人だもん」

苑子はいつもあんなんで馬鹿だが、妙なところでめちやくちや鋭い。

ほのか「イギリス、それ知っててあのチームに頼んだんでしょー？」

イギリス「まあ……そうだな。あつちには苑子がいるしアメリカとドイツとロシアもいる。俺はあいつらが何とかしてくれる気がする」

るんだよな」

イギリスは少し笑いながら言った。

ほかの「じゃあ一応私達も援護するとしますかっ！ほかのチームと合流しよー！」

私はそう言って走り出した。

苑子「キーリハアアアア！！キーリカアアアア！！いたら返事してええええ！！」

ドイツ「普通返事しないだろ」

ロシア「返事したらしたでバカだけどね」

私達は今、爆発で飛んだキリハとキリカを探している。黒須達のチームはあっちから来たらしいけど今はあの二人も怪我してるだろうし時間もないってイギリス言ってたから私達であの二人を探すことにした。

やっと隠れんぼっぽくなってきたな……………

アメリカ「手分けして探さないかい？」

ロシア「いつ来るかわかんないのに危なくない？」

ドイツ「確かにそうだな……………しかし時間もないことだし一回手分けて探そう。」

苑子「OK！！んじゃあグツパね！グーッパ！！」

私はグー、ドイツはパー、ロシアはグー、アメリカはなぜかチヨキ

苑子「いや何チヨキ出してんの！！グツパだっつの！！」

アメリカ「え、ダメなのかい？」

苑子「ダメだよ！！グーかパーだけなの！」

アメリカ「そうなのかい！？」

ドイツ「アメリカ、お前グツパ知らないだろ」

アメリカ「うん」

あっさりと答えるアメリカ。

苑子「知らなかったんかい」

ロシア「じゃあもうアメリカくんはドイツくんと一緒によくない？」

ドイツ「そうだな。行くぞアメリカ」

アメリカ「待ってくれよ!!」

さっさと行くドイツをアメリカが追いかけた。

取り残された私とロシア。

ロシア「んじゃ行こうか苑子ちゃん」

苑子「え、あ、うん」

ロシアは笑顔で私に言った。

私、生きて帰れるかなあ……………

ヘタしたら殺されると怯えながら私はロシアの後をついていった。

その45 グッパでチヨキを出す人は大体バカ（後書き）

く反省会 （作者の）く

ぬわああああー！！やめてええ！！分かれて行動せんといてええ！
！話をややこしくしないでええ！！

さいほの「うるせえよ。つか話ややこしくしたの誰でもないお前だ
ろ」

さーせん（・ω・、）

なつじ「11月中に終わらなかったね」

さーせん（・ω・、）

ほのか「反省してないでしょ」

さーせん（・ω・、）

苑子「その顔文字結構気に入ってるでしょ」

さーせん（・ω・、）

四人「あんま調子のってつとぶつ殺すよ?」

.....さーせん(・ω・)

その46 お化け屋敷は誰だって怖い……………はず(前書き)

し、死なない程度にね……

b y 苑子

ロシアと苑子しか出ません!!
ロシアの性格がわからない……………

その46 お化け屋敷は誰だって怖い……はず

私はロシアとひたすら歩いていた。

苑子「いないね、二人」

ロシア「どこか目立たない場所に隠れてると思うなあ」

あれ、ロシアいつのまに水道管持つてる。

殺す気満々やん、どうしよう。

苑子「あ、あの二人殺さないでね」

ロシア「うん？ ああ殺さないよ。僕だってそんなひどいことはしないよー」

ロシアは笑顔で言う。

笑顔で言うところが逆に怖いっす。

ロシア「でも僕達の言うこと聞かなかったらちよーっと痛いことしなきゃいけないけどねー」

逃げてえー！ キリハとキリカ、マジ逃げてえー！

苑子「し、死なない程度にね……」

こつ言つとけばたぶん大丈夫………なはず。

ロシア「あ、なんかこことか怪しくない？」

そう言つてロシアが指差したのは少し古びた建物だった。

苑子「おお！！確かに！でも入口のとその看板に『お化け屋敷』つて書いてあるんだけど……………」

ロシア「さー行こー」

苑子「えっ！？ちよ、ぎゃああああ……………」

私はロシアに腕を掴まれて無理矢理、建物（お化け屋敷）に引きずり込まれていった……………」

苑子「ぶえつくしよいこんちくしょー！！ホコリっぱいね、ここ」

ロシア「もうちょっと女の子らしくしゃみできないの？おじさん？」

ロシアに冷ややかな目で見られてしまった。

中は真っ暗でほこりっぱかった。もしかしたらお化けが出るかもしれない。

れないと思っていたから少し安心した。

苑子「ロシア、なんか電気持ってない？」

ロシア「ロウソクとマッチならあるよ」

ロシアはマッチをすって火をつけ、ロウソクにともした。
ロシアはそれをロウソクをたてる専用の置物？に置いて、手に持った。

ロシア「さ、行こっか」

苑子「合いすぎて怖すぎますロシアさん」

ロウソクとロシアとお化け屋敷が妙に合いすぎてめちゃくちゃ怖かった。

苑子「ここの遊園地ってなんなのかな？」

ロシア「あの二人が作った物だからねー、わからないや」

ロウソクの明かりを頼りに私とロシアはお化け屋敷を進んでいく。

ガタッ

苑子「ぬおわっ!?!」

い、今どこからか物音が……

ロシア「あ、ゴメン。ちょっと物倒しちゃった」

苑子「な、なんだ……」

びっくりしたあ……

すごく安心して私をロシアがじっと見つめてきた。
そんなに見つめられたら照れるじゃないかww

ロシア「もしかして苑子ちゃん……こういうの苦手?」

苑子「え、いや!?!ちょっとこういう感じの所来ると体が拒絶して……」

ロシア「そういうのを苦手っていうんだよ?」

苑子「マジでか」

私、お化け屋敷苦手だったのか!!

ロシア「驚きだなあ。苑子ちゃん、なんも怖いものないと思ってた」

苑子「な、失礼な!!私だって苦手なものくらいあるよ!!」

ロシア「そーだよー」

ロシアは笑った。

しかしまさか私がお化け屋敷苦手だったとは……

なつじ達に知られないようにしよう……

やがて私とロシアはお化け屋敷の出口に来た。
結局なんもなかったな……

ロシア「別の所探そっか」

苑子「いえっさー!」

お化け屋敷から出ると私とロシアはまた遊園地を歩きだした。

その46 お化け屋敷は誰だって怖い……………はず（後書き）

く反省会？く

という名のロシアと苑子がお化け屋敷にいるときのドイツとアメリカ。

アメリカ「ドイツ！あそこにアイスクリーム屋が……………」

ドイツ「行く必要はない」

アメリカ「ドイツ！！ジェットコースターに……………」

ドイツ「遊ぶな！というか動かす奴がいらないなら意味ないだろう！」

アメリカ「ドイツ！！携帯がなんかおかしくなっちゃったんだぞ」

ドイツ「壊すなああああ！！！」

イタリアといるときと同じくらい胃が痛むドイツであった。

その47 人探しは慎重に（前書き）

よっし北だ！！

b y 苑子

短い………

そしてまた苑子とロシアしか出番がない………

その47 人探しは慎重に

あの二人をロシアと探し始めてどれくらいたっただろうか。
いくら探しても二人は見つからなかった。

苑子「ああー、もう疲れたあ……………」

ベンチに腰掛けてため息をもらす。

ロシア「うふふ」早く出てこないと……………」

ロシア、笑ってるけどキレる寸前なんだろうな……
怖え……

苑子「こーなったら奥の手使っしかないかあ……………」

ロシア「奥の手?」

苑子「ん!」

私は地面に落ちてる木の棒を拾って手で支えながら地面にたてた。
棒をたてていた手を離すと棒は傾いて北の方向に倒れた。

苑子「よっし北だ!!」

ロシア「え、今のが奥の手?」

苑子「うん」

ロシア「こんなので見つかるの？」

苑子「さあ？」

だってあんなの占いみたいなもんだし。

苑子「まあ何事も運だよ、運！！さあレッツゴー！」

私とロシアは北の方向に歩いていった。

しばらくするとある建物の前にたどり着いた。

苑子「ここにいる！！はず！」

ロシア「曖昧すぎるよ」

私は建物の扉を押した。

ギィッ、と音をたてながら扉は開き私とロシアは中に入った。

苑子「うっわ、また真っ暗だよ。電気ない？」

ロシア「ロウソクならあるよ？」

苑子「怖いからやめてね」

私は電気のスイッチがないか壁を触る。

そしたらなんかそれらしきものがあつた。

苑子「お、これかなっ」

スイッチを押すとパツと建物の中が明るくなった。

苑子「おー、ついたついた」

ロシア「倉庫みたいだね、ここなら確かにいそつだね」

苑子「いやあ、たぶんいないと思うよ？だってあれ半分勘だし……
……」

私はそこでしゃべるのをやめた。
あるものを見つけたからだ。

苑子「……………ロシア」

ロシア「？」

苑子「勘……………当たっちゃいました」

私の目線の先にはよりそって寝ているキリハとキリカがいた。

その47 人探しは慎重に（後書き）

く反省会？」

その頃のドイツとアメリカ、パート2

アメリカ「あの二人、見つからないんだぞ……」

ドイツ「そう簡単には見つからんだろう」

グウウウ……

アメリカ「お腹……空いたんだぞ……」

ドイツ「我慢しろ」

アメリカ「お腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いた」

ドイツ「うるさい！！わかったから！」

アメリカ「なんかくれるのかい？」

ドイツ「ああ、さっき……」

そう言ってドイツはアメリカの手に何かを置いた。

ドイツ「イギリスからもらったスコーンだ」

アメリカ「こんなの餓死する寸前でもいらないんだぞおおおおお！」

ドイツ「ああ！！」

アメリカはスコーンを思いっきり投げた。

イギリス「まったくあいつらどこにつ」

コツーーンッ

イギリスの頭にスコーン直撃

ほのか「（。。。）」

イタリア「（。。。）」

中国「（。。。）」

その48 寝てる人は起こさないように(前書き)

拷問でもするの？

しないから!!

byロシア、苑子

短いですよー……………

その48 寝てる人は起こさないように

ロシア「うわぁ本物だぁ」

ロシアが珍しいものを見つけたように興味津々な様子で二人の顔を
いじってる。

苑子「起きちゃうからやめて!!」

ロシア「えー」

せっかく寝てるのに！

苑子「今のうちに縄とかで縛っとこっか」

ロシア「拷問でもするの?」

苑子「しないから!」

さりげに恐ろしいからやめてほしいわ……

苑子「縄ない?縄」

ロシア「縄は持ってないなー」

持ってたら怖いわ。

苑子「倉庫だからあるかな？ロシアそっち見てみてくんない？」

ロシア「わかったー」

私とロシアは手分けして縄を探すことにした。

なんかごちゃごちゃしててわかりづらー……

苑子「ロシアー、なんか見つかった？」

ロシア「……………」

ロシアに話し掛けたが返事がない。
あれ、無視？私なんかしたかな。

苑子「ロシア？」

その時、首に何が冷たい物が当たった。
あれ、これよくありげな……………

なるべく冷たい物が肌に触れないようにしながら後ろを見た。

「よお、何してんだ？」

そこには笑顔のキリハがいた。

私の首に当てられていたのはキリハの剣。

やべ、これとてつもなくやばい状況じゃね？

苑子「あ、おはよーございまーす……よく眠れましたかー？」

「おかげさまでぐっすりだ。お前らが来なければもうちょっと眠れたんだけどな」

苑子「あ、起きちゃいましたか。いつから？」

「電気がついたくらいからかな」

苑子「最初から起きてたじゃねーか」

首に剣を当てられてるから自由に動けない。

「キリハ、そっちはどう？」

「ああ、いたぞ」

向こうからキリカの声がしてそっちを見てみると、私と同様、首に剣を当てられたロシアとキリカがいた。

ロシア「いきなり来るなんて卑怯だね」

「卑怯でも私達はお前らを殺さなきゃならないのよ」

そういうキリカノ表情はかたかった。

その48 寝てる人は起こさないように（後書き）

〈反省会〉

苑子「ピンチだから助けに来てくれない？」

ほのか「ここで頼んでこないでよ」

なつじ「ロシアいるから大丈夫じゃね？」

苑子「なんでもかんでも人に頼っちゃいけないと私は思うんだ!!」

さいほの「知らねーよ」

その49 絶体絶命？（前書き）

HEROの登場なんだぞ！！

byアメリカ

その49 絶体絶命？

今私たちは絶体絶命のピンチに陥っている。

なんでかって？

前の話を見ていただきたい。

とにかく絶体絶命のピンチなんだけど、なんだかんだ言って私まだ死にたくない。

苑子「み、見逃してくんない？」

「するかアホ」

睨まれた……

「まずお前らをここで殺してあとで戸惑ったあいつらを殺してやるよ」

苑子「ヘルプ！！ヘルプミー！！」

「黙れ」

苑子「私にはまだ明るい未来がああああ！！」

「なんか明るいつつーか暗い未来になってそうだなぞ」

苑子「ひでえ!!」

そんなこと言わなくても!

苑子「ど、私達どんなかんじで死ぬの?」

「首ちょんぱ」

苑子「もうちょつとましな死に方させてえええええ!!」

一番嫌な死に方ああああ!!!!

「!あなた、マフラー取りなさい」

キリカがロシアに言った。

ロシア「えー、嫌だよー。だってこれ体の一部だもん」

体の一部!?

「そんなのしてたら首切れないじゃない!外しなさい!」

ロシア「しつこいなあ。嫌って言うてるでしょ」

「っ!!黙りなさい!」

キリカが声を荒くする。

「今すぐ殺すわよ！」

ロシア「やってみなよ。まあ僕は死なないけどね」

苑子「どゆこと？」

ロシア「そろそろかな」

ロシアが目を閉じた。

その時、倉庫の天井の近くにある窓を割って二つの人影が入ってきた。

「なっ！！？ぐっ……」

一つの人影から何発もの銃弾が飛んできてキリハの剣や腕に当たった。

奇跡的に私には当たらなかった。

キリハは剣を手放して血が流れる腕の傷を抑えたため私は解放された。

「キリハ！！っ！！」

キリハに近付こうとしたキリカの所にも銃弾が飛んできて所々に当たった。

傷を抑え顔を歪ませるキリカからロシアは逃げ出した。

苑子「な、な？」

ロシア「ふー、もうちょっと安全な助け方してくれない？アメリカくん」

ロシアが人影を見た。

二つの人影の正体は銃を構えたアメリカと鞭を手に持ったドイツだった。

アメリカ「HEROの登場なんだぞ！！」

苑子「いや遅いよ！！」

来るなら最初から来て欲しかったよ！

ちびりそうだったよ！

アメリカ「HEROは遅れて登場するもんなんだぞ」

苑子「知るか！！」

無駄にテンションが高いアメリカを怒鳴る。

苑子「つか私やロシアに銃弾当たったらどうすんだよ！死ぬよ！？」

アメリカ「俺は百発百中の腕前を持つてるから心配ナッシングなんだぞ！！」

ドイツ「ほとんど適当だったけどな。当たらなかったのは奇跡だ」

危なかったあつー！

「な、なぜ………ここが………！！」

キリカが苦しそつに言う。

ロシア「これだよ」

ロシアがマフラーを外し、マフラーの裏側を見せた。

裏側には小さい四角形の物がくつついていた。

苑子「何それ？」

ロシア「GPSだよ。^{ジーピーエス}もしもの時のため、ってドイツくんがつけてくれたんだ」

ロシアがGPSを取ってからまたマフラーを首に巻いた。

ドイツ「それのおかげでロシアの居場所が携帯に届いて来るんだ。それでロシアの居場所が長時間変わってないからおかしいと思って来てみたんだ」

ドイツが携帯を開き画面を見せる。
今いる倉庫の所で赤い点が光っている。

苑子「すげえ！！ロシアとドイツナイス！！」

ロシア「うふふ、ありがとう」

アメリカ「俺は！？俺は！？」

苑子「褒める所がない」

アメリカ「なんでだい！！？」

アメリカが口を尖らせる。

「つくそ！！ふざけんな！！」

キリハが落ちた剣を拾い、私達に向かって投げてきた。

苑子「あぶねっぴ！！」

ドイツ「ぴ？」

剣はなんとか避けた。

でもキリハから限りなく殺気が出ている。
話し合うなんて状況じゃない。

「ぶっ殺してやる！」

「キリハ！落ち着きなさい！」

キリカがキリハに言うがキリハは聞く耳をもたない。

苑子「わわ、どうしよう」

ドイツ「外に出るぞ！」

苑子「なして!？」

ドイツ「出ればわかる」

私達は倉庫の扉を開けて外に出た。

「にがすか!?!どうせ外に出たってたった四人だ!生きられると思うな!！」

キリハが叫びながら私達の後を追ってきて外に出てきた。

さいほの「“四人”じゃないよ？」

ほのか「数も数えられなくなったのかな？」

なつじ「ははは、バーカバーカ!！」

「なっ……………!?!？」

外に出たキリハとキリカを出迎えたのはこの異空間に連れて来られた世界を救う存在、全員だった。

その49 絶体絶命？（後書き）

〈反省会〉

ほのか「なんかやつと次からドワァーッと来そうだね！」

さいほの「ドワァーッって何？」

ほのか「なんかあれ、ブワァーッと！」

なつじ「わからねえよ」

ほのか「まあ簡単に言えば最終決戦ってことだよ」

さいほの「最初からそう言えよ」

苑子「というわけで次回から最終決戦突入！！私達は二人を説得できるのか！そして私達の運命は！！？次回をお楽しみにー！」

ほ・さ・な「何お前が最後にまとめてんだよ」

というわけで最終決戦開始です！！

その50 最終決戦開始（前書き）

えとー…………どゆこと？

知らなかったんかい

b y 苑子、ほのか

ついに最終決戦開始です。

その50 最終決戦開始

「き、貴様ら……！！なぜここが……！！！」

さいほの「これだよ、これ」

さいほのが携帯を取り出す。

なつじ「さっきドイツから全員にメールが送られてきてねー。こんな画像がはりつけてあったんだよー」

なつじは画面を見せる。

画面にうつっているのは地図のようなものに赤い点がある場所にポツンとおかれた画像だった。

ほのか「最初はなんだかわかんなかったけどイギリスが地図じゃね？って」

イギリス「どこからどう見ても地図だろ」

苑子「でもよくこの遊園地の、って気付いたね」

イギリス「そりゃそうだ。よく見ろ」

苑子になつじの携帯の画面にうつる地図をよく見てみる。

苑子「あ、これ……」

日本「そうです。ご丁寧に周りにある遊園地の乗り物の名前が書いてあるんですよ」

日本が静かに笑いながら言った。

「こんなときだけチームワーク抜群ね」

キリカがキリハの隣で言う。

さいほの「まあほとんどドイツのおかげだよね」

イタリア「さすがドイツー！」

ドイツ「い、いや……俺は別に当然のことを……」

ドイツが顔を赤くしてそっぽを向く。

これがムキデレというやつか……！

なつじ「黒須、顔に出てるよ」

苑子「そういうなつじもにやけてるよ」

ほのか「お前もな」

なつじも苑子もにやけている。
ムキデレは偉大だ。

「つくそ……………勝負だ！！正々堂々と！！どちらかが死ぬまでな！！」

苑子「えっ、ちょっ、私達は話し合いに……………」

「うるさいー！！」

イギリス「話を聞け！！俺達はお前らを殺したくないんだ！」

「……………は？」

剣を振り上げたキリハが眉間にしわをよせた。

「……………どういうこと？」

キリカがやけに真剣な表情で聞いてくる。

苑子「えとー……………どゆこと？」

ほのか「知らなかったんかい」

さいほの「え、なんの話？」

なつじ「私も知らない」

そっぴえばさいほのとなつじ達に連絡すんの忘れてたww

イギリス「おつ、俺達はお前らを………ってこれ違うからな！お前達のためじゃない、全て俺のためなんだからな！勘違いすんなよ！」

こんなときにツンデレだされてもぶっちゃけめんどくせえ。

誰かわりに説明してくんないかな。

私はめんどいからやんないけど。

苑子「私がかわりに完ぺきに説明しようっ！」

嘘つけえいつ！！

お前さっきまでわからなかっただろーが！！

苑子「まあ予想だけどー」

フランス「予想かよ」

やっぱりな。

苑子「やっぱ二人とも戦いたくないんじゃないかなーって」

「……………！！」

「はあ！？何を言ってるんだよお前！」

キリハは反発したがキリカは目を見開き驚いた表情になった。

つか苑子の予想ビンゴやん。無駄にすぎえな、無駄に。

苑子「そのまんまの意味だよー!!」

苑子が陽気に答える。

あれ、ここってシリアスにすべきところじゃないの？

「俺はそんなこと、思っていない！でたらめを言うな!!」

苑子「そうなの？」

「当たり前だ！俺達はボスに命じられて……………!!」

中国「それっていやいやじゃねーあるか？」

中国がキリハに聞く。

ロシア「確かにー。ボスに命じられて仕方なくやってるんじゃないの？」

「そつ、そんなこと……………」

キリハはうまく返せなくなってしまった。

アメリカ「なんか戦わなくちゃいけない理由でもあるのかい？」

「!!!!!!!!!!」

このアメリカの質問にはキリハではなくキリカがかなり反応した。
しかしキリハは表情を変えて、

「うるさい！とにかく勝負しろ！！俺達はお前らを殺すんだあああ
あ！！！」

キリハはそう叫んだ。

苑子「説得力なかったかな？」

なつじ「そういう問題じゃないと思うよ？」

そして、ついに最終決戦が始まった。

その50 最終決戦開始（後書き）

〈反省会〉

ほのか「ついに始まったね、最終決戦」

さいほの「ここまでくそ長かったね」

なつじ「いや長すぎじゃね？」

苑子「それよりね、最終決戦が始まったのもめでたいことなんだけど「めでたくねえだろ（さ）」ほかにもめでたいことがあるんだよ！！」

ほのか「何ー？」

なつじ「私が初めてみかんを食べた日？」

さいほの「知らねえよ。てかめでたくねえだろ」

苑子「ちゃんと今回の話のタイトルを見たまえ」

ほのか「ん？あ……」

なつじ「いつのまに！」

さいほの「第50話だ……」

苑子「ザツツライト！！てことでついに50話突破いたしましたー！！ひゅーひゅー！」

なつじ「ついこの間30話突破ー！って喜んでたのにね」

ほのか「作者にしては珍しく仕事が早いな」

さいほの「勉強しろ勉強」

苑子「まあそれだけ」

ほ・な・さ「冷めるの早っ！！」

ということでは50話突破。

まさかここまで続くとは……………
作者も驚きです……

その51 戦いの相手（前書き）

クズちゃう!! バカや!!

b y 苑子

話が進まん!! w

その51 戦いの相手

イギリス「お前らは戦いに参加するな」

イギリスが私達四人を見て言った。

苑子「な、なして!？」

なつじ「イギリス達だけで戦うの? 私達も戦うよ!」

さいほの「私はめんどくさいから別にいいけどな」

ほのか「私も」

やる気なさすぎだよコイツら。

日本「危険ですし、それに……」

中国「今のお前らには戦いは厳しいある」

ほのか「厳しい?」

ロシア「あの二人を殺したくない、そうしか思えなくなって隙をつかれるからかな」

なつじ「う、うう……」

私達は言い返せなくなってしまう。
確かにそうかもしれないな……………

なつじ「……………わかった……………」

私は戦いたい気持ちを抑えて言った。

苑子「えーやだやだやだ!!」

空気よめSKY!!

珍しく私がシリアスに……………

さいほの「薮崎ー、みんなが戦ってる間みんなでクッキー食べよう
かー」

苑子「みんな死ぬなよ!!がんばー!!」

なんなのコイツ。

イタリア「お、俺も……………」

ドイツ「お前も戦えイタリア!!」

イタリア「ウヴェー……………」

中国「つかあいつら力の加減知らないからあの二人普通に殺しちゃ
う確率大ある……………」

フランス「た、確かにな……………」

聞こえてるからな。

私だって力の加減くらい出来るわアホ！！

「話は終わったか？」

イギリス「ああ。俺達が相手をしよう」

イギリスを先頭にして七人が、イタリアが少し戸惑い気味に前に出る。

「ふっ」

あれ、今笑った？鼻で笑ったよね？うざいんだけど。

「ただでさえ少ない戦闘力を減らす？ふざけるのも大概にしろ」

さいほの「私達もともと戦闘力になってないんで問題ナッシング」

ほのか「そんなはつきり言うて泣けてきたわ」

なつじ「つか明らかにお前ら二人の方が人数的にも少ないだろーが。小学生からやり直した方がいいよ？」

「俺達は戦闘力がすごいからな。戦車が100台あっても足りないな…」

……いやちょっと多いかな。さすがに100台は……」

なつじ「自信なさすぎだろ」

苑子「てゆうかさつき思いきり追い詰められてたよねw」

「うつさい!!」

つかキリカ空気ww

「とりあえずっ！まずお前から殺してからそっちのクズ共四人も殺してやるからな!!」

ほのか「クズつつたよね？今クズつつたよね？」

ほのか「キレル寸前になる。」

苑子「クズちやう!!バカや!!」

さいほの「そこ、自信もって言う所じゃないから」

自分で言っちゃうんだ。

自覚あるんだね、一応。

「おりゃああああ!!!!」

いきなりいいいい!!!!？

こ、こうして

キラカ、キラハVS国8人

の戦いは始まった……。

その51 戦いの相手（後書き）

〈反省会〉

「?ここは……………」

ほのか「やつほうキリカ!」

「な、お前ら!なぜ……………」

さいほの「ここは後書きという名の反省会……………あれ?反省会という名の後書き?」

なつじ「どっちでもいいだろ」

「とにかくなぜ私がここに?」

苑子「今回の話の本編でまっつっつたくしゃべってないからだよ」

「は?」

ほのか「つまりキリカの出番がないからこの反省会で出させてあげよっかなーという作者の考えです」

「なるほど!」

なつじ「納得するんだ」

さいほの「あ、でももう時間ないから終了ね」

「え！？ちょ、まだ何もしゃべってn……」

というわけで出番がないキリカさんでしたw

その52 戦い観戦中（前書き）

英語ワカリマセーン！

b y ほか

それほど長くないです。

そして後半シリアスです！

その52 戦い観戦中

今現在、八人（若干一名白旗振ってるが）がキリハとキリカと戦っていた。

あんなに自信はあったがやはり何回も戦ってそのたびに怪我をしたせいか二人はおされていた。

ほのか「暇だよさいほのー」

さいほの「戦うよりはましだろ」

苑子「さいほのっ！クッキー」

なつじ「覚えてたのかよ」

さいほの「あー、あれ嘘だから」

嘘、と言った途端薮崎は石化した。カチンコチンだ。

苑子「な……」

さいほの「だーかーらー。嘘。う・そ！ー！英語で言つと……………何？」

なつじ「知るか！」

ほか「英語ワカリマセーン」

さいほの「ミートウー（Me too）！！」

なつじ「うざいんだけどこの二人殴っていい？」

さいほの「暴力へんたい」

なつじ「反対だろ。いい加減にしないと息の根止めるからね」

拳を固めてプルプルと震え出したからなつじをからかうのはとりあえずやめにしよう。

苑子「ク、クッキー……………」

ほか「まだ気にしてんのかよ。私ポケットにガム入ってたけど食べる？」

苑子「食うー！！」

ほか「ん」

黒須がポケットからミント風味のガムを出し、中から一枚取り出して藪崎に渡した。

藪崎はそれを嬉しそうに受け取ると包み紙を取って口に入れた。

苑子「……………辛iiiiiiii!!」

ほか「眠気覚まし用の強い奴だからねー」

さいほの「いいなー。黒須、私にもちようだい」

なつじ「あ、私もー」

ほか「あいよー。私も食べよー」

イタリア「俺もちようだい!!」

さいほの「なんでいるんだよ」

イタリア「ちよつと疲れたからー、えへへ」

なつじ「戦ってこい」

イタリア「ヴェー……」

へらへらと笑いながら来たイタリアを戦場に返し、私はガムを口に
入れた。

苑子「それにしても、くちやくちや、暇、くちやくちや、だねー」

なつじ「くちやくちやうるさいし汚えからやめろ!」

苑子「えー、くちやくちや、だつてー……」

ほか「もういいしやべんな」

苑子「くちゃくちゃくちゃくちゃくちゃ……………」

なつじ「黙っててもうるせええええ！」

苑子「ぬぐああああ！？」

怒りメーターが満タンになりついに爆発したなつじが苑子に飛び蹴りをした。

まあ怒りメーターをためた半分はおそらく私と黒須だけだね。　　H A

飛び蹴りされた苑子はキレイに飛んでいき植木につっこんだ。

前から思ってたけど、藪崎のポジションがかわいすぎるぜ。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

イギリス「な、何あいつら呑気にガム食ってんだよ!!」

アメリカ「え！？ガム！？俺も食べたいんだぞ！」

ガム、と聞いた途端目を輝かせ戦いをやめてほのか達の所に行こうとしたアメリカをフランスが止める。

フランス「あー！行かないの！一応あの二人を押してるっちゃあ押してるけどそれも結構精一杯なことなんだよ！」

アメリカ「知ったこつちやないんだぞ！」

中国「おめえはあいつらに殺されればいいある!!」

中国がアメリカを中華鍋で殴った。

アメリカは頭を抑えて涙目になった。

アメリカ「何するんだい!痛いじゃないか!!」

ロシア「自業自得だよアメリカくん。反省してね?」

アメリカ「ぶー」

アメリカは渋々、銃を持ち直して構えた。

向こうは押されていて傷をいっぱい作っているがどんどん攻撃をしかけてくる。油断はできない。

ドイツ「?そっいえばイタリアは……」

日本「ああ、イタリアくんならあそこでほのかさんにガムもらおうとしていますよ」

ドイツ「な!イタリアリアアアアア!!!」

日本「ドイツさんも大変ですね……」

日本はイタリアの名を叫ぶドイツを見てそう呟いた。

「くっ、はあはあ……………」

「キリハ、無理をしない方が……………」

「っるさい!!」

「キリハ……………」

傷をたくさんつくり、肩で息をするキリハをキリカが心配して声をかけるがキリカは自分の肩に置かれた姉の手をはらった。

今戦ってる相手達は言い争ったりして自分達の方を見ていない。

「キリハ……………もうやめましょう」

「!!キリカ!?!」

「あの人達の言う通りよ。戦うの嫌でしょ?」

「何を……………!!」

「私はもう嫌。ねえ、今からでも遅くないから。だから……………」

「黙れよ!!」

キリハが叫んだ。

それに気付き、キリハに視線が集まる。

「いちいちっるさいんだよ。お前に何がわかるんだよ!!」

「キリハ!!」

「戦いたくないならキリハはもう戦わなければいい!でも俺は戦うのはやめない!!あいつらが死ぬ、それか俺が死ぬまでな!!」

そう言い残すとキリハは剣を構えて、ドイツ達に突進していった。

「キリハ……………どうして……………」

キリハは下を向いたままそこから動かないで弱々しい声ですつとそう呟いていた。

その52 戦い観戦中（後書き）

（反省会）

ほか「後半シリアスうううっ!!」

なつじ「作者によると次の話結構シリアスの予定らしいよ」

苑子「じゃあ黒須となつじ出番ないんじゃない？」

さいほの「なして？」

苑子「シリアス似合わないから？w」

ほ・な「死ね」

苑子「ぎゃあああああ!!」

ほか「さーて邪魔者は消え失せました。話を続けましょう。」

さいほの「……………（^- - ^-）」

なつじ「もうすぐで終わりそうだね!!」

さいほの「作者によるとあと2〜3話くらいらしいよ」

ほのか「やっとだね!!」

苑子「長かったね……」

なつじ「ちっ、生きてたか」

苑子「いや殺さないで!! つかなんの話してたの?」

ほのか「さーて次回もお楽しみにー」

苑子「無視すんなああああ!!」

その53 崩れゆく姉弟の絆（前書き）

俺の出番はここで終わりかよー！

byアメリカ

すっすっすごくシリアスな気がします。 たぶん。

もう日付変わっちゃいましたががんばって更新しましたー！

その53 崩れゆく姉弟の絆

フランス「な、なんだ？仲間割れか？」

キリハがキリカを怒鳴っているのを見てフランスが呟く。

イギリスとちよつとした（？）言い争いをしていたフランスは突然、キリハの怒鳴り声が聞こえてきて二人の様子をずっと見ていた。フランスだけじゃない。

さっきまでフランスと言いつ争いをしていたイギリスや、そのほかの様々なことをしていたドイツや日本達もキリハとキリカのことを見ている。

ほのか達もだった。

驚いた顔で二人を凝視している。

やがてキリハのみが両手に剣を握って8人の国の所に突進してきた。

中国「おお！？」

キリハが狙いを定めたのは中国だった。

中国は中華鍋でキリハの剣を防いでいる。

中国「い、いきなり来んなある！！心臓止まるかと思たある！」

中国が中華鍋でキリカの剣を防ぎながら顔を青くして叫ぶ。

しかしキリカはすぐさま防がれた剣を中華鍋から放し、中国の近くにいたアメリカに標的を変えた。

振り下ろされた剣を避けてアメリカは銃を連射した。

キリカはそれを全て避けてアメリカの隣にいた日本に剣を向けた。

アメリカ「俺の出番はここで終わるかよ!!」

イギリス「そこかよ!」

日本は剣を愛用の刀で防ぎ、今度は自分から攻撃を仕掛けた。

キリハはすぐに剣で攻撃を受け止めた。

キィン!!と金属のぶつかり合う音が辺りに響く。

日本「次々と標的を変えとは……………なぜそんなことを……………」

日本が刀を押しつけながらキリハに問う。

キリハは黙ったままだ。

日本は黙ったままのキリハをしばらく見た後、今以上の力でキリハの剣をはらった。

「あつ……………」

油断をしていたのかキリハの手から簡単に剣がすべって、飛んでい

った。

苑子「あぶねっぴー！」

さいほの「ぴって何？」

剣はガムをくちゃくちゃと音をたてながら食べていた苑子の近くに
ささった。

動揺しているキリハの首に日本は刀を当てた。

日本「諦めたらどうですか？そちらはもう一人。8……………7対1で
は必ずと言っていいほど勝ち目はありませんよ」

ほのか「今なんで7に減らした」

ほのかが呟く。

「……………るさい」

日本「？」

「うるさいうるさいうるさい！！お前ら見たいなバカはおとなしく
殺されればいいんだよ！なのにいつまでも……………うざいんだよ！！」

キリハが叫んだ。

その言葉を聞いてロシアがキリハの前にやってきた。

ロシア「どうして仲良くできないの？」

そう言うロシアの声はいつもみたいに無邪気じゃない。
今回は顔もまったく笑っていなかった。

ロシア「そんなこと言う子、いらないよね？」

ロシアは手に持った水道管をキリハに向かって振り下ろそうとしている。

なつじ「ロシアー!!」

なつじがロシアに向かって叫ぶがロシアは聞く耳を持たない。

ロシアはそのまま水道管を振り下ろした。

苑子「しーんけーん……………」

突然、キリハの前に誰かが現れた。

苑子「しらはどりっ!」

現れた人物……………苑子はそう叫びながら見事ロシアの振り下ろした水道管をおさえた。

キリハやロシア、ほかの人までもが苑子の行動を理解できずにいる。ずっと下を向いていたキリカも顔をあげてその光景を見つめていた。

苑子「もーロシア、ダメじゃん」

苑子が水道管を放しながら緊張感のない声で言う。

苑子「イギリスと約束したでしょ？殺しちゃダメだって」

苑子は優しく笑った。

その53 崩れゆく姉弟の絆（後書き）

く反省会く

ほのか「……………」

なつじ「……………」

さいほの「……………なんで二人共そんなにテンション低いの？」

苑子「私の言う通り出番なかったねっ」

さいほの「ああ、それが」

ほのか「もうほんとマジでさあ、この話で一回しか喋ってないって
どうよ？」

なつじ「まじありえんしー」

さいほの「そ、そんなこと……………」

ほのか「そんなこと！？そんなこととはなんだ！」

さいほの「いやぶつちゃけ私も一回しか喋ってない気が……………」

ほのか「！……！？（。㇏）」

なつじ「!!!!（・A・）」

苑子「（´、?）」

さいほの「え?え?」

ほ・な「仲間だ!!」

さいほの「なんかうれしくねえええええ!!」

その54 決着?の時(前書き)

デコピン?あ、違うわ。アッパーだ!!

b y 苑子

ついに決着?がつきます!

すこーし長めです。

その54 決着?の時

「お前……………どうして……………」

キリハが驚いた顔で自分の前にいる苑子に聞く。

苑子「ん?どうしてって、イギリスが言ってたから……………」

苑子が振り返って笑顔で言った。

苑子「それにさ、やっぱり殺すのはかわいそうかなーって思ってた」

ロシア「……………」

「でも俺達を殺さないとここから出られないんだぞ……………?もう時間はない、やるなら早くやったほうが……………」

その時、苑子がキリハの頬を思いっきりはたいた。

苑子「苑子ビンタ!!」

「ぐほあっ!!?」

もともと力が強い苑子のビンタだ。

殴られた頬をおさえてキリハは涙目になりながら叫んだ。

「な、何するんだよ!!キリカにも殴られたことないのに!!」

ほか「古っ！！どこのロボットのパイロットだお前は！」

苑子「だまらっしゃい！！私達は君達を殺したくないんですよ！！
OK？」

「ノー！！！」

苑子「苑子ビンタ！！！」

「またっ！！？」

「何がしたいのよあなたは……………」

キリカが苑子とキリハのもとに呆れ顔でやってきた。

苑子「自分達を殺したくない人殺しちゃたら私達完全に悪者じゃん！！だから殺したくないの！」

さいほの「あ、そんな理由だったんだ。てつきり薮崎は実は優しい人間だったんだと……………」

さいほのが冷めた目で苑子を見た。

苑子「い、いや！今の嘘！人は殺しちゃダメなんだよ！！うん！」

なつじ「なんかイマイチ説明できてないような……………」

ドイツ「……………！！やばい、あと30分しかないぞ！！！」

ドイツが時計を見てあせる。タイムリミットは刻一刻と迫っていた。

もう時間がない。

苑子「それでそのー……………なんというか……………」

苑子が考え込む。

そして答えが出たようで人差し指をキリ力とキリ八に向けて言った。

苑子「私達と友達になろうー!!」

「……………はあ?」

ほぼ全員「……………え?」

イタリア「ヴェー」

その場にいるほぼ全員が聞き返した。

イタリアだけは聞いてなかったようので白旗をいじっている。

なつじ「何言ってるんの苑子」

苑子「え?だから友達になろー、って……………」

フランス「どういう意味?」

苑子「いやー、友達だったらお互い殺す理由なくなくない?一件落着!」

イギリス「するか!」どうなってんだお前の頭ン中は!」

イギリスが笑顔で説明する苑子を怒鳴る。

苑子「み、耳元で叫ばないでー……………」

鼓膜ヤブレルーと目に涙を溜めて耳をふさぐ苑子。

フランス「そいつらはボスとかに頼まれてやってんの。こついう仕事しくじったらどうなると思ってんの？」

苑子「デコピン？あ、違うわ。アッパーだー!!」

ほのか「どっちもちげーよ!! 答えから掛け離れすぎだー!!」

さいほの「そんなかわいいもんで済んだらこいつらは苦労しないわボケエ」

なつじ「バカだろ。やっぱりお前バカだろ」

苑子「そんなみんなで総攻撃しないでよ!!…ちよつと場を和ませたかっただけだもん!」

中国「じじいあるかお前は」

ちよつとボケただけでも総攻撃される苑子。哀れすぎる。

ロシア「普通、命令とか聞かない部下は殺すんじゃない? そんなかんの組織は……………」

イタリア「殺すの!？」

イタリアがドイツの背中に隠れる。

ドイツ「そうとは限らないかもしれないが………可能性は高いな」

苑子「そうなのか………じゃあ友達作戦はダメか……」

「当たり前だ！！だれがお前らとなんか友達になるか！！」

ほのか「友達いなさそうなくせにw」

「うるさい！！」

二人が声をそろえて言う。さすが双子。

苑子「えー、友達だめ？」

「ダメに決まってるだろう！！」

苑子「えー、じゃあさ………」

苑子がキリハの手を取る。

突然だったのでキリハは顔を赤くした。

苑子「友達だとは思わなくていいけどさ、ただ仲良くしてほしいんだ。いい？」

苑子が笑顔でキリハの手を強く握った。

ドキッ!!

ほのか「ん？今恋愛漫画でありそうな効果音が聞こえてきたような……」

さいほの「私もだ」

日本「わ、私もです………」

なつじ「誰が誰にときめいたんだ？」

フランス「愛っていい……」

イギリス「黙れワイン野郎」

アメリカ「お腹空いたんだぞ!!」

全員、今聞こえたよくありがたな音に疑問を抱いている。

キリハを見ると顔が真っ赤で上の空だ。

「キ、キリハ？」

キリカが声をかけるがキリハはそれに気付かない。

苑子「おーい、元気ー？」

苑子がキリハの手を離し、顔の前で手を振る。

「……………はっ!!」

キリハはやつと現実に戻ってきてきて苑子から離れた。

「なななななななな」

中国「どんだけ『な』を連発するあるか」

キリハは突然、片手を上げた。

「解除!!!!」

キリハがそう叫んだ途端、周りの景色が歪んだ。

なつじ「な、なっ!？」

苑子「うぷっ……………気持ち悪……………」

さいほの「吐くなよ、汚いから」

ほのか「私は限界……………」

さいほの「うわああああ!?!耐えろおお!!」

さいほのが必死に今すぐに吐きそうなのかを励ます。

やがて周りの景色の歪みがおさまった。

ドイツ「ここは……………」

そこは異空間に来る前……………約5時間前にいたホテルのゲームセクターだった。

ほのか「も、戻ってきた……………」

「キリハ……………なんで……………」

「こ、ここの今回は見逃してやる！！さらばっ！！」

キリハは噛み噛みでそう言い残すと姿を消した。

「あ……………」

全員「……………」

「め、迷惑かけたわね。じゃあ……………」

キリカも消えていった。

イギリス「と、とりあえず……………助かった……………ってことか？」

アメリカ「DDDDDDDDDDDD！…やっぱりHEROは無敵なんだぞ！！」

アメリカが嬉しそうに叫ぶ。

なつじ「よ、よかったあ……………」

さいほの「ホントだよ……………もう終わりかと思ったもん……………」

なつじとさいほのがへなへなと床に膝をつく。

ほのか「ふわぁーあ……………なんか安心したら眠くなってきた……………」

ほのかがあくびをする。

ロシアが時計を見るともうすでに0時をまわっていた。

フランス「お兄さんもくたくだよ……………」

中国「もう今日は爆睡できそうな気がするある……………」

日本「では部屋に戻って休みましょうか」

全員はゲームセンターから出て、部屋に戻り眠りについた。

その54 決着?の時(後書き)

↓反省会 (主人公の部屋で) ↓

ほのか「ああああ………眠い………」

さいほの「ちゃんと布団かけて寝なよ。風邪引くよ」

なつじ「さいほの母ちゃん!!」

さいほの「何が言いたいのチミは」

なつじ「いやなんかお母さんみたいだったから………」

さいほの「私はまたピッチピッチの13歳だああああ!!」
(さいほのは早生まれのためまだ誕生日を迎えておりません)

なつじ「はっ、私は14歳だしいい!!1番お姉ちゃん!!」

さいほの「小さいけどな」

なつじ「それを言うな!!言われると思ってたけどさ!!」

さいほの「とにかく寝よう。眠くて仕方ない」

なつじ「つかいつのまに浴衣に戻ってる………なぜに?」

ほか「そこは気にしちゃダメだよ」

さいほの「じゃおやすみー」

ほか「……………」

さいほの「……………」

なつじ「……………」

苑子「ぐおおおお……………ぐおおおお……………」

ほ・さ・な『眠いけどうるさすぎて寝れねえええ!!』

三人は苑子のいびるのせいでしばらく眠れなかったという……………

その55 夏休みの終わり（前書き）

変態髭野郎が！！

なっ！？お兄さん怒ったよ！？この元ヤン紳士！！

b y i ギリス、フランス

夏休み編のエピローグのようなものです。

その55 夏休みの終わり

ガタンガタン…………

人があまり乗車していない電車に私達は乗っていた。

流れる風景を眺めながら私達は

大富豪をやっていた。

ほのか「おつしゃあ！！あつがりー！！大富豪だああ！！」

アメリカ「またほのかかい！？10回中全部10回君が大富豪だったじゃないか！いい加減大富豪の座を俺に譲ってくれよ！！」

さいほの「いやお前弱すぎなんだよ。何回最下位になってんだ」

なつじ「ほのか！私はみんなの上に立たなくちゃいけないんだよ！だから1位譲って！」

ほのか「なつじが言うところS発言にしか聞こえないよ！！」

なつじ「その通りだよ！！」

イギリス「自分で言うなよ!!」

12人だとさすがに多すぎるため私、さいほの、なつじ、苑子、アメリカでやっていた。

ちなみに私は大富豪はこういうトランプのゲームの中で1番得意だ。
てことで10連勝中。

さいほの「あがり!」

なつじ「私もあがり」

苑子「わっちも!」

アメリカ「……………」

はいアメリカ、また最下位!。

かれこれ10連敗中だ。

アメリカ「あああ!!もうやめだよ、やめ!!」

苑子「えええ!!」

アメリカはトランプを投げ出した。

ロシア「わぁ……………ちゃんと片付けてよアメリカくん」

飛び交うトランプを見てロシアが呟く。

ほのか「えー、終わり？20連勝目指してたのにー」

アメリカ「ひ、HEROはトランプなんか似合わないんだぞー！プレレスごっこがやりたいんだぞー！」

さいほの「私パス」

なつじ「私もー」

ほのか「私もね」

苑子「ぐおおおお……」

苑子、いつのまに寝てたのか。つかいびきつるせえ。

アメリカ「みんなノリ悪いんだぞー！でことでイギリス！やるぞー！」

イギリス「なんで俺なんだよー！」

アメリカが窓際でうつらうつらとしていたイギリスに声をかけた。
イギリスは当たり前のようにアメリカを怒鳴る。

フランス「いつけー！アメリカ！イギリスをぶつとばせえー！！」

イギリス「っ！このワイン野郎！！お前も道連れだ！」

フランス「え、ちょ。お兄さんは……」

アメリカ「HEROキックー!」

フランス「ぐほあっ!!?」

アメリカの必殺 HEROキックを受けたフランスはその場にゆっくりと倒れていった……

ドイツ「アメリカ……加減つてものがあるだろう……」

イタリア「ふ、フランス兄ちゃん大丈夫ー?」

イタリアは倒れてぴくりとも動かないフランスの傍に近寄ってきた。

アメリカ「これでもおさえほうだよー?5%くらい」

イギリス「ほとんど本気じゃねーか」

中国「おめえらガタガタうるせーある!もうちよつと静かにするよろしー!」

日本「で、電車は爺にはキツイ乗り物です………うう」

中国がアメリカ達に怒鳴り、その隣で日本が腰をおさえている。

ロシア「わあ、日本くん。だーいじょーぶー?」

日本「え、ええ。なんとか………」

ロシア「もしよかったら僕が日本くんの腰にすこしポコポコポコリン　ってするけど「結構です!!」そっかぁ……………残念だなあ」

ロシアは残念そうな顔をした。

『次は○○駅。○○駅……………』

電車内にアナウンスが響いた。もうすぐで降りる駅だ。

それぞれ荷物を持って電車を降りる準備をした。

やがて降りるべき駅に電車はゆっくりと止まり、ドアが開いた。

全員が駅のホームに降りた直後にドアは閉まり、電車は次の駅へと走っていった。

アメリカ「んー!! やつと着いたんだぞー!!」

アメリカが体をのばす。

ほのか「あつちいー…………」

8月の下旬とはいえまだ暑い。

電車内は冷房が効いてたから余計外は暑く感じられた。

さいほの「あー早く夏終わんないかなあ……」

苑子「ぶっちゃけ次の話では冬に……」

なつじ「しっ！！」

なつじが苑子の口をふさぐ。

イタリア「ヴェー……ドイツー、疲れたよー」

ドイツ「もうちょっとがんばれイタリア。俺達は自分の国まで帰らなくてはいけないんだから、まだまだ先は長いぞ」

日本「あ、みなさん。今日は私の家に泊まっていきませんか？」

アメリカ「いいのかい！？」

アメリカが目を輝かせた。

さいほの「疲れてるしな」

苑子「お泊りだねー！」

ほのか「フランス、変なこと考えてないよね？」

フランス「え、え！？別に何も！？」

なつじ「考えてたな」

中国「完っぺき考えてたある」

イギリス「変態髭野郎が！」

フランス「な！？お兄さん怒ったよ！？この元ヤン紳士！」

イギリス「んだとこのー！」

ロシア「二人とも、他の人に迷惑だからやめようね？」

イ・フ「……………」

ロシアが笑顔で水道管を構えて言ったため二人はシュンとなつていがみあうのはやめた。

日本「では、行きましょうか」

12人は満天の青空の下、日本の家へと足を進めた。

その55 夏休みの終わり（後書き）

（反省会）

ほのか「夏休み編、完結！！」

な・そ「いえーい！！！」

さいほの「いやぁ長かったねー」

ほのか「夏休み編、約40話です！」

なつじ「どんだけ長いんだよ！！！」

苑子「8月からやっててかれこれ12月っすよ。サマーからウィンターですよ奥さん」

なつじ「奥さん誰だよ」

さいほの「とりあえず……読者の皆様、ダメダメ作者が書いたこの夏休み編を今まで読んでいただきありがとうございました」

ほのか「ホント、長引いてしまって申し訳ありません！！」

苑子「次回からは普通の日常になると思っんでよろしく願いしま

「す」

なつじ」では、これからよろしくお願いしまーす!~!」

ということをやっと、夏休み編完結です。ホントに長かったな……

次回からは季節吹っ飛んで冬になります。クリスマスや年末の話と
か書きたいです。

では、読んでくださりありがとうございました!!

感想・意見・質問などありましたらお願いします!!

その56 冬の風物詩（前書き）

実はかくかくしかじかで

なるほど

by 苑子、日本

久しぶりに日常的なのを書きました………

さいほのがキャラ崩壊してますw

その56 冬の風物詩

雪がちらつく季節、冬。

もうすぐで年も明けるその時期、

私達はこたつに入ってみかんやらアイスやらを食べてのんびりしていた。

ほのか「うー……寒いねー」

なつじ「もう最近急に寒くなっちゃったねー」

苑子「ほんとだよー、もぐもぐ」

私達がのんびりみかんやアイスを食べながら話していると……

さいほの「ホント急に寒くなりすぎだよー！そりゃいきなり夏から冬になったんだからなー！」

さいほの「テーブルをバンツ！と叩いて私達に怒鳴った。
お、お茶がこぼれるわアホー！」

ほのか「な、なんでそんなにキレぎみ！？」

さいほの「そりゃキレるわー！夏休み終わったと思って涼しい秋を

楽しみにしてたらいきなり雪がちらつく冬！？何さりげなくワンシ
ーズンふってばしてんだ！気温変わり過ぎじゃボケエー！！」

なつじ「何をそんなにキレル！？」

苑子「さ、さいほのがご乱心だああああー！！」

ほのか「つかさいほの別に秋好きじゃないよね？」

さいほの「うん」

ほのか「じゃあ怒ることなくね？」

さいほの「黙れええええー！！」

ほのか「いきなり怒鳴らんといてええええー！！」

耳元で叫ぶな！

日本「どうかなさいましたか？」

家の仕事を済ませた日本が襖を開けて私達のいる居間に入ってきた。

さいほの「いや何も」

なつじ「何もねーわけねーだろ。元凶のお前が言っな。」

苑子「実はかくかくしかじかで」

日本「なるほど」

わかるんかい。

日本「さいほのさん、秋もいいですけど冬もいいですよ。雪や活気溢れる街、そして何より行事がたくさんあってとても楽しい季節です」

さすが日本。四季を愛する国

さいほの「そーか？ただ寒いだけじゃん」

なつじ「そんなことあらへんよ！！私は冬好きだよ！！」

苑子「名前が『なつみ』だから？」

なつじ「いや字違うから。『夏美』とか名前に夏入ってないし。『菜摘』だから、私」

そんな全否定しなくても……………

苑子「さいほの、日本も言ってた通り冬にはいろんな楽しい行事があるんだよ？」

さいほの「例えば？」

苑子「私の誕生日！」

なつじ「知らねーよんなもん」

ほか「じゃあ私の誕生日……」

なつじ「同じボケはいいから。そんなことよりもっと大きい行事があるでしょ」

そんなこと言っなー！

さいほの「それって……」

なつじ「そう………クリスマスー！」

なつじがやけに目を輝かせて言った。

その56 冬の風物詩（後書き）

〈反省会〉

なつじ「やっぱこたつに入りながら食べるといったらみかんだよね
ー」

ほのか「え、私アイスがいい。みかん苦手だし」

さいほの「こんなクソ寒い時期に普通アイス食うか？」

ほのか「暖かいこたつに入りながら冷たいアイスを食べるのがまた
いいんじゃないか」

さいほの「ふうん。まあ私は別にどっちでもいいけどね」

なつじ「苑子はこたつに入りながら何食べるのが好き？」

苑子「んー？たけ。この里ー」

.....

ほ・さ・な『予想外の答えキターー！……』

日本「たけ。この里って……」

苑子の答えにどうやって返すか困ってしまう4人であった……

その57 冬の街はとにかく賑やか！（前書き）

ペッシェ！！！

byさいほの&なつじ

相変わらず短いです……

その57 冬の街はとにかく賑やか！

ほのか「あー、クリスマスか。そんなのあったねー」

苑子「忘れてたのかよ！」

クリスマスかー。まえの世界にいたときはこの時期は楽しかったなあ……

さいほの「クリスマスねえ……ぶっちゃけ街とかカップルとかが盛り上がってるだけで私達みたいなふつーの奴らが盛り上がるんじゃないし……」

ほのか「さいほの、いつからそんなに夢のない子になっちゃったの！？」

なつじ「生まれたときからじゃないかな」

さいほの「私そんな前から現実見てないから。なつじ私にどんな印象持ってるの」

さいほのが軽くなつじを睨みつけながらみかんを口に入れる。

日本「とにかく、一回外に出てみませんか？きっと冬のいいところが見つかるかもしれませんよ」

さいほの「やだ、寒いもん」

ほのか「何がしてえんだてめえは!!」

私はスリッパでさいほの頭を叩いた。

さいほの「私はゴキブリか………」

さいほの「さみい」

さいほのが鼻を赤くして呟いた。

12月の中旬で外はもう寒いから私達はコートを着たり、マフラーを巻いたりして寒さをしのいでいる。

ほのか「イルミネーションとかつけてる家、たくさんあるね」

なつじ「夜とか綺麗だよな」

さいほの「電気代の無駄だけだな」

苑子「さいほの、無理矢理現実には引き戻さないで」

日本「さいほのさん、いつもよりテンション低すぎませんか？」

あ、確かに。

なんでや？

さいほの「寒いからね」

そんな理由で現実見んなや。

私達は日本の家の近くの住宅街を歩きながら、やがて商店街についた。

商店街はクリスマス一色でよく見るとカップルが多く……

さ・な「ペッツー……！」

ほ・そ・日「……………」

何をそんな……………

苑子「ジングベル♪ジングベル♪すっずーがー鳴るー♪」

なつじ「うっさい」

苑子「えー、いいじゃん。クリスマスなんだからさー」

さいほの「お黙り」

苑子「……………（・ω・）」

冷めてんなー、さいほの。

なんでこんなに冬嫌いなんだろう？寒いっただけじゃないよね？

さいほの「あー、やっぱり外に出るんじゃないかった。寒くしゃーないわ」

さいほのが体を震わせる。

なつじ「ん？あれイタリアとドイツじゃない？」

なつじが指さす先には楽しそうに話すイタリアとそれを聞くドイツがいた。

その57 冬の街はとにかく賑やか！（後書き）

く反省会？く

苑子「はい、ということでこの話を投稿した日、12月13日は何の日でしょう！？」

なつじ「知らん」

ほのか「知るか」

さいほの「知るわけねーだろバカタレ」

苑子「ひどいよみんな！！」

ほのか「で、何の日なの？」

苑子「それは……………」

さいほの「薮崎の誕生日？」

苑子「……………」

ほ・な「……………」

さいほの「……………あれ？当たり？」

苑子「答えは私、薮崎苑子の誕生日でしたーっ！！イエー！！」

ほ・な『さいほのの言葉なかったことにしたああああー！！』

というわけで、

HAPPY BIRTHDAY 苑子！！

なつじ「私の誕生日の時なんもなかった？」

→7月1日誕生日

..... ; ; ,

す、すごい遅れたけど.....

HAPPY BIRTHDAY なつじ！！

ごめん、なつじ.....

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0341t/>

friend and world!!

2011年12月13日22時48分発行